早稲田大學卅六年度
文學科二年講義録　西洋中世史

明治　淳田和民

62
.395
62-392
1200701681046
高橋藏書

始

浮田和民講述

西洋中世史

前編

早稻田大學出版部藏版

西洋中世史前編目次

緒論……一
第一期（紀元後三七五―同八四三）……七
第一章　北歐蠻族の大移動……七
第二章　西羅馬帝國の瓦解……三〇
第三章　西帝國瓦解の結果……七三

西洋中世史

緒論

浮田和民講述

羅馬帝國の二大事變　古代羅馬帝國時代の末期に於て二大事變を生じたり。第一の事變は羅馬帝國の基督教化したることにして第二の事變は其の野蠻人に進入せられたること是なり。原動あれば又た反動あるは啻に物質界の理法のみに非ずして又た社會上の原則なりとす。羅馬帝國の基督教に化せらるゝや基督教も亦た羅馬化せられて中世西歐の基督教即ち所謂羅馬迦特力教を生じたり。而して羅馬帝國の野蠻人に進入せらるゝや野蠻人は從つて羅馬の文化に感染し祖先の宗教を拋棄して基督教に改宗するに至れり。西羅馬帝國の瓦解するに當りてや羅馬を中心としたる基督教會は依然として其の組織を維持し、漸次

野蠻人をして其の教會の管轄に屬せしめ、西歐一般羅馬の監督（ビシヨップ）を仰いて宗教上の法王となし、其の指揮命令に服する僧侶を以て政治上の顧問となし、以て中世の國家を創立し、近世列國の基礎を設定するに至れり。苟くも此の事實の眞相を穿つに非ざれば近世史上の現象を理解すること能はざるなり。

中世史の要素　されば中世史の要素は一方に於て日耳曼其他の野蠻民族と之に征服せられたる羅馬帝國の遺民即ち是なり。前者をして後者の文化を吸收し、遂に二者を同化せしめたるものは羅馬基督教會なり。此の基督教會の僧侶は固より被征服者たる羅馬の遺民に外ならざりしも彼等は宗教の功德によりて却て征服者たる野蠻民族を支配することを得たり。是を以て羅馬教會は中世史上に於て殆んど古代史に於ける羅馬帝國の位置に代り、又た近世史上に於ける万國公法の効力を有し、以て天下の秩序を制定するの權力を有したり。故に羅馬教會は中世史上の中心的勢力なり。列國は其の周圍にありて順次に發生し、其の指導によりて稍やく成長の運を開くことを得たり。マコレー卿が「英國は羅馬迦特力教に負ふ所多きか或は宗教改革に負ふ所多きか之を言ふこと難し」と言へるは亦以て之を歐洲一般に適用することを得べし。而して、野蠻人等が西羅馬帝國を蹂躙せし時より文藝復興の時に至るまで羅馬教會の勢力は概して科學の爲め、文明の爲め又た善政治の爲めに稗益したり。然れども過去三世紀の間は人心の發達を遮斷するを以て其の主要なる目的と爲したり。基督教國を通じて知識に於て、自由に於て、富に於て、又た生活の藝術に於て如何なる進歩を爲したるにせよ、是れ皆な羅馬教會に反して爲され、而して何れの處に於ても羅馬教會の勢力に反比例を以て爲されたり」と言へるも亦た事實なりと言はざる可からず。蓋し一の時代に於て世界の進歩を增益したる善制度は之が變革を怠り其の改善を爲さずして舊制度の儘に保存せんとするときは却て社會の開發を妨害する惡制度となるを免かれざることは古往今來一定の通則なればなり。唯だ今日の時勢に於て文明の進歩を妨ぐるの制度なるが爲めに、其の過去に於て社會の發達を指導したる功績を沒す可からざるなり。

世界の進歩　夫れ世界の進歩は同一民族の力によりて成るものに非ず。必ずや數多の民族相協力して前代の成績を繼承し、更に之を後代に遺傳して間斷

なからしむるを要す。然れども是の如く數多の民族をして間斷なく文明を繼承せしむることは過去に於て容易の事に非ざりき。何となれば同一の民族は漸やく文明に進みて繁榮を爲すに至れば其の社會必ず腐敗して新鮮なる野蠻民族の爲めに征服せらるゝを常とし、其の野蠻民族が被征服者たる開化民族の文化の程度に達するまでには數多の年月を要し、其間社會は一時退歩して暗黑の時代を現出することを免かれざるなり。故に人間世界の進歩は直線的進行に非ずして一昂一低、一進一退、常に螺線的進行の形狀を爲すものなり。カルデヤ、埃及、亞西里亞、巴比倫、波斯及び。歴山大王の帝國の亡滅の如き一として之を證明せざるはなし、而して羅馬帝國の瓦解は其の最大著明なる實例なりと言はざる可からず。古代の文明は希臘羅馬に至りて其の絶頂に達し殆んど歐洲近世の開化を凌駕せんとするの勢なりき。然るに此の文明を抱擁したる羅馬帝國を蹂躙して之を崩解せしめたる日耳曼民族の開化はコロンブスが新世界發見の際に於ける野蠻なる北米土人の程度に在りて固より希臘羅馬の文化を理解するの能力を有せざりき。而して彼等が希臘の文學を理解し、羅馬の法律を吸收し、古代の文藝を復興し得るまでには一千年間の經驗を要したり。蓋し近世の歐羅巴人が古代希臘、羅馬の文化を摸倣し、遂に一歩を進んで其の以上に發達するの傾向を生じたるは未だ僅に三四百年來の現象に外ならず。而して中世史の意義實に其中に存するを知る可し。

中世史三要素の關係

是の如く西部亞細亞及び埃及に發生し希臘に於て無比の發達を爲したる文明は悉く羅馬帝國に注入して歴史上の大湖水となり、又た之より噴出して近世歐米諸國に於ける開化の源泉となりたり。而して中世に於ける文明の三大要素は(一)日耳曼民族の要素、(二)羅馬の要素(三)基督教の要素即ち是なり。三者その一を缺くときは遂に近世の文明を爲すこと能はざるなり。第一の要素は不羈獨立の精神を供給し、第二の要素は其實二重にして希臘の文化及び羅馬の法律を合併し、第三の要素は希伯來人の宗教道德思想を含蓄したり。第一のみにては野蠻的自由にして以て秩序あり進歩ある文明的自由を成立せしむるに足らざるなり。第二の要素は羅馬帝國の晩年既に衰微に屬し、更に此上に發達するの精力及び天才を缺乏するに至れり。第三の要素は希伯來思想の精華

とも言ふ可きものなれども希伯來人の間に在りては却て拋棄せられ希臘人及び羅馬人によりて採用せられたり。是等の諸要素を抱合せしめて更に一大進化を爲すの氣運を釀成するは是れ中世史の眞相にして其の時期の久しきに渉りしは其の諸要素の如何に複雜にして化合するの困難なりしかを證し、而して其の結果として發生したる近世文明の根底如何に鞏固にして其の前途如何に永久に進歩發達すべきかを知るに足れり。

中世史の時期

西洋の中古は紀元後第五世紀より紀元後第十五世紀の終りまでなり。之を四期に區別するとを得べし。第一期は野蠻人の羅馬帝國進入(紀元後三七六)よりウエルダン條約獨、佛、伊三國の起原(紀後八四三)までにして所謂最暗黑の時代なり。蠻族漸やく各地に割據し列國將さに其の萠芽を出さんとす。第二期はウエルダンの條約より第一十字軍の出發に至るまで(紀元後一〇九六—同一二七〇)にして聖羅馬帝國及び列國起原の時代なり。全歐封建の大勢既に成る羅馬帝國の遺制度たる羅馬迦特力教普及するの時期なり。第三期は十字軍の時代(紀元後一〇九六—一二七〇)にして迦特力教全盛を極め歐洲列國が東方アラビヤ帝國の文化と接觸し漸やく暗世

の迷夢を醒まさんとするの時期なり。第四期は中世の末期、復活の時代にして十字軍の終結より新世界の發見に至る(紀元後一二七〇—一四九二)正に是れ列國勃興、文藝復活及び遠洋航海の大事件を發生するの時期なり。

第一期(紀元後三七五—同八四三)

第一章　北歐蠻族の大移動

羅馬帝國　近世帝國主義と云へば必ず一の民族的國家が他民族の國家を征服し、其の數多の國家を併呑して諸國諸王の上に君臨するの謂なるが故に帝國主義とは即ち膨脹を意味し、征服を意味し、併呑を意味するを通例とす。羅馬の帝國主義は之に反せり。元來羅馬人の膨脹して他民族を征服し、諸邦國を併呑したるは專ら其の共和時代(紀元前五一—同二九〇)の事蹟にして帝國時代となりては僅かにブリテン島の征服(紀元後四三—同八四)及びダニューブ河北のデシヤ征服(紀後一〇一—一〇七)(ダキヤ(今のマニヤ東部)匈牙利、及びツランシルバニヤ)ありしのみなりとす。

羅馬人は紀元前七百五十三年頃伊太利タイバー河畔の一小市邑より起りて七百年間着實鞏固にして然かも間斷なき侵略膨脹を爲したり。彼等は先づ四隣の民族を征服して之を同化し更に侵畧の基礎成りては復た膨脹を爲し、前進するに當りては必ず其の經過すべき中間の土地民族を征服し連續的に侵畧し、間斷なく膨脹し且つ漸次被征服者をして彼等の政權に參與せしめ、其の被征服者をして羅馬の法律に服從せしめ、彼等に兵役及び納稅の義務を負はしむるの外其の宗教及び風俗習慣を尊敬して猥りに之に干涉することを爲さゞりき。是の如き愼重寛大の政畧によりて羅馬は遂に地中海周圍の諸國を統一し、地中海は全然羅馬帝國の大湖となり、羅馬人の有名なる道路と共に中央集權の爲めに必要なる交通の方便となるに至れり。元來羅馬の政躰は共和制にして元老院、人民會議あり、又た二人の統領及び其他の官吏ありて人民會議に撰擧せられたりしが此の制度は羅馬市制の生產物にして其の版圖がラチウム若くは伊太利に限られたりし間は之にても政治を施すに左まで差支なかりしと雖ども羅馬の政權一旦伊太利以外に涉りては到底此の制度を維持すること能はずして內亂相踵ぎ、遂に大英傑ジユリアス

シーザル兵馬の權力によりて悉く羅馬の政柄を掌握し爰に帝政の基礎を確立することを得たり（紀元前四五）。彼れは不幸にして不平黨の爲めに刺殺せられたりしかども彼れの相續者たる大姪オクタウイアヌス起りて彼れの事業を繼承し、一身に羅馬の大權を總攬し而して元老院よりアウガスタスの尊號を受け（紀元前二七）其の制度を後世に傳へて長く羅馬帝政の摸範となすに至れり。彼れより以後人民會議は廢止せられ、獨り元老院の存するありて共和時代の傳說を存し、皇帝を撰擧し、又た彼れの樞府として大政の機密に參與したり。然れども其實皇帝は軍隊の力によりて獨裁し、軍隊の意志に反しては元老院の撰擧も其の効力を有せざりき。而して後世羅馬法律家の說によれば羅馬人民は全然その主權を皇帝に讓與したるものと假定せられたり。されば羅馬の帝政は共和國の遺風を存し遂に世襲的君主制となることなかりき。

是の如く羅馬の帝政は本と共和時代に膨脹したる大版圖を保守して能く之を統治せんが爲めに起りしものなるが故に、其の帝國主義の概して平和的保守的なりしこと亦た怪しむに足らざるなり。アウガスタス治世の初期に當りて羅馬の將

軍等は南の方エシオピヤ及びアラビヤを征服せんと欲し、夏至線を去ること一千哩の南まで進入したりしかども熱氣の爲めに制せられて其の目的を達することの能はず、又た北方に於ては日耳曼內地の蠻族に向つても屢々遠征を試みたりしかども蠻族等は其の深林大澤に據りて逆擊を爲し却て羅馬の全軍を覆滅せしめたり（紀元後九年頃）アウガスタス帝死するに臨みて將來帝國の版圖は其の自然的境界を守り其の以外に擴張するの不可なることを遺言し、西は大西洋、北はライン及びダニユーブの二流、東はユーフレチース河及び南は亞非利加及びアラビヤの沙漠を以て邊境と確定したり。爾後ブリテン島及びデシヤのみ增加するに及びしかども二者ともに最も早く羅馬帝國の版圖より脫離したる部分なりき。而して以上大帝國の平和は海陸兩軍相合して四十五万の常備軍を以て維持せられたり。

此の帝國の東にはパルシヤ王國（紀元前二五〇頃―紀元後二二六）ありて古代の波斯王國に代り、尋で新波斯王國（紀元後二二六―同六五二）起りて又た之に代り、兩王國ともに羅馬帝國東邊の患を爲したりき。又た帝國の南には亞剌比亞人ありしかども彼等はアラビヤ半島の沙漠に住居して未だ世界の恐怖とはならざりき。獨り帝國の北方に野蠻なる日耳曼民族、スラヴ民族、及び亞細亞諸民族ありて常に帝國の間隙を窺ひ最も帝國の危險と見做されたり。然れども羅馬の兵勢衰へざりし間は能く是等の蠻族を控制して帝國に侵入することを得ざらしめたり。唯だ羅馬の兵力を以てしても如何とも爲すこと能はざる一大勁敵却て帝國の內部より現出したり。基督教即ち是なり。

基督教の興起

宗教史上の立脚點よりするも又は政治史上の觀察點よりするも世界史上に於て基督教の現出ほど其の影響の大なるものはあらざるなり。殆んど一千八九百年間の世變を經過しながら基督教は今猶ほ文化、藝術、及び兵力に於て世界に冠たる歐米諸國民の尊信する所なるのみならず、歐米人の熱心なる傳道と其の殖民移住の結果とにより六大洲中到る處に於て弘布せられつゝある所の大宗教なり。其の創立者たる基督は紀元前四年頃羅馬帝國の初代アウガスタス帝の治世中帝國の一隅猶太國に生れたり。然かも彼れは歷史上に於て直接何等の證跡をも遺さずして死したり。猶太人は天下の諸國民と異にして獨一眞神を崇拜し、獨り自ら此の眞神の撰民なりと信じたりしに反つて羅馬人の爲めに

征服せられたり。故に彼等は頻りに彼等をして此の束縛より脱せしむべき救世主の出でんことを熱望したりき。然るに耶蘇基督彼等の中より。起りて救世主と稱し、新なる神の王國の建設者なりと宣言せしかば數多の人民一時彼れに從ひしが彼れの王國は眞理の王國にして此世の王國に非ずと云ふに至りて彼等大に失望し却て彼れを羅馬の帝國の地方官に讒誣し之を磔刑に處せしめたり。畢竟基督の敎義甚だ高尚にして彼れが一方には猶太の宗敎的實權を有したる形式僞善のパリサイ敎徒を攻擊したると一には猶太の一般人民が有したる政治的救世主の熱望に反し超政治的宗敎を唱道したるが爲めなりき。然るに彼れの死は彼れの門人等に一種の活火を注ぎたるが如く彼等は遽かに基督を以て眞神の化身なりと信じ生命を睹して基督の福音を宣傳し遂に之を猶太國外に弘布するに至れり。基督の敎義は猶太敎(Judaism)に基きて無形の獨一眞神を崇拜するを眼目となしたり。唯だ彼れは猶太人の如く此の眞神を以て獨り猶太民族のみの神となすことなく此の眞神は凡ての人類の父にして人は皆な兄弟なれば己の如く他人を愛す可きことを宣傳したり。然れども基督は極めて沈靜なる生活を爲し、自家獨得の宗敎を宣傳するに及びてもモハメッドの如く國家の主權を把持し刀劍の光輝を假りてこれを弘布するの意なかりしが故に彼れは彼れより四百年以前雅典人によりて死刑に處られたる賢哲ソクラテスの如く直接歴史上の人物なりと言ふことを得ざるなり。當時羅馬帝國は平和にして交通の便一時に開け文武官吏及び商賣の往來は言ふに及ばず世の所謂碩學及び史家にして東方を遊歴したるもの少からざりしも基督に就て何の記載する所なかりき。基督敎の始めて歴史的現象となりたるは紀元後第二世紀の初期にして、當時の史家タシタスはニロ帝(紀元後五四—同六八)の治世十年羅馬の大火に際し同帝が無實の罪を基督敎徒に歸して彼等を無殘の刑戮に處したることを記載したり。基督の名歴史に表はれたるは即ち此時にして基督敎は既に羅馬に於ても多數の信徒を有したること證明せられたり。紀元後第二世紀の後半期より傳はれる四福音書は基督敎徒の間に成りたる基督の傳記にして半ば神話的なりと言はざる可からず。然かも其中に描出せる基督の人格は普通人の想像を以て作爲し得べきものに非ず。其の敎訓の如きも基督の如き偉大なる人格者によらずしては到底言ひ得べからざるものあ

り。是の如く四福音書中に見ゆる基督の人格の高貴なると其の教訓の超絶にして道德上及び宗教上の眞理を直覺的に表はし其の人格教訓ともに天下後世に偉大なる感化及び影響を與へたるとにより、間接に基督の歴史的人物なることを推論的に證明することを得べし。

基督教の勝利

基督は一の書を著はさざりき。然れども彼れの教を傳ふる所の新約聖書は今猶ほ歐米に於ける宗教道德の基本にして又た倫理學の原則なりと言ふことを得べし。彼れの教を說くや其の足跡は猶太の國土を出でざりき。然かも其の門弟及び信徒の熱心なる傳道により彼れの福音は羅馬帝國の各處に宣布せられ紀元後第三世紀に及びて基督教徒等は遂に羅馬帝國に於て隱然一敵國を爲すに至れり。西はブリテン(今の英國)の孤島より東はユーフレチースの河畔に到るまで基督教會の監督より一片の紹介狀を得て之を携帶する信徒等は帝國の何邊に旅行するも其の沿道の各處に於て同信徒の助力及び保護を受ることを得たり。彼れは到る處に於て兄弟姉妹を發見し、貧なれば救助せられ、疾あれば看護せられ、假令ひ其の言語不通なる場合に於ても記號によりて互に同一宗教の

信徒たることを認識したり。羅馬帝國は彼等が皇帝よりも神若くは基督に多く忠實なるを見て國體に害ありと爲し、特に賢明なる諸皇帝は勉めて彼等を嚴刑に處し彼等を撲滅せんことを欲したり。而して基督教徒の行爲も亦た多少此の迫害を挑發したるの形跡あり。彼等の私行は實際間然する所なかりしも彼等は偏狹にして凡て他の宗教を誤謬とし他教の神を僞神となし、他教徒の如く相容るゝことを能はざるのみならず、凡て偶像教の關係ある職業及び式典に參與することを爲さず、羅馬帝國が凡ての軍人及び官吏に要求したる皇帝の像を崇拜するの義務を避けんが爲め彼等は軍人及び官吏となることを爲さゝりき。且つ彼等は其の宗教的會合を爲すに當り他の人民の嫌忌を避けんが爲め、中夜秘密に集會を爲すの習慣を有したり。而して是れ羅馬皇帝の禁制に反したり。羅馬人は凡て民族一般に崇信する所の宗教を尊敬したれども新奇に宗派を起すものを許さゝりき。基督教徒は屢帝國の全力を擧げて迫害せられたりしかども當時凡ての民族的宗教は其の國家滅亡して群神も捕虜となり羅馬の万神宮(パンテオン)に合祀せられ、遂に其の威力を失ひたると一には羅馬皇帝の政策一定ならずして基督教嚴禁の勵行間斷あり

しが爲めに、基督教は益々帝國に蔓延し、殉教者の血は教會の播布せらるゝ種子となり其の勢制す可くもあらず、帝國却て之に依賴するの必要を生じ、コンスタンチン大帝紀元後三一三に至りて全く公許せられ、羅馬帝國の國教と認識せられ、セオドシアス一世に及んで遂に希臘羅馬舊來の宗教を禁止するに至れり紀元後三九一基督教の勝利は羅馬帝國が其の精神的勢力に於て如何に薄弱なりしかを證明したり。

帝國の內部に於ける蠻族

其の物質的勢力の如何に衰微しつゝありしかは其の軍隊の蠻族化したることによりて知られたり。アウガスタスは邊境防禦の爲めに蠻族をして帝國の領土內に住居せしむるの政策を用ひ、且つ其の親衛兵中にも多く勇敢なる蠻族特に日耳曼人を編入せしめたり。然るに帝國平和の結果羅馬人は次第に其の勇氣を消失し、帝國の人民悉く兵役を厭ふの習慣を生じ、羅馬の國庫は軍隊に對する俸給の增加、恩惠の濫與、其他種々の奬勵によりて空乏を告るに至れり。又た老功の兵士には其の報賞として土地を與へ、子孫をして兵たらしむるの條件により之を世襲せしめ封建兵制の萠芽を發生したり。當時羅馬帝國の人口減少し、軍役の需要大にして其の供給不足し、奴隸をも兵に採用し且

欠

帝國を蹂躙せんとする蠻族の間にも亦た傳播せられて彼等をも制服せんとしつつありき。第四世紀の終りまでは羅馬帝國の邊境に接近して住居したる蠻族等は概して基督教に感化せられたり。

蠻族大移動の始（紀元後三七五）

皇帝アウレリアンの治世（紀元後二七〇―二七五）に當りて蠻族中西ゴス人最も帝國の患を爲したりしかば遂にダニユーブ以北の領土デシヤを拋棄して彼等に讓與し、爾後百年間邊境無事なることを得たり。然るに第四世紀の後半期に至りて亞細亞と歐羅巴との中間にある荒野の中より羅馬帝國を震動せしむべき大波瀾を生じ來れり。

元來亞細亞と歐羅巴とは地理上に於て何等の區別なき一大陸なり。歴史上名稱の區別起りし以來雙方全たく歴史的關係なく若くは唯だ大反對あるものゝ如く思ふに至りしは大なる誤謬なり。歐羅巴は地理的に云へば亞細亞に附屬したる大半島に過ぎざるも歴史上重大の位置を占むるが故に、別に名稱を附するの必要を生じたり、然れども其實歐羅巴と亞細亞とは地理上に於て連絡あるが如く又た歴史上に於ても密接の關係あるを記憶せざる可からず。古來亞細亞歐羅巴の諸

欠

民族は互に東西より進入して歴史上の大事變を惹起せしめたり。古代に於ける歴山大王の印度の遠征の如きは歐羅巴より亞細亞に進入したるの一例なり。近世史上に於て第四世紀には匈奴(ハン)、第六世紀にはアウアール人、第七世紀にはブルガリア人及びカージャル人、第九世紀には匈牙利人、第十三世紀には蒙古人及び第十四世紀には土耳古人相踵で亞細亞より歐羅巴に進入したり。匈奴の進入は即ち羅馬帝國の北東に於ける諸蠻族を震慄せしめて西羅馬帝國を崩壞し、又た最後に於ける土耳古人の進入は遂に東羅馬帝國を滅亡せしめたり。

西暦紀元の前後に當りて亞細亞歐羅巴大陸の兩端に二大帝國屹然として存したり。一は支那帝國にして漢の時代(紀元前二〇二―紀元後二二〇)に當り、他は羅馬帝國即ち是なり。此の二大帝國の中間及び其の北方には數多の野蠻人種生存して常に帝國の間隙を窺ひ、共に二大帝國の大患を爲せり。其の最も猖獗なる者を匈奴(ホンヌ)と爲し、其の酋長は單于と稱したり。秦始皇帝は萬里の長城を築きて彼等に備へたりしも、紀元前二百一年、匈奴は支那に亂入し漢の高祖自ら將として之を擊ち平城に至り却て匈奴の爲めに白登城に圍まるゝこと七日、陣平の計を用ひ單于の妻に賄ひ辛

うして免かるゝことを得たり。匈奴は世々漢の患を爲し、漢帝は幣帛や美女を贈りて平和を購求するの陋手段を取りし程なるが武帝の時(紀元前一四―同八七)に至りて大に匈奴を擊ち其の勢力を挫きたり。爾後南北匈奴に分裂して次第に衰微したりしが其の最も勇敢なるものは漸やく西漸して一派は西南に向ひ裏海の東方なるソグヂアナの平原に達し、波斯帝國の邊境に接して其の患となり、又た他の一派は西北に向ひ遂に歐羅巴に進入したり。固より支那邊境の患を爲したる匈奴と羅馬帝國に進入したるハン人と同一なるや否や多少の疑なきに非ずと雖ども佛國の東洋學者ド、ギーニュの著述(一七五六―一七五八)ありし以來二者の連絡あること殆んど確實なるものゝ如し。有名なる史家ギッボンは實に彼れの研究を事實として其の羅馬衰亡史に大書したり。

歐羅巴に於けるハン人の正史は實際紀元後三百七十二年頃より始まるものとす。此時彼等は裏海の北原より西に進み、妻子家畜及び同盟を率いてウオルガ河を渉りアラニー蠻族の上に侵し來れり。アラニー族も亦た東方遊牧民族の一にして當時東歐羅巴なるウオルガ河及びタナイス(今のドン)河の間に天幕を張りて蔓延

し北はシベリヤ南は波斯及び印度までも侵犯し、其の武勇に於てハン人に劣る所なかりき。兩蠻族はタナイス河に於て大激戰を爲し、アラニーの王戰死し、ハン人遂に大勝利を得たり。アラニー族の大部はハン人と聯合して西の方ゴス人の王國に侵入したり（紀元後三七五）。

是時東ゴス人の王ヘルマンリク（エルマナリク）は西ゴス人を始めとし數多の蠻族を征服し其の版圖はバルチク海より黑海に跨がり、現今の獨逸の大部分を包含したり。ゴス人はコンスタンチン大帝の寬仁大度に服し、邊境を犯すことなかりしがワレンチニアン一世（ワレンチニアヌス）位に即き（紀元後三六四―三七五）其弟ワレンスを以て東部を管轄せしむるや叛將プロコピウスは蠻族ゴス人を誘ふて其の援兵となし、西ゴス人三萬ダニユーブ河を渉りて帝國内に進入し皇帝ワレンス辛うじて之を平げ爾後ゴス人とダニユーブ河上に於て相戰ふこと三年に及び（紀元後三六七―三六九）遂に蠻族を破りて和を命ずることを得たり。爾後六年間羅馬帝國とゴス人との間平和なりしに、紀元後三百七十五年圖らずも匈奴の大軍ゴス人の王國に亂入し、其數甚だ大にして其勢甚だ强く、且つ運動迅速にして土地を荒し、村落を燒き、殺戮殘忍到らざるなく、老王ヘルマンリク自盡して東ゴス民族悉く匈奴に征服せられたり。是に於て匈奴の酋長バラミルは西ゴス人の領土に侵入したり。

西ゴス人ダニユーブ河を渡る（紀元後三七六）　西ゴス人の酋長アタナリクはニーステル河に於て匈奴の軍を防がんとなしたりしも匈奴は月光に乘じて河を渡り、西ゴス兵の後に出で、アタナリクは辛ふじて退却することを得たり。彼はプルート河とダニユーブ河との間に於ける山地に據り且つ昔時ツレージヤン帝（ツラヤヌス―紀元後一一七―一九八）が建設したる長壁を更に高くし、頻りに防戰の策を運らしたりしが、其の防備未だ完成せざるに先だちて匈奴は既に迫り來りゴス人は恐怖の餘り一戰を爲すこと能はず、ブリチゲルン及びアラウイウス之を率ゐてダニユーブ河畔に退き、東羅馬皇帝ワレンスの保護を哀求するに至れり。

是時ワレンスは東邊の患を防がんが爲めシリヤの首府アンチオクに皇居を定めたりしが北方に大變動起りてゴス人の王國瓦解し、西ゴス人は皇帝の保護を哀求し、若しスレース（ツラキヤ）にある荒廢の地を與へられなば永久羅馬帝國の法律に服從し、其の邊境を保護し以て高恩に報ゆ可しとの請願に接し、皇帝を始め舉朝一

時愕然たりしが深謀遠慮に乏しき帝國政府は匈奴の西漸を以て天助となし、羅馬は力を用ひずして西ゴス人を征服し得たりと爲し、且つ彼等の歸化したる爲めに徵兵の國費を省くを得べしと思惟し、二個の條件を附し容易に西ゴス人の帝國領土内に移住することを許可したり。二個の條件とは彼等の兵器を收むること及び彼等の子を以て質となし、小亞細亞の諸方に置き之を敎化することなりき。ダニユーブ河の下流幅凡そ一哩あり、且つ當時連雨によりて河水漲り、激流の爲めに溺死する者少からざりしが帝國政府は大小種々の舟筏を備へ一人も殘らず南岸に達せしむることを得たり。野蠻兵士の數凡そ二十萬人之に、妻子及び奴隷を加ふれば殆んど百万人に近かりしならん。其の重立ちたる身分の子弟は質として直ちに引き分けられ其の定住地に派遣せられたり。蠻人等は止むことを得ず此の條件に服從したりしが兵器の引渡に至りては何分にも約束に從ふこと能はずして之が代償を出さんことを請求し、貪婪なる羅馬官吏は容易に此の請求をも許可したり。是に於て蠻人等は一時其妻若くは其女若くは美男子を容れて羅馬官吏の淫樂に供し或は其の財產家畜及び奴隷を擲ちて彼等の貪欲を滿たしめ、蠻人等は名譽の記號、安全の擔保として貴重したる武器を携へて河を渡り、下メーシヤの平原及び山地に集合したり。是の如くして多數の野蠻人を領内に入るゝさへ甚だ無謀の事なるに、貪欲深き羅馬の二將リユビシヌス及びマキシムスは非常の高價にて之に不良の食物を供給したり。ゴス人は奴隷及び子女を賣りて之が代償となし、豐饒なる土地にありて人爲的饑饉に遭ひ、不平不滿の極武器を携へたれば此の饑饉を救濟すること難からず、遂に軍旗を翻へして下メーシヤの首府マルシアノポリスを陷れ、曩に帝國軍隊中に編入せられたるゴス人等之に加はり國中を掠め、殘暴を極めたり。是時東ゴス人も亦た帝國の許可を待たずしてダニユーブ河を涉り來りしかば西ゴス人は之と和合し、且つ匈奴の騎兵をも招き迎へて援軍となしたり。而して帝國の西部ゴール地方にはアレマンニー同時に侵入し西部の皇帝グラチアヌス來り救ふこと能はざりき。

セオドーシアスの事業

東部の皇帝ワレンスは急にゴス人の亂を平げんと欲して出陣し、アドリアノープルの市外十二哩の處に於て西ゴス人を攻めたり。然るに羅馬の軍隊は蠻族の騎兵に圍繞蹂躙せられて皇帝ワレンスを始めと

し四万人(全軍三分の二)戰死したり(二一七八年八月九日)。蠻族等は益々猖獗にして東はコンスタンチノープルに迫り西は伊太利の境に及びたり。是に於て西部の皇帝グラチアヌスは西班牙の片隅に閑居したる英傑セオドーシアス(テオドーシウス)を擧げて東部の皇帝となしたり(紀元三七九―三九五)。セオドーシアスの政治的天才は一時僅かに羅馬帝國の瓦解を救ふことを得たり。彼れは蠻族を帝國の領土外に驅逐するの不可能事なるを知り、且つ彼等が一致結合しつゝある間は到底之を征服するの道なきを察し、西ゴス人の英邁なる酋長フリチゲルン死して漸く彼等の勢力分離するに乘じ或は恩惠を施して退却せしめ或は軍隊に編入して之を綏撫し、特に西ゴス人はスレースに住居し、東ゴス人は小亞細亞に殖民することを許可したり。四万のゴス人は東帝國の兵となりて帝國の同盟隊と稱したり。彼等は帝國主權の下にあり乍ら帝國と條約を結び一定の土地を領し、年々給與を受け獨立民族として承認せられたり。昔時羅馬人は蠻族を征服して其の土地に殖民を爲したりしが今や蠻族の侵入に遭ふて之を驅逐し之を征服すること能はず却て帝國の領土内に蠻族の殖民を許すに至れり。

西部に於ては皇帝グラチアヌス惰弱にしてブリテン島の兵亂を起し、叛將マキシムス兵を率ゐてゴールに入り、皇帝パリを脱れて南に走り、リオンに於て追ひ及ばれ遂に其の弑する所となれり(三八三年)。數年の後セオドーシアスはマキシムスを誅し(三八八年)、グラチアヌスの弟ヴレンチニアヌス二世(紀元後三七五―三九五)の主權を確立したりしが、彼れも亦た柔弱にして蠻族フランク人アルボガステス權を專にし遂に之を弑してユーゲニウスを立て皇帝と爲したり(紀元後三九二―三九四)。セオドーシアスは兵備を整へて西に向ひ伊太利の東北部にあるアクイレーアに於てユーゲニアス及びアルボガステスの兵を破り、前者は囚はれて斬首せられ、後者は山中に逃れて遂に自殺したり(三九四年九月)。此役セオドーシアスの軍はゴール人及び日耳曼人なりき。是に於てセオドーシアスは羅馬帝國の全部を再び統一することを得たりしが戰勝後四ヶ月年未だ五十に滿たず伊太利ミランに於て病死したりしは帝國人民の一般に痛惜したる所にして此より後羅馬帝國は全く東西に分れ再び合一することなかりき(三九五年一月)。セオドーシアスが如何に其の蠻人を綏撫することに苦心したりしかはマセドニ

ヤのテサロニカ市に於て暴民がゴス人の鎮營を虐殺したりしとき彼れが其の懲罰として市民七千人を馬戲場に集めゴス兵の一隊をして之を塵殺せしめたることにて知らるゝなり。彼れは之によりて蠻族ゴス人に對する信義を保つことを得たれども之が爲めに正義と人情とを犧牲に供したり。ミランに於ける基督敎の高僧アムブロースは皇帝の罪惡を譴責し、其の眞に悔悟するまで會堂に入るを禁じ且つ公然皇帝をしてミランの會堂に於て赦罪を請願せしめ又た死刑宣告の後三十日を經て之を執行す可きことを布告せしめたり（紀元後三九〇）。基督敎の勢力既に是の如く、且つセオドーシアスは熱心なる基督敎徒なりしが故に、遂に天下に令して基督敎の外全たく異敎を禁じ偶像の崇拜を廢止せしめたり（紀元後三九一）。

第二章　西羅馬帝國の瓦解

東西二帝國の分立

セオドーシアス帝は其の死に先だちて二子を副帝となしたりしかば長子アルケディウスは十八歳にして東部（スレース、小亞細亞、シリヤ、埃及等）を管轄し、ゴール人ルフィヌス之を輔佐し、而して少子ホノリウスは年僅かに十一歳西部伊太利、亞弗利加、ゴール、西班牙、プリテン等の皇帝となり、蠻族ワンダル人スチリコ之を輔佐したり。當時帝國の兵員のみならず、其の宰相さへも蠻人に非ざれば其の任に堪ゆる者なかりき。先帝が帝國を二子に分轄せしめたるはダイオクレシヤン帝の政策に從ひ二帝を同僚として行政上分轄を爲さしむるの趣意に出で帝國を二個に分裂するの方針には非ざりしも是より以後東西羅馬帝國は全たく其の皇帝を異にし、又た其の利害を異にし遂に其の存亡を異にし、儼然たる二個の獨立國家とはなりぬ。羅馬皇帝にして其の主權帝國の全部に亘り且つ自から軍隊を率いて戰陣に臨みし者はセオドーシアスを以て最後と爲す。彼れの二子は惰弱暗昧にして帝國の重任を負ふに足らざりき。アルケディウスの宰相ルフィヌスは奸惡無道なりしが獨りホノリウスの宰相スチリコは賢明にして幼少より武功を立てセオドーシアスの信任を受け皇帝は其の姪女且つ養女を以て之に娶し、死に臨み彼れに後事を委託したり。セオドーシアス死して後西ゴス人は支給の不足を理由として直ちに蜂起したり。彼等セオドーシアスの軍隊に屬して羅馬人の戰術を學びたるアラリクを以て其の首領となしたり。彼れは西ゴス人中の名族にして羅馬の軍隊

に屬し、其の將校たらんことを希望し拒絶せられて自から大に爲す所あらんことを期したり。彼れはスレース、マセドニヤ及び希臘を侵掠し、亂暴狼藉を極めたり三九六年。明年スチリコ往て之を討伐し、大に蠻族の兵を破りたれどもアラリク竊かに東羅馬と條約を結びしかば希臘は東帝國の領内に屬するを以てスチリコは遂に東帝國の訓令により止むを得ず退軍することゝはなれり。東羅馬の君臣はアラリクを制する能はず、却て彼れを以て東イリヽクムの總督となしたり紀元後三九八年。アラリクは傲然として其の侵掠殘暴したる人民に命じ武器を造らしめて之を其の部下に給與し、益々其の蠻勇を加へしめたり。西ゴス人はアラリクの身分貴く其の過去の功績の大にして將來の志望壯なるを見て其の旗下に一致團結し、古來の習慣に從ひ彼れを楯の上に舁ぎて西ゴス人の王と宣言したり。東羅馬に屬したる歐洲の大部分は既に侵掠し盡くしたり、而して亞細亞の方面はコンスタンチノープルの堅城ありて進入すること難かりしかばアラリクは古來万國を征服し天下の富を吸收したる羅馬の城上にゴス人の旗を翻へし其の軍隊に思ふ存分の分捕を爲さしめんと其の部下を率ゐ伊太利に向つて進發したり。

アラリクの侵入

四〇〇年―同三年

アラリク及び西ゴス人の伊太利に向ふやホノリウス帝はミランに在りしが擧朝震ひ怖れて爲す所を知らず、伊太利の人民は或はシヽリー島若くは亞弗利加に逃れんと欲するに至りしがスチリコ毅然として防禦の策を講じ、西羅馬帝國の各境邊より遽かに軍隊を引き上げ悉く皇帝及び伊太利の救援に向はしめたり。スチリコの邊境に在るやアラリク既に來りてミランを攻め、ホノリウス遁逃して蠻兵に追躡せられ、西北伊太利のアスタ城に圍まれたり。スチリコ伊太利の北東より精兵を率ゐ來りて之を救ひ、且つゴール及びブリテン等の邊境にありたる羅馬の軍隊もアルプス山の各路を越えて伊太利に入りしかばスチリコ之を統率してアラリクの陣をボルレンチヤに襲擊したり四〇三年。四月アラリクは羅馬の騎兵に不意を討たれて一時陣營混亂したりしがアラリクの勇猛なる直ちに軍配を立て直し、且つ基督教の神助ありとの確信にて蠻兵益々勇戰奮鬪したり。スチリコの軍中にありたる蠻族アラニーの酋長戰死し其部下敗走し、あはや全軍の運命危かりしがスチリコは羅馬人及び野蠻人を以て成り立ちたる歩兵を麾きて奮戰し、勇將の下弱卒なければ向ふ所破摧せざるなく遂に

アラリクの妻及び數千人を囚となすことを得たり。アラリクは其の歩兵を破られたれども騎兵の大部分を全うして戰場を去り、更に轉じて南の方タスカニーに進み、羅馬の首府に入らんと欲したり。彼れは伊太利に於て王國を建るか若くは墳墓を見出さんと決心したりき。然れどもスチリコの爲めに其の目的を達することを能はず、遂に報酬を條件として伊太利を退去するの約を爲し、其の退却に際して不意にウ.エロナ市を襲はんと爲したりしもスチリコ牒じて之を知り却てゴス人を逆擊し之を伊太利外に驅逐したり。

ミランの皇居は前述の事變によりて其不安全なること明白なりしかば怯懦なるホノリウス帝は遂にボー河口に近く沼澤に圍繞せられて海陸兩面の要害堅固なるフウエンナ市に移轉せり四〇四年。此後歷代の西羅馬皇帝及び東羅馬皇帝の代官此處に其の政廳を置き、ラウエンナは紀元後第八世紀の半に至るまで伊太利に於ける政治上の首府なりき。

ラダガイススの侵入紀元後四〇六

伊太利はゴス人の退却によりて安堵の思を爲しつゝありしに、此時日耳曼の方面に於て又もや野蠻民族の大移動起りラダガイススその首領としてワンダル人、スエウイ人、バルガンド人等を中堅となし、アラニー人及びゴス人の一部之に加はり、婦女、小兒及び奴隸を加へて總數四十万人バルチク海濱より伊太利に向つて進發したり四〇五年。スチリコは再び邊境の防備を解きて一時軍隊を伊太利に集中し、且つ新たに召募し、又た奴隸に自由と黃金と及び匈奴等なりき。ラダガイススは邊境に於て何の抵抗にも逢はず、アルプス山を超え、ボー河を渉り伊太利半島に進み、諸市を掠めて遂にフロレンスを圍みたり。アラリクは蠻人なりしかども一種の基督教徒にして戰時の法律、條約の義務を知り、且つ訓練ある軍隊を率ゐたり。然れどもラダガイススは純乎たる蠻人にして羅馬の文明、風俗及び言語を知らざりき。スチリコ大軍の聚まるを待ちてフロレンスの圍を救ひ、蠻人の軍を破りてラダガイススを囚にし之を斬に處し、其の衆三分の一或は餓死し或は奴隸と爲されたり。スチリコは再び伊太利及び羅馬を救ふの偉功を奏したり。

ラダガイススの死後北部伊太利又たアルプス山とダニユーブ河との間に猶ほ十

万の日耳曼人ありしがスチリコの警戒及びラダガイススの失敗により方向を轉じてゴールの地に向ひたり。蠻族アレマンニーは中立して彼等に應ぜず、スチリコと同盟してラインの邊境を守りたるフランク人は羅馬の爲めに能く防戰したり。然とも野蠻人の聯合軍は遂にライン河を渉りてゴールに侵入したり三〇六年十二月。彼等は一たびラインを渉りて再び歸ることなく、益々前進し二年の間ゴールの地を蹂躙し、スエウイ人、アラニー人及びワンダル人等は遂にピレニース山を越えて西班牙に進入したり四〇九年。是の如く久しく羅馬人と野蠻人との經界たりしライン河も蠻人の自由に通過する所となり、アルプス以外に於て羅馬帝國は既に瓦解したりと謂ふことを得べし。

蠻人の羅馬侵入

是時に當りブリテンに於ける羅馬の軍隊は謀叛して別に皇帝を擁立したり四〇七年。彼等は二人の皇帝を立て又た之を弑したる後コンスタンチンを擧げたり。彼は兵を率ゐてゴールに入り曩に侵入したる日耳曼人を破り、西班牙に經過し、西歐の三國を根據として數年間獨立することを得たり四一一年。是の如き危急の場合に於てスチリコは皇帝ホノリウスの爲めに誅せられたり四〇八年。彼れは帝國の宰相たりしのみならず且つ其女を以てホノリウスの皇后となしたれば彼れと皇帝との間は利害を一にして相離る可からざりしに暗愚なる皇帝は讒者の爲めに欺かれ、彼れが權威の熾なるを嫉み彼れに異圖ありとなし、遂に彼れを斬に處し且つスチリコの軍隊に屬したる蠻人等の妻子質として伊太利の諸市にありしものを虐殺したり。是に於て三萬の蠻人等は東西羅馬帝國の中間イリヽクムに割據したるアラリクの陣營に投合し復讐の爲め伊太利に侵入せんことを勸めたり。是より先きスチリコはアラリクの勇を愛し、東羅馬に對する政略として彼れをイリヽクム全州の總督となしたり、而して彼れに黃金四千磅を給與せんことを約したり。スチリコの生存中彼れは其志を成すこと能はざりしが今や彼は六年間其兵を休養し、且つ其の畏るゝ所の人亡びたれば直ちにアルプス山を超えて伊太利に入り急進してタイバー河畔に陣したり。紀元前二百十一年古今第一の名將とも言ふ可きハンニバルが羅馬の城門を去ること一哩の處にまで進み來りし以來六百年間嘗て敵人の近づくことを見ざりし羅馬は端なく蠻人の兵に圍まれ、饑餓疫癘の爲めに死する者幾千人、使者をアラリクの陣に遣は

して和を請ふに至れり。アラリクは羅馬の大なると其の人民の多きとを聞き、「草深ければ之を苅ること更に容易なり」とて却て其の請求を斥けたりしが遂に黄金五千磅、白銀三萬磅、絹衣四千個、及び其他の貨物を得て圍を解きタスカニーに退去したり四〇八年。同時にアラリクの軍隊には伊太利にありて奴隷たりし四萬の蠻人及びダニューブ河畔より新に到着したる援兵相合して總計十萬、伊太利を擧げてアラリクの名を聞く者戰慄せざるはなかりき。

永久の和を講ぜんとするに當りてラウエンナに於ける帝國政府は頑としてアラリクの要求を拒絶したり。アラリクは再び羅馬を圍み、羅馬の港オスチヤを略して都城の糧道を斷ち、羅馬の元老院をして遂に城門を開き一時アラリクの命により市長アッタルスを擧げて皇帝の位に即かしめたり四〇九年。然るにアラリクは猶ほ皇帝ホノリウスと和約を爲さんことを欲したりしが皇帝の頑然たる政策により其の要求する所を得ざりしかば遂に三たび羅馬を圍み、其兵市中に亂入して六日の間恣まゝに掠奪暴行を爲したり四一〇年八月。西ゴス人は既に基督教を奉じたりしが故に僅かに基督教會堂及び其の器物を尊敬して手を觸れざりき。

是の如くアラリクは古代に於てエバイラス王ビルラス又は名將ハンニバルが爲さんと欲して爲す能はざりしことを成し遂げ、南部伊太利に進行して劫掠を逞くし、更にシヽリー島に渡り亞弗利加に赴かんと準備中コンセンチヤに於て死去したり。蠻人等は捕虜をして一時ブセンチヌスの河流を轉ぜしめ、其の河底にアラリクの遺骸を埋め、然る後再び河流を元の如くし且つ其の墓の所在を世人に知らざらしめんが爲めに殘忍にも其の工事に與かりたる凡ての捕虜を虐殺したり四一〇年。

西ゴス王國の建設（紀元後四一五―五〇七）

西ゴス人は猶ほ野蠻人にして市府に生活するの道を知らざりき。彼等は其意に適したる土地を發見して之に永久住居せんことを欲したり。彼等はシヽリーよりして亞弗利加に移住せんことを企てたれども風波の爲めに遮ぎられ、且つアラリクの死によりて其の目的を達することの能はざりき。アラリクの義弟アタウルフス（アドルフ或はアドルフス）は全民族の一致によりてアラリクに代り西ゴス人の王に擧げられたり紀元後四一二。彼れが羅馬帝國に對する態度は亦以て當時賢明なる野蠻民族諸酋長の苦心を察するに足るものあり。

アタウルフスの言に曰く、

曾て勇氣と戰勝の勢に乘じて余は宇宙の面目を一變し、羅馬の名稱を消滅せしめ、其の墟址の上にゴス人の權力を建設し、アウグスツスの如く新帝國創立者の不朽なる名譽を得んことを渴望したり。再三の經驗により余は善く組織せられたる國家を維持し又た整理するには法律の絶對的に必要なること、而してゴス人の猛烈訓練しがたき性質は法律及び文化的政治の健全なる拘束に耐ゆる能はざることを漸次に確知したり。爾來余は自から從前と異なりたる光榮及び大望の目的を立てたり、而して羅馬帝國の繁盛を破壞することなく却て之を恢復し又た維持する爲めにゴス人の刀劍を用ひたる異人の功績を將來の時代が認識して其恩に感ぜんこと今は余の誠實に希望する所なり。

アタウルフスは是の如く平和にして賢明なる見識により直ちに戰爭の計畫を中止し、誠實に羅馬の朝廷と和親同盟の約を結ばんことを勉めたり。ホノリウスの宰臣等も他に伊太利を救ふの術なかりし折柄、容易にアタウルフスの要求に應じ彼れ及びゴス人を用ひてアルプス以外の僧主及び蠻族を征討すべきことを一任したり。是に於てアタウルフスは羅馬將軍の資格を得てカムパニヤの極端よりゴールの南部に向つて進發し、直にナルボーン、ツールーズ、及びボルドーの三市府を占領し、遂に地中海より大西洋に至るまで南部ゴールの地を畧したり。

アラリクの始めて羅馬を圍むやセオドーシアス帝の女プラシディヤ市中に在りて捕虜となり、ゴス人の軍に伴はれて伊太利を徘徊したり。アタウルフス深く其の才色を愛し、皇帝ホノリウスに向つて結婚を要請したり。ホノリウスの宰臣等は羅馬皇帝の妹を蠻族の長に降嫁せしむることを帝國の汚辱として容易に許可せざりき。アタウルフスは堂々たる相貌に於て稍々アラリクに劣りしも其の風采の優美閑雅なるは却て彼れに優れる所ありき。皇妹プラシディヤは彼れの要請を甘諾し其の結婚はゴス人が伊太利を去るに先だちて成就せられたり（紀元後四一四）。是に於てアタウルフスの宣言は益々誠實鞏固となるに至れり。

是時に當りゴール及び西班牙にはコンスタンチン及びマキシムス等の僧主起りて各々帝と稱し、彼等に繼でヨウイヌス及びセバスチアンの兄弟又起りしがアタウルフスは二人を誅して其首を皇帝ホノリウスに送り以て其の忠實の證と爲し

たり。尋で彼は其兵を率ゐてピレニース山を超え、西班牙に進み、先きに侵入した る蠻族等を驅逐せんと欲したり（紀元後四一四）。翌年彼れはバルセロナに於て刺殺せら れたりしがワリヤ擧げられて西ゴス人の王となり（紀元後四一五—四一八）、羅馬帝國の同盟 としてアラニー、スエウイ、及びワンダル諸蠻族と戰ひ、大にアラニーを破り、スエウ イを西北隅の山中に驅逐し、而してワンダル人を西班牙半島の南方に追斥したり。 是の如くゴス人は其の報酬としてゴール及び西班牙に跨る所の領土を與へられ たり（紀元後四一九）。西ゴス人がダニユーブ河を渉りて羅馬帝國に入りし以來四十三年 にして其の移動遂に靜止し爰に始めて確定の住居を爲すに至れり。彼等は東西 兩帝國の恐怖となり、希臘、伊太利、西班牙を經過し遂に南部ゴールのガローヌ河畔 に定居し、羅馬の市民と共に平和に生活し、トロサ（ツールース）を首府となし、速かに 羅馬の文藝を習得し、社會の秩序を保護し、農工商の諸業を勉め、やがて武勇のみな らず、文化に於ても羅馬人に優るほどの進歩を爲したり。南部ゴール（アキタニヤ） は久しく蠻族の亂入によりて羅馬の行政地に落ち、無政府の狀態なりしが故に、西 ゴス人の定住によりて人民は却て安堵の思を爲すことを得たり。最初西ゴス人

の版圖はガローヌ河より西班牙北部のエブロ河に及びしがワンダル人及びアラ ニー人亞弗利加に移住の後漸次西班牙の大部分を包含したり。ワリヤの死後は、 アラリクの子セオドリク一世（紀元後四一八—四五一）、其子トリスムンド（紀元後四五一—四五二）、其弟セオ ドリク二世（紀元後四五二—四六六）各々位に即き、其の弟エウリク（紀元後四六六—四八三）に及びてゴール、 西班牙共に大に其の領土を擴張し、法律を編成し、益々文化を奬勵したり。然るに フランク人北方より起り來りし爲めにゴールに於ける領土は蠶食せられ（紀元後五〇七）、 西ゴス人の王國は西班牙に在りてトレードを首府とし、第八世紀の始まで存續し たりしが遂に亞剌比亞人の侵入によりて滅亡したり（紀元後七一一）。

バルガンディ人及びスエウイ人の王國

日耳曼民族の一なるバル ガンディ人も第五世紀の始め酋長クンディカル之を率ゐてゴールの地に進入した り。皇帝ホノリウスは之を拒ぐ能はずして遂にジュラ山の兩側に於ける土地（今 の瑞西及びフロンシ、コンテー）を彼等に讓與したり（紀元後四一三）。羅馬政府は單に彼等 をして帝國内に定住することを許可したるのみならず、土地の人民をして彼等に 家屋の一半、耕地の三分二、及び奴隷の三分一を割與せしめたり。新來の蠻族は戰

爭及び獵獸を事として山地に住し、從來の土人は專ら平地と市府とを占有したり。而して此の地方は永久バルガンデイと稱せらるゝに至れり。次王グンデリク位に即くに及びて紀元後四三—六四七〇稍々その版圖を擴張し、四子之を分割してゼヲバ、ベサンソン、リオン、及びウイエーヌを以て各々其の根據となし、グンディバルドに至りて之を統一し且つ法律を編成したり。然れども其子シヂスムンド紀元後五一—五三二は遂にフランク人の爲めに捕はれてバルガンデイ王國は爰にフランク王國に併呑せられたり。

又たスエウイ人はワンダル人及びアラニー人と共に西班牙に進入し西ゴス人の爲めに破られたりしも遂に北西の一隅アスチユリア及びガリシヤの山地に定住して王國を建設したり紀元後四一九。ワンダル人及びアラニー人北亞弗利加に移住したる後紀元後四二九、スエウイ王國は全半島を征服せんとなしたりしが西ゴス人の爲めに征服せられたり紀元後五八五。

是の如く第五世紀の始めの二十年間に三個の野蠻王國は建設せられたり。第一、バルガンデイ人の王國紀元後四一三—五三二、第二、西ゴス人の王國紀元後四一五—五〇七（ゴール）同五〇七—七一一（西班牙）第三、スエウイ人の王國紀元後四一九—五八五即ち是なり。

ワンダル人の亞弗利加侵入紀元後四二九

皇帝ホノリウスは帝國を防禦する能はずして死去したり紀元後四二三。彼れはセオドーシアス大帝の遺策によりて基督教會を保護し、偶像及び異神の殿社を破壞し、異教徒を官吏に登用するを禁止したるの外何の光榮をも遺すこと能はざりき。僭王ジョーン（ヨアンチス）一時政權を掌握したりしが東帝國の聲援によりてホノリウスの甥ワレンチニアン三世紀元後四二五—四五五位を繼ぐことを得たり。彼れの母プラシディアは始め西ゴス人の王アタウルフの妻となりしが彼れの刺殺せられし後羅馬に歸ることを得て將軍コンスタンチウスに再嫁し、ワレンチニアンを生みたり。皇帝は齡僅かに六歲なりしがプラシディヤは攝政として二十五年間其子を輔佐したり。是より先き東羅馬皇帝アルケディウス死し紀元後四〇八、其子セオドーシアス二世紀元後四〇八—四五〇七歲にして位に即き、其姉プルケリア攝政たること殆んど四十年なりき紀元後四一四—四五三。是の如く東西兩帝國の實權女主に存し、其の宰臣及び將校等は蠻族を利用して各々その爪牙となし帝國の保全を顧みざりき。

當時西羅馬帝國の軍隊はエーチウス及びボニフアシウスの二人によりて指揮せられたり。二人同心協力したりしならんには猶ほ衰頽の帝國を支持することを得べかりしにエーチウスは奸計を運らして亞弗利加の總督ボニフアシウスを讒訴し、離間中傷遂に彼れをして謀叛を爲すの止む可からざるに至らしめたり紀元後四二七。翌年ボニフアシウスは使を西班牙に於けるワンダル蠻族の王ゴンデリクに遣はして同盟を約し、且つ其の永久亞弗利加に移住せんことを勸告したり。ゴンデリクは其の誘引に應ずる遑なくして死去したりしが其弟ガイセリク(ゲンセリク)は羅馬帝國の衰亡に際して西ゴス人の王アラリク及び匈奴の王アッチラと幷び稱せらるゝ程の恐ろしき威名を轟かし、其の野心窮りなく且つ其の方法に於て如何なる事をも斷行するの蠻勇を有したり。彼れは天アラリクが爲さんと欲して遂に成すこと能はざりし亞弗利加の遠征を成就することを得たり。西班牙の南端と亞弗利加の向岸との間(ジブラルタルの海峽)は其距離僅かに十二哩に過ぎざるなり。ワンダル人に窘められたる西班牙人は彼等の速かに去らんことを欲し、又た亞弗利加の將軍ボニフアシウスは彼等の速かに來らんことを欲して共に彼等に海上を渡る可き船舶を供給したり紀元後四二九。北亞弗利加は穀物を生産する豐饒の地にして羅馬の穀倉と稱せられたり。蓋し伊太利は其の人民を養ふに足る程の穀物を生産する能はずして供給を亞弗利加に仰ぎたればなり。アラリク以來蠻人が此の地に着眼したるの理由亦た知る可きなり。ワンダル人は北部日耳曼のエルベ河畔を發足して二十年の後北亞弗利加のアトラス山邊まで侵入し、今は勇敢なるガイセリクの下に一致團結したり。而して同じく彼れの權威に服從したる亞細亞の蠻族アラニーも亦た之に伴へり。彼等は人生一代の間に亞細亞西北の寒地より亞弗利加極熱の土にまで經過したりき。之に加ふるにゴス人中の冒險者及び西班牙人中蠻族の爲めに無資産となりたる者も多く此の遠征に從ひたり。然かもワンダル遠征軍の總數は八万人に過ぎざりしが羅馬人に向つて不平を懷きたる土着のムーア人之に應じたると北亞弗利加に於ける羅馬人中には基督教宗派の分爭ありて一致なかりしとによりワンダル人は容易に之を征服することを得たり。

ワンダル人の王國

紀元後四三九―五三三

ボニフアシウスは中途にして離間中傷の

爲めに謬まられたることを知り、蠻族を誘引したることを痛く後悔したりしかども事既に及ばざりき。彼は遽かに兵を聚めてワンダル人を防がんとなし却て敗軍して大に其兵を失ひ、北部亞弗利加の七州タンギールよりツリポリーに至るまで蠻人の爲めに蹂躙せられ、僅かにカルセージ、シルタ及びヒッポーの三市のみ辛うして羅馬人の手に留存したり。ボニファシウスは敗軍してヒッポーに籠城し、蠻人は直ちに之を圍繞したり（紀元後四三〇）。基督教の名僧聖アウガスチン城中に在りて最後の著書を爲しつゝありしが大にボニファシウスを慰めて其の勞を助けたり。彼は攻圍中年七十六にして死去したり。彼れの著書神都論（紀元後四一―四二六）は基督教神學の基礎にして天下後世に偉大なる影響を及ぼしたり。ヒッポーは海上の交通自由なりしとボニファシウスの能く防戰したるとにより十四ケ月の後ワンダル人は糧食缺乏の爲めに圍を解かざる可からざるに至れり（紀元後四三一）。攝政プラシディアは亞弗利加の重要なるを思ひ援を東羅馬帝國に請ひたり。ボニファシウスは兩帝國の軍を率ゐてワンダル人に向ひしかども戰敗れて亞弗利加の運命は定まれり。彼れは逃れてラウエンナに歸り（紀元後四三一）、エーチウスと決鬪して傷を被り數日にして遂に死したり（紀元後四三二）。攝政プランディアは將軍エーチウスを謀叛人なりと宣告したりしかば彼れはパンノニア（今の匈牙利地方）に於けるハン人の間に身を隱くし、斯くて帝國は一時二人の名將を失ひたり。

羅馬人が亞弗利加を拋擲せし後四年にしてガイセリクは皇帝ワレンチニアンと和約を結び、アトラス山よりシルチス灣に至る全土を讓與せられたり（紀元後四三五）。更に四年を經て遂にカーセージを畧し、北部亞弗利加に於ける羅馬の全州を占領したり（紀元後四三九）。

紀元前百四十六年カーセージは羅馬の爲めに滅ぼされたりしがカイアス、グラッカス（紀元前一二二）、ジュリアス、シーザル及びアウガスタス帝（紀元前二九）の殖民政策によりて再び勃興し、亞弗利加の羅馬と稱せらるゝに至れり。ガイセリクは之を根據として大に海軍を起し、シヽリー、コルシカ、サルヂニア及びバレアリク諸島を征服し、地中海上に其の威勢を振ひ其の侵掠を恣まゝにすることを得たり。ガイセリク及びワンダル人の事は尙ほ以下の文に記載すべきこと多し。但し其の王國は漸次羅馬人の惰弱なる風習に化せられ、九十四年を經て東帝國の爲めに滅ぼされ（紀元後五三三）

而して其の首府カーセージは紀元後七百六年亞剌比亞人の爲めに全たく破壞せられたり。

近時史家の中には羅馬の將軍ポニファシウスがワンダル人を誘引したりとの物語を事實に非すとして否定する者あり。

匈奴王アッチラのゴール侵入（紀元前四五一）

ワンダル人の王ガイセリクは地中海に横行して東西兩帝國を侵掠し、東帝國に向つては東ゴス人を煽動し、西帝國に向つては西ゴス人を敎唆し、遂ひにハン人の王アッチラと同盟を約したり（紀元前四四一）。

是より先きハン人は北歐のウオルガ河よりダニユーブ河まで蔓延したり（紀元後三七六—三三四）。ゴス人及びワンダル人等がハン人の爲めに驅られて羅馬帝國内に進入するやハン人は愈々羅馬帝國の上に切迫し來れり。内部の不一致の爲めに其の勢力往々頓挫したることあり且つ羅馬人に應援したることもありしが其王ロアス（一名ルギラス）の時に至りて（紀元後四三二頃）其勢力大に振ひ、西羅馬の將軍エーチウスと結托して遂にパンノニアを占領したり。東羅馬の皇帝セオドーシアス二世は恐れて毎年之に黄金三百五十磅を支給し、且つ與ふるに羅馬將軍の稱號を以てしたり。ロアスの甥アッチラ（紀元後四三一—四五三）は更に其の年額を增加し黄金七百磅と爲し且つダニユーブ河岸に市場を開きて貿易の自由を與ふるの約を爲さしめたり。羅馬の兵（野蠻人の一隊）その貿易の安寧を破り、不意に商人を殺すに及びてアッチラは諸帝國に向つて嚴重なる要求を爲し、其の容れられざるやダニユーブ河を渡りて襲ひ來り、黑海よりアドリアチク海に至る五百哩以上の土地を劫掠したり。是より先き東西兩帝國は力を協せてワンダル人より亞弗利加を恢復せんと爲しつゝありしが東帝國は遽かにシヽリーより其の兵を召還してアッチラを防ぎたり。然れども軍隊は連戰連敗してヘレスポントよりセルモピレーに至るまてスレース及びマセドニヤの二州はアッチラの兵に殘暴せられき、東帝國に於ける七十の市府は破壞せられき、セオドーシアス二世は遂に土地を讓與し、毎年の貢金を二千百磅に增額し且つ直ちに賠償として黄金六千磅を拂ふの約を爲し、且つコンスタンチノープルの堅城に據りて僅かに全きを保つことを得たり（紀元後四四六）。是時に當り種々の事情はアッチラを誘引して西歐羅巴に向はしめたり。東羅馬

帝國は容易に侵す可からざるコンスタンチノープルの堅城あり、且つ新皇帝マルシアヌス（紀元後四五〇―四五七）英邁にして能く東帝國を防衛したり。是より先き羅馬の將軍エーチウスは匈奴人の間に遁れて身を全うすることを得たり。元來彼れの母は伊太利人なりしかども其父は蠻族にして夙にハン人と交り深かりしかば遂に之を利用して羅馬の政權を恢復することを得たり。彼れ六万の蠻人を率ゐて西羅馬の攝政プラシデイヤに其赦免を求めたり。彼女は之に抵抗すること能はずして之を許可し、エーチウスは之より二十一年の間（紀元後四三―四五四）西羅馬の全權を掌握したり。西ゴス人の王セオドリク一世（紀元後四一八―四五一）の女はワンダル人の王ガイセリクの長子に嫁したりしがガイセリク一朝の嫌疑によりて殘酷にも其の婦の耳及び鼻を削り之をツールースに歸すやセオドリクは羅馬の援によりて之を征討せんことを企て而して將軍エーチウスも蠻族の分爭を帝國に利ありとなし、セオドリクを助けんと欲したり。是に於てガイセリクは禮を厚くしてアッチラに援を乞ひハン人の西進を促がしたり。

又たラインの下流に王國を建設したるフランク人の王クロディオン死して（紀元後四四八

二子位を爭ひ、少子メロウェウスは羅馬の保護を求め、ワレンチニアン帝の同盟、將軍エーチウスの養子として厚遇せられたり。然るに其の兄は恐る可きアッチラの助力を請ひ、アッチラは之と同盟してライン河を渡るの便を得たるのみならず、且つ奇異なる艶福によりて彼れはゴール侵入の爲めに一種の口實を設くることを得たり。

西羅馬皇帝ワレンチニアン二世の妹ホノリアの皇妹たるの理由により帝國の爲めに危害ありとして臣民との結婚を許されず、之れにアウガスタの尊號を與へて生涯處女たらしむべくラウエンナに於て敎育せられたり。艶麗なるホノリアは年十六にして近從ユーゲニウスと通じ、母プラシヂヤの譴責を受けコンスタンチノープルに放たれ爰に在ること十餘年の後彼女は一生の不幸を歎じ、遂に大膽にも勇名高きハン人の王アッチラの使節に託し戀愛の證として指環を彼れに贈りたり。アッチラはゴールに侵入するに先だちて皇妹ホノリアと其の嫁資として羅馬帝國の半を與へんことを要求したり。

是に於てウオルガ河よりダニユーブ河に至るまで日耳曼及びシヽヤ（スキチア）の

諸王及び諸民族は匈奴王の催促に應じ六十万の大軍西に向つて進發し、紀元四五一後、七八百哩の里程を經てライン河に到り、フランク王の長子に屬したるフランク人と合同し、劒と火とを以て白耳義を殘暴しモゼール河及びセーヌ河を渡りてゴールの中央に向ひオルレアンの城下に達したり。メッツ及び其他二十餘の市區は破壞せられたり。當時巴里はセーヌ河上の島に在りて一小村に過ぎざりしかば幸にして其難を免かれたり。オルレアンは南部ゴールの關門なり。アッチラ之を圍みたりしが城堅くして市民能く之れを防守したり。特に監督アニアヌスは宗教の勢力によりて百方士民を鼓舞し援軍の來るまで勇敢なる防戰を爲さしめたり。羅馬の將軍エーチウスは西ゴス人の王セオドリクと兵を合せ、其他バルガンデイ人、サクソン人、メロウェウスに從ひたるフランク人及び從來羅馬に服從したるゴール及び日耳曼の諸民族を擧げてオルレアンを救はんが爲めに進軍したり。智慮深きアッチラは大軍の新たに來るに遭ふて直ちにオルレアンの圍を解き、再びセーヌ河を渡りて退軍し、シャロンに近き平原に於てエーチウスの來り攻むるを待ち構へたり。此役や東洋のハン人及び之に從へる日耳曼諸民族と羅馬人及び之に從ふ所の諸民族との大競爭にして古今歷史上に於ける大合戰の一なりとす。西ゴス人最も善く戰ひ、其の王セオドリク討死し、其の子トリスムンド苦鬪して遂にアッチラの軍に勝つことを得たり。十六万二千の死屍は平原に横はり、河水爲めに赤く、アッチラは戰車を列ねて累壁となし、死を決して羅馬軍の更に襲ひ來るを待ちたりしが其の狀恰かも獅子の怒れるが如く殆んど敵人をして敢て近づくこと能はざらしめたり。然れども西ゴス人は王の戰死によりて王位繼承の問題起りしかば端なく歸國することゝなり、アッチラは遂に軍を率ゐてパンノニアに歸ることを得たり。是れ蓋し將軍エーチウスの深謀に出でアッチラ及びハン人亡ぶるときは西ゴス人直ちに帝國の患たるが故に、彼は蠻夷を以て蠻夷を制し、羅馬帝國の安全を保たんと欲し、窮寇を追擊せず且つトリスムンドを勸めてツールースに歸らしめたり紀元四五一後。

アッチラの伊太利侵入紀元四五二後

アッチラの威勢はゴール遠征の失敗によりて毫も頓挫することなく、明春彼は再び皇妹ホノリア及び其の嫁資を要求し、其の拒絶によりて直ちに軍を發し、イリヽアの方面よりアルプス山を越えて北部

伊太利に進入し、アクイレーア市を破壞し、アルチヌム、コンコルディア及びパヅアの三市を灰燼となし、ウイセンザ、ウエロナ、ベルガモ、ミラン及びパウイアを征服しポー河岸の豐土を化して砂漠たらしめたり紀元後四五二。彼れのミランにあるや羅馬皇帝が玉座に在りて蠻人の諸王その膝下に拜跪しつゝあるの圖を見たり。彼は畫工に命じて之を改めしめ、更に羅馬皇帝が蠻人の王に拜跪しつゝあるの圖を畫かしめたり。歷史上の事實は眞に此の如き顚倒を實際に生じたり。アクイレーア、パヅア及び其他の市民はアドリアチク海の北邊にある數多の小島に逃れて難を避けたり。此の群小島は淺水によりて本陸と隔てられたりしが是れ則ち名高きウエニス市の起原とはなりぬ。全伊太利はアッチラの爲めに震動したり。アラリクの侵入以來四十年の間伊太利は平和なりしが爲めに、人民は戰爭に習熟せずして唯だ戰慄するのみなりき。將軍エーチウスは獨り毅然として恐るゝ所なかりしも彼れは蠻族の應援なしにはアッチラと戰ふこと能はず、而して羅馬の同盟者たりし蠻族等は遠く伊太利にまで來たりて羅馬の爲めに戰ふことを欲せざりき。斯くてアッチラは羅馬に迫らんと爲したりしが羅馬敎會の監督レオ一世は僧侶の身にてあり乍ら皇帝の使節と共に北部伊太利に於けるアッチラの陣に到りて媾和の條件を談判したり。レオの堂々たる相貌と其の莊嚴なる僧服とは彼れの能辯と共に大にアッチラの心を動かし遂にホノリアの嫁資を公約して伊太利を退去することを承諾せしむるに至れり。傳說によれば此時レオの側には敎會の始祖たる聖彼得（セント・ピーター）及び聖保羅（セント・パウル）の二靈儼然として顯はれ、劍を持して、之を擁護し、蠻王若しレオの請求を容れずんば直に聖劍を振ふて一擊の下に其の氣息を絕たんとしたりと言へり。以て當時の人が如何にアッチラの侵入を怖れ、其の突然伊太利を退去したるを見て人力に非ずと爲したることを知るに足れり。レオが遊說の後アッチラが伊太利を退去したるは事實なり。如何なる理由によりて退去したるかは史家の推論に外ならず。伊太利の溫暖と其の奢侈とによりて蠻兵の惰氣を生じ、軍中疫病流行したり。顧ふに彼れが軍隊の形勢は彼れをして前年の覆轍を踏まざる前に退軍せしめたるものならん。彼れはパンノニアに歸りて翌年頓死したり。パン人は習慣によりて髮を切り、自から其の顏面を傷けて哀悼の情を表したり。是れ勇將の死に向ッて哀悼を爲すに婦人の涙を以てせず、勇士の

血を以てすべしと爲したればなり。アッチラの遺躰は金、銀、鐵にて製したる三重の棺に入れ、夜中竊かに之を葬り、列國の分捕品を其の墓中に埋め、而して其の墓を掘りたる凡ての捕虜はアラリクの葬式に於けると同じく殘忍にも悉く虐殺せられたり（紀元後四五三）。

ハン人の帝國はアッチラの頓死によりて瓦解したり。從來アッチラに壓伏せられたるゲピディ人、東ゴス人、等各々その同盟と共に團結してハン人に叛き、アッチラの長子エルラク、戰死し（紀元後四五四）。爾後ハン人の多數はウォルガ河の荒野に退き、而して他の亞細亞的遊牧民族ブルガリー人及びアウアル人等の中に投沒したり。斯くの如くアッチラ及び其の帝國は暗夜に流星の飛過するが如く一時天下を風靡して又た暗黑の中に消滅したり。然れどもアッチラは羅馬人の年代記及び獨逸人の傳記によりて今に其の名を轟かせり。彼は自から好んで「神の笞」と稱したり。彼れが馬蹄の過ぐる所草生ぜずと言ひ傳へらるゝ程に破壞的事業を遂行したり。然れども彼れは最も多く談判によりて目的を達し、又た文化に進みたる希臘人及び羅馬人が彼れの領内に移住することを奬勵したり。其の結果としてハン人は文明國民の奢侈的生活を學び亞細亞的又た野蠻的習慣に交ゆるに希臘羅馬の風俗を以てし、アッチラの宮廷はコンスタンチノープル及びラウエンナに於ける奢侈を以て充たされ彼れの將校、官吏、及び宮女等は爭ふて此の風習に化せられ坐するに毛氈あり、食ふに銀皿あり、而して希臘人を用ひて食物を料理し、其馬さへも種々の高價なるものを以て裝はれたり。然かもアッチラは獨り舊來の習慣を固守し、彼れの首府は匈牙利に於けるタイス河上の木壁にして飲食にも木器を用ひ、衣食住ともに全く蒙古に於ける牧者の如くなりき。

ワングル人の羅馬却掠（紀元後四五五）

ゴールの亂はスチリコの勢力を減殺したるが如くハン人の伊太利侵入は將軍エーチウスの信任を薄弱ならしめたるに似たり。暗愚なるワレンチニアン三世は僥倖にしてハン人の危難を脱しながらエーチウスの權勢を嫉みて手づから之を斬殺し、元老官マクシムスの妻を强姦し、遂にエーチウスの部下の爲めに弑せられたり（紀元後四五五）。マクシムス皇帝となり其妻死去したりしかば强て先帝の寡婦ユードクシャを娶り、其の愛を得んと欲して自から先帝を弑したるとを自白したり。ユードクシャは東羅馬皇帝セオドーン

アス二世の女なりしが東帝國は今や彼女に緣なきマルシアヌスの治世にして其救を得るの望なかりしかばユードクシアは先帝の仇を報ぜんと欲して北亞弗利加のカーセージに於けるワンダル人の王ガイセリクに復讎的救援を促がしたり。是より先きガイセリクは東西羅馬帝國の襲來に向つて百方防禦の策を運らし、バン人を煽動して其の目的を達し、エーチウス死して之に代るの名將なく、西帝國の瓦解益々甚しかりしかば好機到れりとなして其の軍艦を裝ひワレンチニアン死亡しマクシムス皇位に登りし後凡そ三ヶ月にしてタイバー河口に投錨したり。皇帝マクシムスは市街に於て撲殺せられ、其の死體はタイバー河に投棄せられたり（紀元後四五五年六月十二日）。三日の後ガイセリクはオスチア港よりして羅馬の都城に進み來りしが城内より壯兵出で來ると思ひの外敎會の監督レオは僧侶を率ゐて彼れを迎へガイセリクをして其の殘暴を輕減するの約を爲さしめたり。ガイセリクは抵抗せざる群民を害することなく、家屋の燒失を防ぎ、又た捕虜を虐待せざる可きことを約したり。然れども羅馬及び其の人民は六月十五日より二十九日に至るまで十四晝夜ワンダル人及びムーア人の暴行に放委せられたり。ワンダル人の目的は掠奪に在りて征服に在らざりき。彼等は凡て金銀の美術品、神殿其他の彫像、及び公私一切の珍寶を其の船に滿載し、彼等を歡迎したり皇后ユードクシアの寶玉さへも剝奪し、皇后並に其の二女及び數千の男女を捕虜としてカーセージに伴ひ去りたり。カーセージに於ける基督敎の老監督デオグラチアスは敎會の金銀器を賣りて羅馬人の爲めに或は其自由を購ひ、或は其の奴隷の苦難を輕くし、或は其他の不幸を救ひ、二個の會堂を以て病院となし、日夜看護の勞を厭はざりき。ガイセリクは猶ほ二十一年の間地中海上に暴威を振ひ東西兩帝國を脅嚇したり。彼は西羅馬帝國の滅亡に後るゝこと一年にして死亡したり（紀元後四七七年）。彼れ及びワンダル人が如何に羅馬人の恐怖たりしかは今に破壞の爲めに破壞し、掠奪の爲めに掠奪する野蠻の行爲を指してワンダリズムと稱するを以て知らるゝなり。

リシマー五代の皇帝を廢立す

ガイセリク去りたれども羅馬は自から其後を善くするの力もなくゴールの總督アウィッスは西ゴス人の王セオドリクの援助によりて遂に西羅馬帝國の皇帝に擧げられたり（紀元後四五五年八月十五日）。東羅馬帝國の皇帝之を裁可し、羅馬及び伊太利の人民は不幸ながらゴールの僧主に服從し

たり。

此時に當り羅馬の實權はワンダル人を破りて（紀元後四五六）、伊太利の救濟者と稱せられたり。蠻兵の長リシマー（リチメル）に存したり。彼れの母は西ゴス人の王クリアの女にして其父はスエウイ人なりき。

皇帝アウイッス淫樂に耽りて民心離れしかばリシマーは遂に皇帝に迫りて其位を辭せしめ、而して羅馬の元老院は彼れに死刑の宣告を與へたり。アウイッスは逃れてゴールに歸らんとするの途中遂に追躡せられて死に處せられたり。是に於てリシマーは曾てエーチウスの旗下に在りて武功を立て、且つ己れと深交ありし將軍マジョリアン（マヨリアヌス）を擧げて皇帝の位に即かしめたり（紀元後四五七）。彼は活潑有爲の人物にして能く帝國を治め、亞弗利加を恢復するの志を有せり。彼は軍紀を正し、良將を用ひ、伊太利の沿岸を侵せるワンダル人を討ち、又た北部伊太利の地に諸蠻の兵を聚め、西ゴス人の王セオドリクを破りて之を同盟となし、西班牙に到り將さに亞弗利加に進み、ガイセリクの根據を衝かんと欲し、三年の間大に艦隊をカルタジーナ（カルタゲナ）港に準備したりしかども內應者ありて却てゲ

ンセリクの爲めに艦隊を破碎せられたり。是より先きリシマーは既に皇帝の能を嫉みたりしに此の失敗によりて其の名望大に衰へしかば軍隊の不平に乘じ又た彼れに迫りて皇帝の位を辭せしめたり。マジョリアンは數日の後病死したり（四六一年八月七日）。或は毒殺の結果なりとも云へり。次にリシマーは羅馬の元老院をして無能なるリビウス、セウエルスを帝位に昇らしめたり（紀元後四六一―四六五）。而してリシマーは兵を指揮し、同盟を約し、伊太利半島の上に獨裁君主の權威を振ひ特にセウエルスの死後二年間は別に皇帝を立てずして自から萬機を制したり。然かも彼れは猶ほ自から帝位に昇ることを爲さず、單にパッリシアンの稱號を以て天下を支配したり。此の稱號は古代羅馬の共和時代には貴族の階級を意味したりしがコンスタンチン大帝以來尊稱として個人に授與せられたりしが殆んど攝政の意義を有したり。曩きにはエーチウス之に任じ（紀元後四三三）、而してリシマーは東羅馬皇帝レオ一世より此稱號を授與せられたり（紀元後四五七）。然れどもリシマーの權威は伊太利のみに止まりてアルプス以北に及ばざりき。

是時に當りワンダル人の王ガイセリクは毎年カーセージの港より艦隊を發して

西班牙、伊太利、希臘及び小亞細亞の海岸を襲ひ、ジブラルタルの海峽より埃及に於けるナイルの河口に到るまで其の侵掠の及ばざる所なかりき。ガイセリックはワレンチニアン三世の寡婦ユウドクシア及び其二女を囚にして羅馬よりカーセージに歸り其長女ユウドシヤをして强て彼れの長子に婦たらしめたり。後年東羅馬皇帝レオ一世と和してユウドクシヤ及び其の次女プラシディヤのみをコンスタンチノープルに歸らしめたり。傲慢なるリシマーも其の防禦に窮し、遂に東帝國に援を求め、皇帝マルシアンの女婿アンテミウスを擧げて西羅馬の皇帝となしたり（紀元後四六七～四七二）。東羅馬帝國はセオドーシアス二世の死後其姉プルケリアは帝位に擧げられ羅馬帝國に先例なき女帝の治世となりしが（紀元後四五〇、七月）、彼女は元老議員マルシアンを夫となして皇帝たらしめたり（紀元後四五〇～四五六）。彼れの死後バトリシアンたりし、アスバルの勢力により其の家扶レオ一世（紀元後四五七～四七四）皇帝となりしが彼は英邁の君主にして却てアスバルの專横を挫き、アンテミウスに西羅馬皇帝の衣冠を授け、東西兩帝國の兵力を合してガイセリックを討ち、亞弗利加を恢復せんことを企てたり。彼れはバシリスクスを將となし、一千百十三隻の船艦に兵士及び水夫十萬人を載せてコンスタンチノープルを發し、カーセージに向はしめたり（紀元後四六八）。然るにバシリスクス無能にしてガイセリックの術中に陷り、五日間の休戰を許したり。ガイセリックは此の機會を利用し、風勢に乘じ、大戰艦を裝ふて襲ひ來り且つ火船を放つて羅馬の船艦を燒き拂ひたり。其結果バシリスクスは戰艦及び軍隊の過半を失ふてコンスタンチノープルに逃げ歸り、ガイセリックは再び地中海に横行し、伊太利、希臘、小亞細亞等の沿岸を掠めツリポリーを略し、サルジニア及びシシリーの二島を征服したり。リシマーは皇帝アンテミウスの女を後妻に娶りしかども遂に彼れを戴くを欲せず、ミランに退きて憲兵を集め、軍を進めて羅馬を陷れ（四七二年七月十一日）、アンテミウスを弑し、更に東帝國よりオリブリウスを迎へて皇帝となしたり（紀元後四七二年三月）。彼れの妻はワレンチニアン三世の次女にして母姉と共にガイセリックの爲めに囚はれたるプラシディヤなりき。羅馬は三たび蠻族の兵に陷れられ、其の殺戮掠奪に委ねられたり後四十日を經て疫癘の爲めに專横なるリシマーの束縛より免かれたり（四七二年八月二十日）。リシマーは生前に五人の皇帝を廢立し、十三年間羅馬の實權を握り、死に臨みては其の軍隊をバルガンデ

イ人の一酋長なるゲンドバルドの指揮に遺託したり。而してリシマーの爲めに帝位に擧げられたるオリブリウスも亦た七ケ月の後に死去したり四七二年十月。

西羅馬帝國の滅亡 紀元後四七六

グンドバルドは名もなき一兵卒グリセリウスを擧げて皇帝となしたり紀元後四七三。然るに東羅馬皇帝レオ一世は其妻の姪女を娶りたるダルマチアの總督ジュリアス、ネーポス(ユリウス、ネポス)を擧げて西羅馬皇帝となしたり。グンドバルドはアルプス以西の鄕里に歸り十分グリセリウスを助くることを爲さゞりしかばグリセリウスは皇帝の位をネポスに讓りサロナの監督紀元後四七四(僧正)となり、ネポスは羅馬の元老院、伊太利及びゴール州の人民により て皇帝たることを認識せられたり。然れとも羅馬の同盟軍たる蠻族の兵に將たりしオレステス羅馬よりラウエンナの皇宮に迫りしかばネポスは怖れてアドリアチク海の向岸なる本領ダルマチアに逃れ、五年の後思義を忘れたるグリセリウスの爲めに刺殺せられたり。

匈奴人の王アッチラの死後獨立したる諸蠻族はダニューブ河北の地若くは其の南方アルプス山に至るの間に割據したり。就中その最も勇敢なる壯丁等は羅馬の同盟軍となりて伊太利を防禦し且つ其の恐怖する所とはなれり。此の同盟軍隊は種々雜駁なる野蠻民族によりて成立し、一種族の團體にはあらざりき。オレステスは元來パンノニア州の羅馬人なりしが匈奴人の該州を占領するやアッチラに事へて其の書記官となり、屢々コンスタンチノープルに使節となりてアッチラの意志を傳へたりき。アッチラの死後紀元後四七四、彼れは蠻族壯士の多く伊太利に往くの例に從ひて伊太利に來り羅馬の皇帝に服事したり。彼は勤勉にして勇氣あり且つ經歷に富みたりしかば漸次昇進し、皇帝ネポスの時にはパトリシアン及び軍隊の總大將に任ぜられたり。オレステスは久しく蠻人の間にありて能く蠻兵の風俗に化し、蠻語にて談語し、親しく蠻族の酋長等と交り、巧みに彼等の歡心を求め得たり。蠻兵等は名もなき希臘人に事ふるを欲せずして叛旗を擧げ、オレステスを帝位に即かしめんと欲したりしがオレステスは皇帝ネポスを廢して我子ロミュラス、アウガスチュラスを皇帝の位に即かしめたり紀元後四七六。此の新皇帝は六歲の美童にして羅馬帝國最後の君主なりき。彼は偶然にも羅馬市の創立者たる最初の王ロムルスの名と羅馬帝國の創業者たる最初の皇帝アウグスツスの稱號とを

兼有したり。希臘人は之を輕蔑しロムルスと言はずしてモミルスと云ひ又た羅馬人はアウグスツスと言はずしてアウグスツルス(小アウグスツス)と稱したり。オレステスは容易に六歳の小兒をして皇帝たらしめたれども其實は反覆常なき蠻兵の贊助によりたるものにして恰かも砂上に建てたる家の如くなりき。蠻人等は帝國の爲にするの心あるに非ず、唯だ餓えたる虎の如く我が腹を充たさんことを欲したり。彼等は變亂ある毎に報酬の增加と新たに特權とを要求し、其の要求容れらるゝ毎に益々其の傲慢と貪欲とを增長せしめたり。彼等は其の得たる所を以て足れりと爲さゞりき。彼等はゴール、西班牙、及び亞弗利加に於て彼等の同胞が帝國の領土を侵略し獨立の人民となりたるを羨み、彼等の爲し得たる所を伊太利に在りて爲さんことを欲したり。彼等はオレステスを贊助したる報酬として直ちに伊太利の土地三分一を彼等に分配せんことを要求したり。日耳曼の蠻族等は既に文明的定住の味を知り、陣營に眠食するを以て滿足せず、永久伊太利の土地をその鄕里と爲さんとを欲したり。彼等の欲望亦た憐むに堪へたりと雖ども之を許すには罪もなき伊太利人の土地を沒收せざる可からず。オレステスは之を爲すに忍びずして斷然彼等の强請を拒絶したり。是に於て蠻族同盟軍中の一人オドワカルは諸蠻族を指揮して其の要求を貫かんことを約し、アルプス以北の蠻人にも檄を傳へて南進せしめ、又た伊太利の諸方より同盟の諸蠻を集合したり。不幸なるオレステスは東帝國の援助を求め、又たワンダル人の王ガイセリックとも和を媾じて防禦の策を運らしたるも蠻兵に抗する能はずしてパウィツム(パウィア)の城壁に據りしが城は直ちにオドワカルの兵に圍まれて遂に陷り、オレステスは死刑に處せられ、アウガスチユラスは幼年なりしが爲めに其の一命を許されたり。ワレンチニアン帝の死後二十年にして九人の皇帝交々位に即き而して最後には六歳の小兒を以て之に擬するに至れり。羅馬帝國の衰微も亦た其の極點に達したりと謂ふ可し。されば蠻人オドワカル一躍して皇帝たるも不可なかりしに假たれども羅馬皇帝の威嚴は蠻人等の能く當る可からずと爲したる所にしてエーチウス及びリシマーも敢て自から位を僭することなくバトリシアンの稱號を以て滿足したり。假し假令ひ蠻人にして皇帝の位に昇るも其の同輩の服從せざるは必然の勢なりき。オドワカルは蠻兵により王として歡呼せられたり

しかども遂に自ら皇帝の衣冠を襲ふことなく、然かも先例に從つて他に皇帝を立るを以て無用の事と爲したり。是に於てアウガスチユラスをして元老院に向ひ其位を辭せしめ、而して、元老院の決議を以て時の東羅馬皇帝ゼノ（紀元後四七四―四九一）に一書を呈し、最早や伊太利に於て皇帝を置くの必要なく、東羅馬皇帝一人にて東西を兼併し、伊太利はオドワカルが文武の德に依賴して平和なるを得べければ彼れにパトリシアンの榮稱を與へ、伊太利を統治すべき權能を委任せられんことを請求し、卑屈なる元老院は元老院及び人民の名によりてコンスタンチノープルを以て羅馬唯一の帝都となさんことを哀願し、自から皇帝撰擧の特權を拋棄し羅馬皇帝の衣冠を奉還したり。アウガスチユラスはオドワカルの寛大によりて其の家族と共にラウエンナの王宮より放たれ、今のネープルスに近き處にある一邑とを年俸として黄金六千枚を與へられたり。而してオドワカルは曾て天下を征服したる羅馬及び伊太利の上に王となりたる最初の蠻人なりき。

憲法上より言へば此時西羅馬帝國は東羅馬帝國に合併したるまでにて伊太利の人民も之を以て其の滅亡とは考へざりき。且オドワカル伊太利の王となりし後も東羅馬皇帝の主權を承認し、伊太利に於ては羅馬の言語行はれ法律も行政も舊の如く羅馬の制度用ひられ、其の貨幣には皇帝ゼノの像を刻印して依然その主權の下に在ることを證明したり。然れどもオドワカルは其實伊太利をしてゴール西班牙及び北亞弗利加と同一の狀態に變化せしめたり。彼の三州に於ても伊太利に於けると同じく何人も此地方に於て羅馬帝國滅び、チユートン王族之に代れりとの宣言を爲したることなく、文書及び貨幣は猶ほ羅馬皇帝の名を署し若くは之を印して施行せられたり。然れどもゴール、西班牙及び亞弗利加に於ては諸蠻族の酋長既に王國を建設したるは事實なりき。伊太利も亦た之と同樣の狀態に變化したり。羅馬の元老院が皇帝の衣冠をコンスタンチノープルに還附せし後東帝國は一時ジヤスチニアン帝の治世に於けるの外伊太利の全部を恢復したることなく、而してオドワカルの果斷は西歐羅巴に於て一新紀元を開くの結果を生じたり。是よりして羅馬敎會は帝國に代りて自由に其の勢力を伸暢し、羅馬の文化と日耳曼人の元氣とを同化せしめて近世的國民及び新文明を發達せしむるの機會を得たり。されば紀元後四百七十六年は當時の伊太利人に對するよりも寧

ろ後世に對して最も記憶すべき年號なりと知る可し。

東羅馬帝國は此後猶ほ九百七十七年の間コンスタンチノープルに蟠りて保持せられたり。史家或は紀元後四百七十六年を以て西洋上世史の終となし、又た紀元後一千四百五十三年を以て中世史の終となすは畢竟前者は西羅馬の瓦解を意味し、後者は現に東羅馬の滅亡したる年なるを以てなり。東西兩國に分轄せられし以來羅馬皇帝の即位年表左の如し。

西

紀元後
三六四　ワレンチニアン一世（ワレンチニアヌス）
三七五　グレシアン（グラチアヌス）
三八三　ワレンチニアン二世
三九二　東西統一
三九五　ホノリウス
四二三　ワレンチニアン三世
四五五　マクシムス

東

紀元後
三六四　ワレンス
三七九　セオドシアス一世（テオドシウス）
セオドシアス一世
三九五　アルケディウス
四〇八　セオドシアス二世
四五〇　マルシアン（マルチアヌス）

四五五　アウィツス
四五七　マジョリアン（マヨリアヌス）
四六一　セウエルス
四六七　アンテミウス
四七二　オリブリウス
四七三　グリセリウス
四七四　ジユリアス、ネーポス（ユリウス、ネポス）
四七五　ロミユラス、アウガスチユラス、（ロムルス、アウグスチユラス）
四五七　レオ一世
四七四　レヲ二世
四七四　ゼノ

第三章　西帝國瓦解の結果

オドワカルの位置（紀元後四七六―四八九）　是時に當り羅馬帝國の西部に屬したる土地の大部分は日耳曼諸民族の押領する所となりて六個の大王國に區分せられたり。北亞弗利加はワンダル人の王國となり、ゴールに於けるロアール河よりジブ

テルタルの海峡に至るまでは西ゴス人の王國となり、ローン及びソーン兩河の地はバルガンデイ人の王國となり、ミューズ、モゼール、及び下ライン等の流域はフランク人の王國となり、今の葡萄牙及びガリチーアの地にはスエウィ人猶ほ王國を維持したり。而して最後にオドワカルは西羅馬皇帝を廢し、伊太利及びノリクムを以て其の領土と爲したり。彼れは羅馬の攝政(バツリシアン)としてコンスタンチノープルにある皇帝の代官たりしと雖ども伊太利に於ける蠻族諸軍隊の爲めに王として擁立せられたれば前に述べたるリシマー及びエーチウスの後繼者たりしのみならず、後に述べんとするセオドリック及びアルボインノの先驅者たりしなり。彼れが伊太利の王と稱せざりしは當時日耳曼諸民族各々その酋長を戴き、民族的王國あるを知りて未だ同一法律の下に異種なる諸民族を結合し之に領土の名稱を附するの習慣を知らざりしが故なり。彼れと時を同うしたるユーリクは西ゴス人の王と稱して西班牙の王と稱せず、又たガイセリックはワンダル人の王と稱して亞弗利加の王とは稱せざりき。オドワカルを擁立したる軍隊は一民族に非ざりしが故に、彼は其の稱號を撰むに大なる困難を感じたり。彼は諸民族の上に統治する羅馬皇帝と一民族の上に王たる酋長との外撰むべき稱號あるを知らざりき。羅馬皇帝の位置は望む可からず、然かも伊太利の王と稱すると能はず、又た伊太利の王と稱するは更に不可にして羅馬の軍織を組織したる日耳曼諸民族中の一名稱を採用すること亦た甚だ不可なりき。當時の記錄中彼れの稱號をゴス人の王となすものあれども彼れは未だ曾て此の稱號を用ひたることあらざりき。然かもオドワカルは儼然たる伊太利の王なりき。彼れは確定の領土及び組織ある軍隊を有し、アラリックの如く一時伊太利に侵入したるものと異にして永久なる領土の君主たりしは事實なりとす。彼れは伊太利の土地三分一を沒收して其部下に分與したり。彼れは租稅を課し、官吏を任命し、宣戰媾和の大權を掌握したり。當時公文書にして今に存するもの皇帝ゼノの名を記すこと稀にして王オドワカルと記し、而して攝政とは記せざりき。彼れは後に伊太利を占領したる東ゴス人及びロンバルド人等の先驅たりしこと明白なり。日耳曼人にして始めて伊太利の王たりしは即ちオドワカルなりと謂ふ可し。

彼れの政策は內部に於ては努めて羅馬の遺制を用ひ、外部に於ては伊太利半島の

外之に附屬したるノリクム及び北部イリヽクムを保つに在りき。西に於てはブロウオンス西ゴス人の王ユーリックに讓り、而してゴールの中部はに羅馬の總督シアグリムス依然としてフランタ王國及び西ゴス王國の間に介在したれどもオドワカルは彼れと關係を通ずることを爲さゞりき。然れども彼は東北境に於ては强硬なる政策を用ひたり。羅馬の廢帝ジユリアス、ネポスはダルマチアに遁れてサロナを首府とし一小王國を保ちたりしが遂に叛者の爲めに殺されたり（紀元後四八〇。）是に於てオドワカルは直ちにダルマチヤを襲ひて之を服從せしめたり。是の如くして彼れは十三年の間能く伊太利を統治し（紀元後四七六―四八九。）其の統治は頗ぶる成功して內外事なきことを得たり。されば彼れは鞏固なる王國を建設したるが如くなりしも彼れの位置に於て其の命脈に關する一大弱點存したり。そは彼れが一致團結したる一大民族の長に非ずして元來羅馬の同盟軍たりし諸蠻族の烏合の傭兵に依賴したりしこと是なり。

東ゴス人の王セオドリック　ハン人の王アッチラ全盛の間東ゴス人は其の權威に服從したりしも、猶ほ其の民族的一致を保ち王族アマリ家の後裔を戴き、アッチラの死後二年にして全く獨立することを得たり（紀元後四五五。）彼等はパンノニアを占領して東帝國と關係を結び、百年以前に西ゴス人が爲したると同一の順序を進み、第五世紀の後半期に於ける一大勢力とはなりぬ。東ゴス人のハン人に獨立するや王族に三人の兄弟ありて長をワラミルと云ひ中をテオデミルと云ひ、末をウイディミルと云ひ、各々戮力して其功を奏するを得たり。有名なる東ゴス人の王セオドリック（テオドリッヒ）は即ち中兄テオデミルの子にして維因附近の地に生れたり（紀元後四五四頃。）彼れの父が東羅馬皇帝レオと同盟し、帝は毎年黃金三百磅を支給することを約するや八歲のセオドリックは質としてコンスタンチノープルに送致せられたり。彼は周到なる敎養を受け學校にも出入したりしかども希臘の文學を好まずして只官武事を學び終生自己の姓名をさへ記すること能はざりき。十八歲にして父の許に歸りしが此時父の兄は戰死し、其弟は伊太利に去り全民族は悉くテオデミルの支配に屬したり（紀元後四五五―四七五。）セオドリック位に即くに及びて東帝國は土地及び黃金を彼れに與へ、而してダニューブの下流を防禦せしめたり。然れども東ゴス人の貧困や救ふ可からず、黃金あれば直ちに之を消

費し、而して羅馬人の如く勞働することを欲せず、資金盡くるときは復た戰爭侵掠を事としたり。セオドリックは皇帝ゼノを助けて其の良友たりしこともあれど忽ち翻つて其の强敵たりしこともあり。彼れは皇帝の友として信じ難く、敵としては最も恐る可き人物なりき。彼れは皇帝ゼノに語けて曰く

臣は陛下の寛仁によりて富有の中に生を保つことを得たり。然れども陛下希くは慈恩を垂れて臣の心願を聽許する所あれ。陛下に先きんじたる諸帝の遺產たる伊太利及び曾て世界の君主たりし羅馬は傭兵オドワカルの暴力壓制の下に動搖せり。余及び余が民族の兵をして僧主に向つて進軍せしめよ。余若し死せば陛下は高價にして厄介なる朋友を除くを得へし。余若し神助により て成功せば余は陛下の名により陛下の光榮の爲めに羅馬の元老院を支配し、余が戰勝の兵を以て羅馬共和國の一部分を奴隷の狀態より救ふを得べし。

セオドリックの請求は許容せられたり。紀元後四百八十八年の秋彼れはダニューブの中流に東ゴス人の全部を召集し直ちに移住の準備を命じたり。酋長の勇名と戰爭の風聞とは一般に希望と熱心とを與へたり。嚴冬に向つて進軍を始めたるは恐らくは饑饉に迫られたるが爲めなる可し。當時戰亂の結果地方には來春まで人民に支給するに足る糧食存ぜざりき而して其の進軍は全民族の大住移にして妻子眷屬悉く之に從ひ、最も貴重なる貨物は皆な運搬せられたり。同年十月總勢二三十万の東ゴス人はダニューブ河を渉り、パンノニアを通過し、北部伊太利の平原まで七百哩の路程に向つて進發したり。嚴冬の遠征と云ひ且つ途中ブルガリア人、ゲピディ人及びサルマチア人等の蠻族ありて其の進行を妨げたれどもセオドリックの天才及び勇敢は部下の全衆を鼓舞して凡ての困難に打勝ち遂に四百八十九年の春ジュリアン、アルプス（アドリアチク海に接したる東アルプス）を超えて伊太利の邊境に進入したり。オドワカルは大軍を率ゐて之を防がんと欲し、アクイレイア城の舊址に近きソンチウス河上に堅陣を備へて待ち構へたり。東ゴス人は妻子眷屬を後に置き、大敵を前に控へたり。戰敗は彼等に於て全族の滅亡を意味したり。されば彼等がオドワカルの傭兵よりも勇戰奮鬪したるは必然の結果なりとす。戰爭の勝利は明白にセオドリックに歸してオドワカルは敗軍し、其陣營は破碎せられき、其の軍隊は散亂し、ウエネチアの平原は悉く東ゴス人の占領する所と

なれり（四八九年八月廿八日）。オドワカルはウエロナ城に據りて第二の防戰を爲したれども也再び大に敗れてラウエンナに遁逃したり（同年九月廿七日）。此に於てオドワカルの兵多くは戰死したれば彼れは北部伊太利を拋棄してラウエンナの堅城に立て籠り、猶能く三年の間相支ふることを得たり。然れども伊太利半島は殆んどセオドリックの權威に服從し、羅馬の元老院及び市民は之を救濟者として歡迎したり。唯だオドワカルは人工天險によりて堅固なるラウエンナ城を固守し、屢々セオドリックの兵を惱ましたりしも城中糧食盡きて如何ともすること能はず、且つ外援もセオドリックの爲めに破られて望なかりしかば遂に和を請ふの止むを得ざるに至れり（四九三年二月）。

是に於て兩雄の間に和約成り東ゴス人は城中に入り、而して兩雄は併立して伊太利を共に治めんことを誓約したり。是れセオドリックの詐術にして彼れは誓約の後オドワカルを陣中の宴に招き、不意に起て彼れを刺殺したり（四九三年三月）。流石のセオドリックも戰場にては彼れを討取ること能はずして其の長き光榮ある生涯中一大汚點となる可き蠻行を敢てして六十三歲の老雄を倒したりき。オドワカルはオレステスを殺して十七年の後セオドリックの爲めに殺されて同一の運命に遭遇したり。

東ゴス人の王國（紀元後四九三―五五四）

憲法上より言へばセオドリックの勝利は唯だ彼れがオドワカルに代りたるまでにて伊太利の政治に何等の變動を生ぜざりき。然れども實際上より觀察すれば是れ伊太利の一大事變たりしなり。從來伊太利に侵入したる蠻族は烏合の兵なりしが今や大團結を爲したる日耳曼の一民族悉く移住し來り、而して從來破壞を事となしたる蠻族の中より羅馬皇帝として恥かしからぬ建設的經營の才能を有する明君現出したり。されば事實上に於てセオドリックの成功は伊太利の上に重大なる變化を及ぼしたり。蓋しセオドリックはオドワカルよりも年少く、且つ才能遙かに彼れよりも秀で第五世紀及び第六世紀の間凡ての日耳曼人中最も賢明にして先見遠謀一世に冠絕したる人傑なりき。又東ゴス人はオドワカルの部下に屬したる烏合の兵よりも人衆く且勇敢にして上に王族の裔を戴き、二十年來彼れの指揮に從つて一たびも失敗したることなく衆心一致、固より聯合軍の比に非ざりき。彼等は三代の間羅馬帝國の中に住みて其

制度文物に接し他の日耳曼民族よりも開化の程度に於て高かりき。且つ彼等は百年以前より基督教に改宗して多く異教の風習を脱したり。伊太利に於けるセオドリックの新日耳曼王國はオドワカルの舊王國よりも甚だ鞏固にして伊太利を統一するに多くの適當なる資格を具有したり。

セオドリックは暴力を以て伊太利を征服したれども平和と正義とを以て三十三年の間能く之を統治したり。彼れはオドワカルが爲したる如く全國の土地三分の一を其の部下に割與したり。然れども此事は別に伊太利人に多くの苦痛を與ふることと無かりき。何となればオドワカルの部下或は戰死し、或は虐殺せられたれば其の所領を敢めて以て東ゴス人の要求を充たすことを得たればなり。東ゴス人は最も多く北部伊太利に於けるポー河の流域に住し、中部伊太利には稍々少なく、而して南部伊太利に住したるものは稀なりき。東羅馬皇帝アナスタシウスはセオドリックを承認して伊太利の王となし、且つオドワカルが先帝ゼノに奉還したるに西羅馬皇帝の衣冠及び其の他の飾裝品を返附したり（紀元後四九七。）セオドリックは伊太利を治むるの術に於て最も聰明なる見識に基づき、勉めて羅馬の遺制を保存したり。然れども彼れは羅馬律を以てゴス人を統御すことなく、羅馬人は羅馬の法律により、又たゴス人は其の舊慣によることゝなし、而して羅馬人とゴス人との訴訟には混合裁判制を用ひたり。彼れは羅馬律に基づきて二人種の關係を整理せんが爲めに一種の新法典を編成したり。彼れはゴス人をして伊太利人を保護するの任務を爲さしめ、決して人民を虐待す可からざることを主眼としたり。彼れはゴス人の子弟をして文弱の弊に流るゝことなからしめんことを欲し、彼等が羅馬人に化せられて文事に耽ることを戒しめ「敎鞭の下に戰慄する兒童は敢て敵の刀劍を見るの勇なし」と言へり。然かも是れゴス人の武勇を以て其の王國を保護せしめんとの趣旨に出でたり。彼れは武力によりて建てられたる王國は又た武力によりて支持せざる可からざることを知れり。而して彼れは羅馬帝國の制度及び法律を尊敬し、亦た部下の衆を戒しめて敢て法律を破り人民に暴虐を加ふることなからしめたり。彼れはゴス人をして專ら武藝を勵み、又た羅馬人をして專ら農商工の業に從はしめ、一は平和なる文藝を事とし、他は戰爭の任務に堪へしめんことを努めたり。彼れは伊太利人中の秀才を拔擢して中

央政府に於ける重要の官職を授けたり。彼れは最後迄オドワカルに忠實なりしリベリウスを擧けて近衛隊長となし、カッシオドルス及びボエチウス(英ビーシアス)等の學者を擧げて政務を司らしめたり。彼れは基督敎徒なりしかども現今のユニテリアン派に類したるエリアス(アリウス)の敎徒にして羅馬帝國が正統の基督敎に非ずと爲したる宗旨を奉じたりき。然かもセオドリックはカトリク敎徒(正統派)に對しても羅馬人となく、ゴス人となく、自派の敎徒に對するが如く平等に之を登用し、剩さへ猶太人に向つても正義を拒むことを爲さゞりき。彼れの言に曰く、宗敎は王の命ずること能はざる所のものなり、蓋し何人も其の意志に反して信ずることを强ひらるゝ能はざればなりと。又た曰く、正義の恩惠は誤謬の信仰を有する者にも否む可からざるなりと。公明正大なる君主の資格彼れに備はりしこと是の如し。

是に於て伊太利は稍やく混亂破壞の禍を脫して秩序復活の恩澤を被むれり。羅馬共和時代の晩年羅馬が天下を征服したるの結果、大地主は小地主を壓倒し自由勞働者減少して奴隷之に代りたるは伊太利衰微の一大原因なりしが東ゴス人が

伊太利を占領してより全國に復た小地主起り、農業復興して伊太利は再び其の產物を以て其の人々を養ひ得るに至れり。且つ從來伊太利に穀物を輸入したる北部亞弗利加はワンダル人の手に在りて伊太利は之に依賴すること能はずして自給の必要に迫られたりき。

又た社會復興の兆候として工事盛に行はれたり。セオドリックは帝國時代の道路、水道、及び下水溝渠等を修繕し、其他羅馬の大建築、紀念碑及び彫像等を保存する爲めに力を盡くし、又たラウェンナ及びウェロナに於ては自から大建築を起したり。彼れの建築にして今猶ほ存するは其の小斷片に過ぎざれども後世北部伊太利よりコシクと稱する一種の美術的建築法起りて歐洲一般に行はれたるは畢竟ゴス人の名に因みたるものなりとす。彼れは後世に於ける羅馬皇帝の例に倣ひてラウェンナを首府となし、邊境の患ある毎にウェロナに移轉したり。此の兩首府を始めとし、パウィア、スポレート、ネープルス及び其他の諸市府皆なセオドリックの經營により寺院、水道、浴場、遊廊、宮殿等を以て美麗に裝飾せられたり。彼れが貨幣に彫刻したる宮殿の肖像はゴシク流の建築の最も舊く且つ最も確實

なる標本なりしと云ふ。

セオドリックは其の外交政策に於ても亦た大業を、成就することを得たり。彼は戰爭によるよりも政畧によりて多く其の版圖を擴張し、之が爲めに彼れの領土は南はシヽリー島の南端より北はダニューブ河に及び、東はイリヽクムより西はゴールの南東部に達したり。アルプス以西の地には西ゴス人(ウイジ)の王國ありてローンの河口及びプロウオンスの沿岸之に屬し、ローンの中流及び上流地方はバルガンデイ人の王國に屬し、而して兩王國の北にはフランク人の王國ありてセーン河の上流及びロアール河にまで蔓延したり。セオドリックは即位の初年に於てフランク人の王クロウイスの妹を娶り、又た彼れが庶出の女子一人をバルガンデイ人の王子シヂスムンドに嫁し他の一人を西ゴス人の王アラリク二世に嫁せしめて三國と同盟を結ぶことを得たり。然れどもフランク人の王クロウイス不世才の才を持して或はバルガンデイ人の土地を侵し或は西ゴス人の領土を奪はんと欲し、遂にバルガンデイ人の王グンドバットと連和して西ゴス人の王アラリクと戰ひ之を殺したり(紀元後五〇七)。是に於てセオドリックは其孫なる西ゴス人の幼主アマー

リクを助け兩王國に向ッて宣戰し、二軍を遣りてゴールの南東部を恢復したり(紀元後五〇九)。之が爲めにクロウイスの蠶食したる所はゴールの西南部に限られて彼れは全ゴールを統一することを得ざりき。而して東ゴス人の王國と西ゴス人の王國とは猶ほ伊太利と西班牙との間に自由なる連絡の道を存することを得たり。爾後十五年の間西ゴス人の王アマーリックが成年に達するまでセオドリックは彼れの爲めに政を攝して東西兩ゴス人の上に君臨し、斯くの如く兩ゴス人をして其の分離せし以來二百年の後一時再び相合同することを得せしめたり。彼れは又た亞弗利加にも其の勢力を伸ばさんと欲し、其妹をワンダル人の王ッラサムンドガイセリックの孫に嫁せしめて殆んどワンダル人の王國を屬邦たらしめんと爲せり。是の如く彼れは其の指導によりて日耳曼民族の諸王を聯合し、彼等をして國際的平和同盟の中に一致せしめんことを努めたり。其の計畫は固より成功に至らざりしと雖どもセオドリックが如何に聰明英智にして其の見識の如何に時世に先きんじたりしかを知るに餘りあり。

是の如く伊太利はセオドリックの支配によりて內外に平和を享有することを得

たり。小農制の再興によりて農業は復興し、度量衡及び貨幣の均一、善良なる道路、河流及び運河の便によりて内部の交通は勃興し、穏和なる關税と外人の好遇とによりて外國との貿易は奬勵せられたり。然れどもセオドリックの晩年は種々なる不幸の事件生じ、賢主も爲めに人民の怨を惹き起すことを免かれざりき。セオドリックが正出の子は唯だ一人の女子のみなりしが彼れは之を西ゴス人の一貴族に嫁し、夫妻を以て共同の繼嗣と爲さんと欲したりしに女婿は僅かに五歳の小童を遺して早世したり（紀元後五二二）。而して伊太利人は此の機會に乘じて東羅馬帝國の應援により東ゴス人の王國を顚覆せんと欲するの兆候ありき。是によりて種々なる疑獄起り、特に賢明なる哲學者にして元老議官たりしボエチウス（英ビーシアス）及び其舅シンマス死刑に處せられたりしはセオドリックの治世に於て一大不幸の事件なりき（紀元後五二五）。ボエチウスは一年の間獄にありて後世幾多の志士仁人を勵ましたる「哲學の安慰」なる一書を著はしたり。羅馬教會の法主ジョーン一世も亦た嫌疑を蒙りて獄に投ぜられ獄中に死し殉教者として人民に尊崇せらるゝに至れり（紀元後五二六）。幾もなくしてセオドリックも亦た疾を得て民怨の中に死去したり。

時に年七十二にしてラウエンナ城外の圓塚に葬られ、其墓は今に東ゴス人の遺跡として存在せりと云ふ。

東ゴス人の王國は後二十八年を經て遂に東羅馬帝國の爲めに滅ぼされたり（紀元後五五四）。セオドリックの賢明にして其の王國の永續せざりし大原因は不幸にして彼れに有力なる繼嗣なかりしこと是れ其一なり。又た彼れは羅馬人とゴス人とを同化せんと欲して同化すること能はず、一は依然として王國の文官となり、他は武人として王國の護衛を事とし、二者全たく業を異にして互に婚を交ふること少なく、其他言語、風俗法律及び宗教等に於て二者相合同すること能はざりしは其二なり。特にゴス人は羅馬人等が異端視したるアリウス派の基督教を奉じ、而して羅馬人は東帝國と同じく基督を神とする三一神主義（ツリニチー）の基督教を奉じたり。斯くの如く東ゴス人は全然伊太利人と合同する能はざりしに拘はらず、自然に溫暖の氣候及び柔弱に墮落したる羅馬人の風習に化せられ、野蠻人の自由なる元氣を持續する能はざりしは其の王國の永續せざりし第三の原因なりとす。

フランク人の興起

紀元後第三世紀の頃ラインの下流、ヴェゼルの河邊及びハルツ山の地方に住居したる諸種の日耳曼小民族結合してフランク人と稱し、久しく羅馬人の強敵となりしが羅馬帝國の衰微に乘じて南進し、羅馬人がベルギカ及び下日耳曼と名けたる地方に住居したり。此地方には保護すべき大都會なく、又た據守すべき大城郭なかりしかば羅馬人は漸次之を野蠻人に放任して顧みざりき。之が爲めに紀元後第五世紀の前半にはフランク人は下ライン、ミューズ及びミエルトの河流に沿ふて確定なる領土を有し第五世紀の後半四三〇年——四五〇年迄——にはソム及びモゼルの兩河間に蔓延したり。匈奴王アッチラの大軍ラインを渉りてゴールの地に進入するや紀元後四五一羅馬の守備兵殲滅せられ羅馬の總督等驅逐せられ之が爲めに多く利益を得たる者はフランク人なりき。ハン人等の經過したる後彼等の爲めに一旦荒廢に屬したるライン及びモゼル河間の土地は再び羅馬人に恢復せらるゝことなくして生殘したる人民等は遂にフランク人の支配に歸するに至れり。

是時に當り彼等は既に二大部族に分れたり。一部は元來イッセル河畔荷蘭にに住居したるよりイッセルの舊名イサラ又はサラに因みてサリク、フランク人と稱せられ、ラインの河口に住し漸次シエルト河口よりソム河に至り又たドーウル海峽より内地はミューズ獨、マース河に至るの地に蔓延したり。彼等は男子に非ざれば遺産を相續せしめざる習慣を有し、後世サリク法と稱する制度の起原を爲せり。一説には遺産の事をサラと言ひたるが故に、サリク、フランク人又たサリク法の名稱を生じたりと言へり。又た他の一部は少しくラインの上流に沿ふて住居し、河岸に住したる事實によりリバ即ち河岸といふ語に因みてリプアリー又はリプアリアン、フランク人と稱せられ、下はリッペ河のラインに合する處より上はライン河のラインに合する處に至り西はミューズ河に至るの地に蔓延したり。西羅馬帝國滅亡の頃紀元後四七六羅馬帝國に屬したりしコンブレー、アルラス、ツールネー、及びトンゲルン等の諸市府はサリク、フランク人に屬し、ケルン、ツリエル、マインツ及びメッツ等の市府はリプユアリアン、フランク人に屬したり。後者の南にはバルガンディ人の王國ありしが前者の南には羅馬の總督シアグリウス紀元後四六三——四八六能くゾエーギディウスの遺業を守りて羅馬の版圖を保ち、ソアソーンに根據してセーン

の流域全部とッロアー及びオーレアンの二市府に至る中部ゴールの平原とを管轄したり。西羅馬帝國滅亡の後フランク人は彼れを指して羅馬人の王と稱したり。又た其の南には西ゴス人の王國ありて其の版圖はロアール河よりジブラルタルの海峽に至るまで西班牙半島の大部分を包括したり。

元來フランク民族は諸小種族の散漫なる結合にして各種族の上には特別なる酋長ありて一大酋長の下に統一せられたる團躰にあらざりき。彼等は久しくライン邊境に於て羅馬人と相接し、時には之と同盟して其の藩屏となりしこともあり。然れども彼等は日耳曼種族中羅馬の文明に化せらるゝこと甚だ遲くして依然祖先以來の多神教を奉じたり。羅馬帝國に接近して遂に帝國内に侵入したる他の日耳曼民族等は其の侵入以前より多く羅馬の文化を吸收し、夙に祖先以來の宗教を棄てゝ一種の基督教を尊信したりしかどもフランク人は則ち然らざりき。又た彼等はゴス人、ワンダル人又はロンバルド人の如く全然舊來の鄉土を抛棄し新鄉土を求めて羅馬帝國内を遍歷することを爲さゞりき。彼等は其の舊鄉土を保持して失はず、漸次之に新領土を加へて膨脹することを爲したり。是故に他の日耳曼民族は一時羅馬人を征服するとを得たるも最初は兩人種の相違軋轢により困難し遂には多數なる羅馬人の風習に化せられて其の勢力を永續せしむることを能はざりき。フランク人の王國大に成功して歐洲の西部に於ける近世列國の淵源となりしは即ち以上の理由に基づくことを知る可し。

クロウィスの偉業（紀元後四八一―五一一）

紀元後四百八十一年サリクフランク人の王チルデリック（獨、チルデリッヒ）死して其子クロウィス（獨、フロドウエッヒ）位に即きたり。彼れの祖父をメロウェウスと稱したり。彼れは羅馬の同盟となりて匈奴王アッチラに服せず、シャロンの戰に於て名譽を顯はしたり（紀元後四五一）。クロウィスの系統をメロウィング家と稱するは即ち彼れの後裔なるが爲めなりと言へり。一說にはサリク、フランク人はラインの河口に住し、メルウエ即ち沿海の地といふ語より出でたりとも言へり。そは兎も角もクロウィスは即ちフランク大王國の創業者にして實にメロウィング系統の祖なりとす。

クロウイスは羅甸音の轉訛にして原名はフロドウエヒなり。後世獨逸にてルッドウイヒと云ひ、佛蘭西にてルイと云ふ諸王の名稱は即ち之より出でたり。クロウ

イスの位に即くや年僅に十六歲なりき（紀元後四八一）。彼れの父チルデリクヒルデリッヒはツールネーに住し僅かにシェルト河の上流地方を統治したり。されば、クロウィスの相續したる領土は今の白耳義の一小部分にして其の兵力も五千人に過ぐることと能はざりき。白耳義を流るゝ諸河（シェルト、ミューズ、モゼル、ライン）に沿ふて定住したるフランク諸族は各々メロウィング系統の王を戴きて獨立し、サリク、フランク族と同等の勢力を有し、往々その同盟となることもあり又た其の敵人となることもありき。日耳曼人は平時世襲の會長を戴き、而して戰時には自由に勇將の旗下に屬するの習慣を有したり。クロウィスの才幹勇武は彼をして遂にフランク族を統率して偉大なる王國を建設することを得せしめたり。

西ゴス人の王國は有力なる王ユーリクを戴き一時盛大なりしが彼れの死後（紀元後四八五）十六七の少年アラリク二世王となりクロウィスの爲めに好機會を與へたり。時にクロウィス既に二十一歲なりしが彼れは先づ羅馬の總督シアグリウスを攻擊し、ソアソーンの役大勝利を得彼れをして其の領土を棄て西ゴス人の王都ツールーズに奔らしめたり（紀元後四八六）。アラリクは彼れを救ふこと能はずして彼をクロウィスに引渡し、クロウィスは遂に彼れを死に處したり。是に於てセーン河の流域、ソアソン、パリ、ルーエン（ルアン）、リームズ（ランズ）の諸市クロウィスの領土に歸し、尋て三年間に彼は其の版圖を南の方ロアル河及び西の方アルモリカの邊境にまで擴張することを得たり。

クロウィスは統一の大業を成さんが爲め計畧を運らして悉く同族の諸王を殺したり。彼は其の目的を達せんとするに當り殘忍酷薄の手段を用ふることを躊躇せざりき。斯くの如くにして彼れは凡てメロウィング系統に屬する人々を殺し、彼れの同盟者たりしキルンの王シゲベルトを除くの外悉く兩フランク族諸王の領土を合一することを得たり。されば彼れの領土は南の方バルガンデイ人の王國に接し、東の方マイン及びネッカル河に沿ふてアレマンニー聯合に接したり。彼はバルガンデイ人の王國と親交を爲し其王グンドバルトの姪クロチルデ（フロテヒルディス）を娶りたりしが（紀元後四九二）、彼女は其の同族一般にアリウス派の基督教を奉じたりしに反して獨りカトリク主義の基督教を信じたり。此の結婚は異教を奉じたるフランク民族をして羅馬迦特力主義の基督教に歸依せしめ第十七世紀に至る

まで歴史上に大影響を發生するの原因とはなりぬ。

クロウィス改宗の結果

元來リプアリヤのフランク人は常にアレマンニー聯合と境を接して相競爭したりしが、クロウィスは兩フランク族を統一するに及びて自然にアレマンニーとの衝突をも繼承したり。此のアレマンニー聯合はコブレンツ以南ライン上流の東岸、マイン及びネッカル兩河の流域及びブラック、フォレスト(黒林)の全部を占領したりしが彼等はアルサース及びロレーンの地方を超えてゴールに進入し、北の方キュルンのフランク王を襲ひたりしかばクロウィスは之を救はんが爲め出軍し日耳曼人種中の最も勇敢猛獰なる二大民族はスツラスブルヒの附近に於て會戰したり(紀元後四九六)。激闘の後流石のフランク人も一時退却の模樣ありしかばアレマンニーの軍は勝利を得たりと歎呼して益々突進したりき。然るにクロウィスは武勇智略によりて遂に其の形勢を一變しアレマンニーの軍を打破り、其王は戰死し、其兵或は殺戮せられ或は追擊せられて餘衆悉く降服したり。是よりアレマンニーは其の獨立を失ひ、歴史上唯だ其の名稱を存するのみとなれり。今に佛蘭西人が獨逸をアルマーキュと稱するは之が爲めたりとす。傳說によれば此時に至るまでクロウィスは未だ其妻クロチルデの勸諭に反し基督敎を信ぜざりしが激戰の最中基督に祈念して若し勝利を得ば將來改信して洗禮を受くべしと誓願したりと云ふ。戰勝の後彼れはリームズ(ランズ)に於て兵士三千人と共に洗禮を受けたり(紀元後四九六〇。十二月廿五日)。其餘のフランク民族も亦た君主の例に倣ひて其の曾て燒き棄てたる十字架を拜し、其の從來信仰したる偶像を燒き棄て一代の間に全然異敎を廢し基督敎を採用したり。

西羅馬帝國を蹂躙したる北歐蠻人の中最初に又た最初より羅馬迦特力敎に改宗したるものは唯りフランク民族なりき。他の蠻人は正統的基督敎を奉ぜずして羅馬人が異端視したるアリウス派の基督敎に歸依したりしが故に、彼等は羅馬帝國に於て最も強大なる組織を有したり羅馬敎會僧侶の贊助を得ること能はず、ゴス人、リンダル人及びバルガンディ人等の王國は之が爲めに鞏固なる基礎を建設することを能はざりき。故にクロウィスの改宗は彼れの成功上最も重大なる結果を生じフランク王國をして容易に又た永久に健全なる發達を爲すことを得せしめたり。

クロウィスは基督教に改宗したれども其の品性及び其行爲に於ては何等の變更あらざりき。彼れは正統的基督教の深奥なる神學説を理解したるに非ず、又た高尚なる基督の倫理を會得するの能力を缺きたり。彼は基督が十字架に磔殺せられたる物語を聞き大に發怒し叫んで曰く、吾れ若し我が勇敢なるフランク人に將として其場に在りたらんには我れ彼れの爲めに讎を報ず可かりしものをと。されば彼れが迦特力教徒となりしは固より偶然の事に過ぎざりしも是よりフランク王國と羅馬教會とは同盟して利害を一にし、其の關係は歐洲の歴史に至大の影響を及ぼしたり。是時に當り羅馬教會の監督はポープ（父と云ふ義）と稱せられ西歐羅巴に於て凡べて基督教會の法主と仰かれたり。羅馬の法主は常に正統主義の神學説を固守して大にアリウス派の異端説に反對したり。然れども蠻族及び其の諸王は殆んど皆なアリウス派の基督教徒にして現に伊太利は同派に屬する東ゴス人の王セオドリックに統治せられたり。セオドリックは賢明にして宗教の自由を與へたれども彼れの死後如何なる運命に遭遇せんか測られざりしかば羅馬法王はフランク人の王が迦特力教に改宗したることを大に喜び何事にても彼れの企業を賛助して其の成功を祝したり。羅馬帝國の衰微に乘じて羅馬法の勢力次第に增加し、其の部下の僧侶甚だ多くゴールの諸市に於ても羅馬帝國の遺氏はその指揮に從ふを常とせり。されば クロウィスが能く一代の間にゴールの大部分を統一することを得たるは彼等が常に直接間接彼れを援助したるの結果にして羅馬の遺民たるゴール人と其信仰を一にしたるは實にフランク人が永久なる王國を建設することを得たる所以なり。

クロウィスの成業

アレマンニー征服後クロウィスは妻の叔父なるバルガンディの王グンドバルトに向ッて開戰したり。クロウィスはバルガンディ王の弟ゴデギシルと謀を通じ、該王國を分割せんことを約したり。一時グンドバルトは戰敗れて領土の南隅アウイニオンに逃れフランク人の王に朝貢を爲し、又た其の領内に於ける迦特力教徒にアリウス派の信徒と同樣の特權を享有せしむ可きことを約したり（紀元後五〇〇）。此役クロウィスは迦特力教徒なるゴール人の不平に乘じて其功を成したり。翌年グンドバルト憤起して恢復を成し、尋でクロウィスと和することを得たりしかども是よりバルガンディ王國内に於ける迦特力教徒はフランク

人を仰ぎて其の保護者となし、該王國は遂に後年全くフランク王國に併呑せられたり。紀元後五三四

クロウィスは正統なる迦特力教の保護者としてアリウス教徒なる西ゴス人の王がゴールの南部アキテーンを占領することを忍ぶ能はずと爲し、其王アラリク二世が迦特力教徒に害惡を加ふることを以て開戰の理由と爲したり。第一の戰爭はアラリクの舅にして且つクロウィスの同胞を妻と爲したる伊太利に於ける東ゴス人の王セオドリクの仲裁にして和解したり。然れども、クロウィスは再び西ゴス人に向ッて宣戰し紀元後五〇七 謂て曰く余は是等のアリウス教徒が、ゴールの地を領することを忍ぶ能はず、上帝の佑助により我等は彼等に向ッて戰ひ彼等の領土を我等の支配の下に征服す可しと。彼は西ゴス王國の強きを思ひ、バルガンデイの王ゴンドバルト及びキルンの王シゲベルトと同盟を聯ねて開戰したり。クロウィスはポアチエー附近の平原に於て大に西ゴス人の兵を破り其王アラリクを戰死せしめ、凱旋してボルドーに入り、來春首府ツールーズを畧し西ゴス人の大酋長アラリク一世及びアタウルフが百年以前に伊太利より掠め來りたる羅馬の戰利品及び其他の財産を分捕したり紀元後五〇八。

クロウィスはツールーズより歸りてツールに達せしとき東羅馬皇帝アナスタシウスの使節到來して彼れを羅馬の大官位プロコンスル及びパッリシアンに叙任し之に附屬したる貴金の冠と紫色の衣とを贈與したり。羅馬の官位を得て感謝することは一般に北歐蠻人の常習なりしかばクロウィスも甘んじて之を受領し、羅馬皇帝が彼れの權力を正當ならしめたることを喜べり。皇帝の意は是等の厚遇によりて彼れを其の同盟と爲し、以て伊太利に於ける東ゴス人の王セオドリクを制肘せんとするに在りき。是れ實にクロウィスの生涯に於て最も得意の時期なりき。

明年彼れの成功は稍々減殺せられたり。伊太利の王セオドリクは西ゴス人の幼主アマルリヒの祖父且つ保護者として援兵を遣はしアール附近に於てフランク人及びバルガンデイ人の聯合軍を破り其兵三万人を殺し、ナルボンヌ及西班牙に至る地中海沿岸の地を恢復したり紀元後五〇九。

クロウィスはセオドリクの爲めに其の侵略を妨げられたりしかどもロアール河と

ガロンヌ河との間に於けるゴールの地を併呑し、ピレニース山以北に於ける西ス人の領土大半フランク王國に屬したり。クロウィスは更に北轉して此の方面に於てフランク王國の領土を圓滿ならしめんことを企てたり。キュルンの王シゲベルトの年既に老ひたりしがクロウィスは其子フロデリッヒを欺きて父を弑せしめ、尋で其の罪を責めて之を殺し、遂に其の領土を奪ひ、全フランク民族を統一することを得たり（紀元後五一〇）。彼れは僅かにツールネーの地方の一酋長より身を起し、ゴールの紛亂に乘じて遂に其の大半を併有するに至れり。彼れは羅馬の總督シアグリウスを破りて後（紀元後四八六）十年餘ソアッソンに住しその改宗の後パリ遂に門を開きて之に降りしが（紀元後四九七）南征より歸りて後遂に之を以て其の首府と定めたり（紀元後五〇八）。在位三十年四子を遺して死去したり（紀元後五一一）。

クロウィスは羅馬帝國を分領したる蠻族酋長の中最も偉大なる成蹟を遺したり是れ其の人格必しも彼等にまさるが爲めには非ざりき。東ゴス人の王セオドリクは遙かに彼れよりも優等なる人格を有したり。クロウィスは其の性殘忍酷烈なることヴンダル人の王ガイセリクよりも甚しかりき。然かも彼れの智略とフランク民族の位置とは却て彼等よりも偉大なる功業を爲すことを得せしめたり。蓋し近世西歐諸國は概してフランク王國に淵源し諸蠻王國の直接間接近世まで持續したるもの僅かに英國に於けるアングロ、サクソン人とゴールに於けるフランク人とあるのみなればなり。

クロウィスは中世の歐羅巴に於て新たに社會を組織すべき凡ての要素を調和せしめたる最初の人なりき。其の三要素とは何ぞや。

第一、野蠻人の勢力、第二、羅馬帝國の文明、第三、羅馬教會の信仰即ち是なり。他の蠻族等は遠く鄕里を離れて移住し、遂に惰弱なる然かも多數なる羅馬の遺民中に在りて同化せられ、久しく野蠻人の元氣を維持すること能はざりき。之に反してフランク人の南征は移住に非ず、彼等は根據の地を去らずして漸次に膨脹したり。彼等は羅馬帝國の領土を併呑し其の文化を吸收すると同時に、日耳曼の野蠻民族を征服し常に蠻人の元氣を維持し、又は其の新鮮なる勢力を注入することを得たり。是れ最も緊要のことなりとす。羅馬帝國の領土を分割し之に王國を建設するも野蠻人の侵入止まざる間は其業直ちに烏有に歸せん。蠻人侵入の禍原を絶

つは其巣窟を覆すに在り。此事全たく成就したるは第九世紀の初シャレメーン帝の時に在りと雖ども クロウィス既に其端を啓きたりと言ふことを得べし。

西帝國滅亡（紀元後四七六）以前に在りて羅馬帝國に接したる野蠻人はサクソン人とフランク人との外既に基督教に改宗したり。然れども皆なアリウス派の基督教を奉じたり。フランク人は晩く基督教に改宗したり。然れども彼等は始より羅馬迦特力教に改宗し其の強大なる僧侶の勢力と結托したり。ゴス人、ワンダル人、バルガンデイ人等は組織力に乏しきアリウス派の基督教を奉じたり。故に彼等は統一の必要なる時代に共同普通の教會組織を有せず、而して是等の上に於て最も強盛なる羅馬法王の教權を認識せざりき。彼等の王國存續するときは歐洲は宗教上及び政治上に於て統一を爲すの望なかりしならん。是れゴールに於ける西ゴス人及びバルガンデイ人の王國顚覆し、而してフランク人の王國のみ唯り永續することを得たる所以なり。

メロウイング朝の盛時（紀元後三八〜六）

日耳曼人の習慣によれば父は其の財產を諸子に分割するの制なりき。故にクロウィスの死後フランク王國は四子の間に分割せられたり。長子テウデリッヒは北東部ライン河兩岸の地を領してメッツに住し、次子フロドメルはロアール河に沿ふたる西部ゴールの地を領してオルレアンに住し、三子ヒルデベルトは中央の部を領して巴里に住し、四子フロタルは北部即ちサリク、フランク人の舊地部を領してソアソンに住したり。而して彼等はロアール以北の地を本部と視做し、其の以南の地は別に又た各々之を分割したるが故に、各王は他王の領土を通過せざれば其の本領より屬領に達すること能はざるの不便を生じたり。其の結果として各王の間に領土兼併の爭を釀したり。然れども四子皆な父の猛獰なる資性を承け各々能く亂世に處してフランク王國を擴張するの任務に堪へたり。彼等は各々相鬩ぎたりしかども外敵に向つては往々一致協同を爲すべきことを忘れざりき。彼等は先づ最も接近せる獨立の王國を征服せんことを以て其の目的となしたり。テウデリッヒは日耳曼の內地に着眼し、ヒルデベルト及びフロドメルは南の方バルガンデイ王國を併呑せんことを欲したり。テウデリッヒはフロタルの援助によりてツリンギヤ人の王國を滅し（紀元後五三一）又たヒルデベルト及びフロタルは兵を合してバルガンデイ人の王國を攻め遂に之を征

服したり紀元後五三二。是より先きフロデメルはバルガンディ遠征中戰死し紀元後五二四、三人の幼兒を遺したりしが其の二人は叔父フロタルの爲めに殺され其の末子は僧となりて生存することを得たり。而して其の領土はヒルデベルト及びフロタルの爲めに分割せられたり。

テウデリッヒの死後紀元後五三三其子テウデベルト位を繼ぎ能く父の領土を保持したり。是時に當り伊太利に於ける東ゴス人の大王セオドリク死して東西ゴス人の兩王國漸やく哀微し、伊太利はフランク人及び東羅馬帝國の相爭ふ所となれり。東羅馬皇帝ジャスチニアン伊太利を恢復せんと欲し、黄金をフランク人の三王に贈りて北方より之を襲はしめたり紀元後五三五。翌年東ゴス人の王ウィティゲスはブロウオンス及びレーティヤをフランク人に讓與して其の援助を求めたり。而してヂャスチニアン帝も亦たアルプス以北の領土をフランク人に許與して其の主權に屬せしむることを承認したり紀元後五三六。

是の如くクロウィスの死後その王國は分割せられたれども其の勢力を減殺することなく却て四隣の土地を蠶食したり。尋てテオデベルト死し紀元後五四七、其子テオデバルトに至て繼嗣絶へ同五五三且つ巴里の王ヒルデベルトも亦た死去し同五八、老年のフロタル獨り存して三年の間全フランク人の王國を統一することを得たり紀元後五五八—五六一。フロタル死して其の四子再び王國を分割し長子ハリベルトは巴里及びアクィテーンを領し、次子クンツラムはバルガンディを領し、三子シギベルトは東部を領し、四子ヒルペリッヒはソアソン地方を領したり。ハリベルトは早く死し紀元後五六七、三弟各々相呑噬して史上無比の慘劇を演じ、而して其の内亂に際しフランク王國東西の間に漸次一大懸隔を生じたり。

メッツを中心となしたる部分は自ら東方に向て勢力を有したるが故に之をアウストラシヤ(東王國)と稱し、巴里及びソアソンを中心としたる部分は西部に根據したるが故に相合して後は之をニュースツリア(西王國若くは新王國)と稱したり。而してバルガンディは又た別に王國の一區畫となり、オルレアンを以て其の首府となしたり。東部の人口は殆んど全く日耳曼人にして西部及び南部は羅馬帝國の遺民多數を占めたり。故にアウストラシヤは純然たる日耳曼人の言語風俗を保守して日耳曼的勢力の中心となり、ニュースツリア人は漸次日耳曼民族の風習を脱

し羅馬化せられて羅馬の制度文物を多く採用するに至れり。

ふリベルトの死後五十年、間の内亂中アウスツラシヤ王シギベルトの皇后アルンヒルディス(ブルンヒルデ)及びニユースツリア王ヒルペリッヒの皇后フレデグンディス(フレデグンデ)美貌と歳能とを具有し互に猛惡なる死活の爭を爲し、たる後フレデグンディスの子フロタル二世又た全フランク王國を統一し(紀元後六二一)其子ダゴベルト一世(紀元後六二八―六三八)に至りて王權既に其の頂點に達したり。斯くて百五十年の間にフランク王國は、八回分割せられ、三回統一に屬し、而して地方の貴族次第に跋扈し、メロウイング朝の權漸やく衰運に傾きたり。是よりクロウィスの子孫は唯だ虚器を擁し、實權は宮相アウスツラシヤ公に歸し、其の子孫カロリング王朝となりてメロウィング朝に、代り(紀元後七五二)更にフランク王朝をして羅馬に代り世界の大帝國たらしむるに至れり。是の如くメロウイング朝は衰亡したれどもフランク民族は益々その勢力を膨脹せしめたり。フランク人は實に今の佛蘭西及び獨逸の創業者なり、而して世にフランスの名稱あり又た今に獨逸の南部にフランチン(英フランコニア)といふ地名の存するは之が爲めなりとす。

羅馬時代のブリテン

フランク人のゴール征服とアングロ、サクソン人のブリテン島征服とは中世史上最も特筆すべき大事件なり。西羅馬帝國を分割して創立したる蠻族諸王國多くは沙上の建築に等しく他の新蠻族壓倒せられて滅亡したり。獨りフランク人とアングロ、サクソン人と其の建設の業を全うして永續せしむることを得たるのみならず、更に近世史上に於て赫々たる光輝を放つもの亦た彼等の子孫に外ならざるなり。

羅馬の大英雄ジユリアス、シーザルは始めて今のイングランド及びスコットランドにブリタニヤと云ふ名稱を適用したり。是れブリテン島及びブリトン人の名稱ある所以なり。元來ブリトン人はゴール人と同民族にしてケルト種に屬せり。大シーザルのゴールを征討するやブリトン人はゴールに聲援を與へたり。是に於て彼は兩度ブリテン島に進入して羅馬の武威を示し、ゴール征服の障害を除きたり(紀元前五五及び五四)。然かも彼は之を征服して羅馬の版圖に歸せしむることを爲さゞりき。羅馬の史家タシタス(紀元後八〇―一一七頃)が言へる如く「彼はブリテンを征服せざりき、彼れは唯だ之を羅馬人に紹介したるのみ」なりき。紀元後四十三年迄て羅

馬帝國は之を放任して顧みざりしが皇帝クラウディウスの時（紀元後四一―五四）に至りて帝國の政策一變し征服の方針を定め始めて征討將軍アウルス、プラウチウスを遣はしたり（紀元後四三）。爾後將軍アグリコラ來りて遂にスコットランドを除くの外征服の業を完うすることを得たり（紀元後七八―八四）。エボラクム（ヨルク）は政治上の中心となり、而してロンディニウム（ロンドン）は既に貿易の中心なりき。道路敷設せられ、貿易開通し、九十二の都會起り內部の戰爭止み、土人皆な太平の恩澤に浴することを得たり。然れども羅馬人は遂に今のスコットランド及びアイルランドを征服することを爲さざりき。ブリテン島に於て羅馬人が敷設したる四大道路の中その幾分は今に存して猶ほ使用せられつゝありと云ふ。

ゴールに於てもブリテンに於ても羅馬人は內部の戰鬪を戡定し土人の間に平和と幸福とを與へたり。其の結果土人は羅馬帝國の保護に依賴して自から鄕土を防衛するの勇氣を失ひたり。特に羅馬の政策は州領の獨立を恐れ、ブリテン人をしてブリテン島を防禦せしむることなく彼等の中にて召募したる兵は之をダニューブ若くはユーフレチース地方に遣はして帝國の鎭營となし、而してゴール、西班牙又は亞弗利加人をブリテンに遣はして之を衞守せしめたり。故に帝國の各地の人民は我が鄕土の護衞を以て帝國の任務となし、各地の人民平和にして互に交易商業を營みたれども其の間に共通の愛國心存せざりき。而して基督敎羅馬帝國に蔓延するに及びてブリテンの土人も亦た基督敎に感化せられたり。

羅馬の文化はブリテンに於ても偉大なる成蹟を擧げたれども土地懸隔したる一孤島なりし爲めに其の影響はゴールに於けるが如く深厚ならざりき。羅馬人のブリテンを占領したる結果は軍事上及び政治上に止まりて人民は其の土言を保持し羅馬の文化は都會に存して多く田舍に及ばざりき。されば北歐諸蠻羅馬帝國に亂入し帝國の兵ブリテン島を引上げたる後、ブリテン人は羅甸語を忘れ容易にアングロサクソン人の爲めに征服せられたり。

羅馬時代に於て今のスコットランドにはピクトと稱せられたる蠻人住し、而してスコットと稱する蠻族は當時アイランドに住したり。彼等は海陸よりブリトン人を襲ひ又東海よりは大陸のサクソン人往々侵入し來れり。西羅馬帝國まさに瓦解せんとするに及びてブリテンの羅馬兵は大陸に引上げられてブリトン人は三

方より夷狄の侵入に委せられたり（紀元後四〇九。）翌年彼等は皇帝ホノリウスに向つて保護を請求したりしかども皇帝は遂に彼等に保護を與ふること能はざりき。北よりはピクト西よりはスコット亂入し而して東よりはサクソンの襲來に接し、ブリトン人は再び羅馬の將軍エーチウスに向つて救援を衷願したり（紀元後四六。）「野蠻人は我等を海に擠し、海は又た我等を野蠻人に追ひ返へすなり、我等は二者の間に在りて二種の死に頻せり我等は或は殺され或は溺死するの外なし」とは彼等が歎願の哀辭なりき。然かもエーチウスは遂に一兵を遣はして彼等を救ふこと能はざりき。

英國の起原（紀元後四九頃）

蠻人を用ひて兵となすは羅馬帝國の政策なりしがブリテンの酋長ウォルチゲルンは西北二面の蠻人を攘はんと欲してサクソン民族に救援を求めたり。是に於てジューッ人の一隊サネット島に上陸したり（紀元後四九。）傳說によればヘンギスト及びホルサの兄弟之が將たりしと云へり。其の援助によりてウォルチゲルンはピクト人を破りたれども彼は遂に其の誘引したるサクソン人の侵犯を防ぐと能はざりき。當時サネットは今日の如く本島に連續し居らざりしが故にジューッ人は之に根據して漸次本島を犯し且つ大陸より渡來する者益々增加し、二十三年の後悉くケント州の沿岸を占領したり（紀元後四七三。）ケント王國の起原即ち是なり。

數年の後サクソン人の一群來りてブリテン島の南部を侵畧したり（紀元後四七七―四九一。）其の酋長エーラは南（サウス）サクソン人の王と稱したり。サッセクスは其の遺名にしてチッチエスターは其の首府なりき。次に第三群來りて其の西に上陸し（紀元後四九五。）其の酋長セルディク及びシンリク遂に西（ウエスト）サクソン人の王と稱したり（同五一九。）ウエッセクスは其の遺名にしてウインチエスターは其の首府なりき。第四群來りてケントの北に侵入し東（イースト）サクソン人の王國を爲し（紀元後五二七。）エッセクスの地名を生じたり。ロンドンは其の首府なりき。次にアングルと稱せられたる一群は第五世紀の後半に於てエッセクスの北に東（イースト）アングリア王國を建設したり。其の北部は今にノルフォルク（北氏）と稱し、其の南部はサッフォルク（南民）と稱す。ノリッチは即ち其の首府なりき。第六の王國も亦たアングル人によりて建設せられたり（紀元後五四七。）ヨルクは即ち其の首府にして之をノルサムブリア王國と稱したり（紀元後六一七。）ハムベル河の北（ノルス）にあ

りたるが故に北の名ありき。第七の王國も亦たアングル人によりて建設せられ紀元後六〇〇頃其地邊境に在りたるが故にマルシヤ境と云ふ義の名ありき。リンコン若くはリースターを以て其の首府と爲したり。以上之を七王國と稱す。是の如くブリテン島がアングリヤ即ち英國となりしは凡そ百六十年間に渉りたる移住及び侵略の結果にして之に關係したるは專らヂユーツ、サクソン及びアングルの三種族なりき。ヂユーツ人は少數なりしかども最初の王國にして國敎の創立者となり、其の首府カンターベリーは今に英國々敎會の大中心なりとす。サクソン人は英國王室の系統を出だしウッセックス王セルディクの後裔は今に連綿として英國の王位を繼承せり。アングル人は最も多數にして三種族全躰の總號となり遂に國土に其の名稱を附與したり。ブリトン人は常に彼等を總稱してサクソン人と云ひ、而して彼等は自から總稱してエングルと云ひたれば今日世人が英國人をアングロ、サクソン人と稱するも亦た適當の事なりと謂ふ可し。紀元後第九世紀七王國はウッセクス王に統一せられ、而してエングランドと云ふ名稱始めて第十世紀より行はれたり。

英國人の祖先は、大陸の何邊より來りしかは疑問なりとす。然れどもジューツは丁抹の北部ジヤットランド地方に住し、アングルは其の南にあるシユレスウイヒ及びホルスタインに住し、サクソンはエルベの河口及び其の西方沿海の地に住したるならん、而して第一と第三とは部分のみ移住し、獨りアングルは全種族を擧げて移住したるものゝ如し。是れ其の名稱を全躰に與へたる所以なる可し。然れども彼等は英國即ちブリテン島南部の全地を征服したるに非ず。今にウエールスは元のブリトン種族にして其の言語も亦た英語とは異なれり。日耳曼人は羅馬帝國の州民即ち其の言語の解す可からざる人民を稱してウエルシュと稱し、獨逸語にては今に佛蘭西、伊太利、西班牙等の外國人を稱してウエルシュと言へり。されば アングロ、サクソン人は始よりブリトン人をウエルシュと云ひ遂に彼れ等が割據したる土地をウエールスと稱するに至れり。其の他コルンウオール及びカンバーランド地方も亦た純然たる英人種にあらざるなり。特に今のアイルランドの全部及びスコットランドの北部は全たく新來民族の征服する能はざりし所なり。元來羅馬人もスコットランドおよびアイルランドを其の版圖に收むることを爲さゞ

りき。然れども羅馬帝國の權力の及ばざる處にまで基督教は蔓延し紀元後第五世紀に於て既にアイルランド及びスコットランドはともに基督教の爲めに感化せられたり。故に今のアイルランド人は純然たるケルト種族なり。今のスコットランドも北部即ち高地に於ては純然たるケルト民族より成り立ち南部即ち低地はイングランドの北部と同一にしてアングロ、サクソン種族と少しく丁抹人の混合したるものなり。而して純然たるケルト種族に屬するスコット人は元來アイルランドに住したり。されば今のアイルランドは本とスコチヤ即ちスコットランドと稱せられたり。紀元後第五世紀の後半期よりスコット人漸次ブリテン島の北西岸に移住し始め、紀元後第十世紀ピクト種族と結合して後ち始めてスコットランドの名稱は用ひられたり。然れども爾後久しく元來のスコットランド即ち今のアイルランド)と區別せんが爲めスコットランドは久しくスコチヤ、ノワ(新スコットランド)と稱せられたり。

アングロサクソン人侵入の結果

アングロ、サクソン人のブリテン島に侵入したるとは紀元後三百七十五年以來日耳曼民族擧りて南進西漸したる大移動の一波に外ならずと雖ども大陸に於ける狀勢と大に其趣きを異にせり。元來ブリテン島はゴール及び西班牙に於けるが如く羅馬化せらるゝと深厚ならざりき。是第一の相違なり。羅馬帝國の他方に侵入したる野蠻民族は陸上よりしたるに、アングロサクソン人は海上より侵入したり。是第二の相違なり。第三の相違は第二の結果にして更に重大なりとす。夫れ陸上より羅馬帝國に侵入したる野蠻民族は其以前既に羅馬の文化に接觸し、其の軍隊に編入せられ、或は帝國の土地を以て其軍功を賞せられ、概して羅馬の藝術、法律及び宗教に通曉し、往々其侵略は羅馬皇帝の主權を認識して之に服從するの條件を以てしたり。彼等の多くは既に一種の基督教を奉じたり、而して侵入の後漸次羅馬加特力教に化せられ早晩その固有の言語を廢して羅甸語を採用したり。彼等は羅馬の遺民を服從せしめたるのみにて之を殲滅すること能はざりき。彼等は羅馬人を同化する程に多數ならずして却て羅馬人の爲めに同化せられたり。

ブリテン島に侵入したるアングロ、サクソン人は全たく之と異なる所の結果を生じたり。彼等は海上より羅馬帝國の孤島に侵入したり、而かも彼れ等は嘗て羅馬

帝國の權威に接したることなく羅馬の文藝、言語及び宗教に觸れたることなき地方より移住し來れり。彼等は嘗て羅馬の臣民となりしことなく嘗て羅馬の軍籍に編入せられたることなく、嘗て羅馬の同盟となりしことなく、彼等の酋長は嘗て羅馬の官職又は爵位を受けたることなく、彼等は嘗て羅馬の勢力を感したることなく、大陸諸州を侵略したる日耳曼人の如く更に羅馬及び其の帝國的制度に對する畏敬の念を有せざりき。羅馬帝國を蹂躙したる諸蠻族の中彼等は最も野蠻にして最も殘酷なる民族なりき。大陸の諸州を侵略したる蠻族等は既に半ば羅馬化せられたる後其の文明を畏敬しつゝ帝國の領土内に移住し、中には羅馬の制度を保存して建設の事業を試みたる者ありき。之に反してアングロ、サクソン人は全たく羅馬の文化に觸れたるとなく、且つ羅馬の文化に浴すると最も薄弱なりし一孤島に侵入したり。是の如くブリテン島に於ける征服者及び被征服者の特別なる事情は大陸諸州に於けると全然異なる所の結果を生じたり。ブリトン人は羅馬帝國の他方に於て見ざる程の強硬なる防戰を爲したれども漸次ブリテン島の西隅及び北邊に驅逐せられ其他の地方に於ては殆んど撲滅せられたり。固より婦女及び奴隷等の生殘したる者ありしならんと雖どもブリテン島の大部分に於ては概して一民族來りて全たく他の民族を滅し、從前の法律、言語及び宗教は消えて他の法律、言語及ひ宗教に變じたり。即ちアングロ、サクソン人はブリトン人に代り、日耳曼民族の習慣言語及び宗教は羅馬の法律、言語及び基督教に代り一時羅馬の文化はアングロサクソン人の爲めにブリテン島に於て消滅したること後年マホッメト教徒なる亞剌比亞人が北部亞弗利加に於て爲したる事蹟に等しかりき。是の如くアングロ、サクソン人のブリテン島征服は全たく破壞的にして建設的要素を缺き、異教的征服にして一時基督教の跡を絶たしめたり。且つ其の征服たるや數世紀に跨がり、被征服者は最も頑強なる抵抗を爲し征服者は寸進尺歩漸次舊來の土人を驅逐し最初の侵入以來百五十年にして稍やくイングランドの東半を占領したるのみ、而して遂に全島に於て彼等を撲滅すること能はざりき。

七王國（ヘプタルキー）の競爭（紀元後四四九―八二八）

アングロサクソン人がブリテン島に侵入したる結果各地に獨立の王國成立したり。然れども此の時代を稱して七王國の時代といふは名實相違せり。同一時期に於て七王國ありしとなく時としては八王國

りしともあり、又た諸王國全然獨立なりしにもあらざるなり。且つブリトン人等は西部に於て數個の酋長を奉じ獨立の團體を爲したりき。畢竟アングロ、サクソン人もブリトン人も共に諸處に獨立の酋長を戴き各地に割據して正確なる意義の王國は未だ存せざりしなり。アングロ、サクソン人は常にブリトン人と戰ひながら又た一方に於ては相互に競爭を始め其中最も强大なる王國は他の諸王國の上に覇威を振ひ、その王はブレットソルダ(ブリテンの支配者)と稱せられたり。最初に此の稱號を得たるはサッセクス王エーレ(エルラ)なりき。第二はウェッセクス王セルディクの孫セアウリンにして第三はケントの王エセルベルトなりき。此王の時代に基督敎始めてアングロ、サクソン人の中に宣傳せられたり。

前に述べたるが如くアングロ、サクソン人は固有の言語及び宗敎を保持して失はず、最初の侵入以後百四十八年間彼等は祖先以來の多神敎を信奉して基督敎の何ものたるかを知らざりき。ブリトン人の間には基督敎殘存したれども彼等の基督敎はアングロ、サクソン人の上に何等の感化を及ぼすと能はざりき。フランク人が征服したるゴールの地に於てはフランク王の下に羅馬の官吏用ひられて政務を司どり、羅馬の僧侶フランク人を基督敎に感化し、羅馬の市府依然として從前の文化を維持せんことを努めたり。然れども、ブリテン島の形勢は全く之と異にしてアングロ、サクソン人の侵入の結果一時ゴールとの交通貿易も停止せられたり。ゴールの地は比較的に富有繁榮なりしもアングロ、サクソン人は最初餘り野蠻にして唯だ戰爭を事とし他の開化せる民族と交易を爲すの必要を感ぜざりき。然れども、アングロ、サクソン人次第にブリテン島の南東岸に沿ふて定住し、稍々產業に從事するに從ひ商業起りてゴールの商人海峽を渡りケントに入り來り、ケントと大陸との交通甚だ密接となり、ケント王エ・セルベルト(紀元後五六六—六一六)はフランク人の王ハリベルトの女ベルサ(ベルクタ)を娶て后となすに至れり。(紀元後五八四頃)ベルサは基督敎信徒にして一僧侶を伴ひ來り、荒廢に屬したる羅馬時代の基督敎寺院を以て其用に供したり。エ・セルベルトの權威はケントの外に及び、婚後數年にして彼はハムバー河以南に於ける諸王の上に覇權を振ふことを得たり。羅馬の法王グレゴリー一世(大と稱す紀元後五九〇—六〇四)は此機會に乘じてアウガスチン及び四十人の僧侶を遣はし、ブリテン島に傳道を企てたり(紀元後五九六)。アウガスチンは百四

十八年前ヘンギスト及びホルサの上陸したるサネット島に到着したり（同五九七。）ケント王エセルベルトは其后の誘導にして大に之を歡迎し宣敎の自由を與へ、遂に王を始めとして數千人洗禮を受けて基督敎に改宗したり。アウガスチンはカンターベリーに於ける廢寺を用ひ之を名けて基督會堂（クライストチャーチ）と稱し羅馬法王より最初のカンターベリー大監督に任ぜられたり。エッセクスの王セベルトはエセルベルトの甥なりしが彼れもロンドン最初の監督メリッスより受洗して基督敎の信徒となれり。

是の如くエセルベルトの治世はアングロ、サクソン時代の英國史上に於て一新紀元を開きたり。彼れは大陸と交通を爲しアングロ、サクソン王にして始めて基督敎を信じ、又た始めて成文法律を制定したり。彼れの死後ケントは其の覇權を失墜し其の保護によりて成立したるアウガスチンの敎會も一時衰微したりしが東（イースト）アングリヤの王レードワルド起りてエセルベルトに代り第三のブレットワルダと稱せられたり。彼は諸神を廢するとを爲さざりしも同時に基督を神として崇拜する迄に基督敎に歸依したり。第四の覇王はノルサムブリアの王エドウインなりき。彼れはケント王の遺女エセルブルガを娶りて其后となしたりしが（紀元後、六二五）アウガスチンに從ひ來れる伊太利の一僧バウリヌス彼女に侍してノルサムブリアに赴き遂に其王を基督敎に勸化することを得たり（紀元後。六二七）エドウインが受洗したる會堂はヨルクの大寺院となりバウリヌスは最初のヨルク大監督に任ぜられ、而してヨルクは北方に於て基督敎を弘布するの中心となれり。英國には今にカンターベリーとヨルクとに二人の大監督ありて全敎會諸監督の上に管轄權を有し、ヨルクはカンターベリーの次に位して英國敎會二中心の其一なりとす。最初アングロ、サクソン人の諸王國は肩を比べてブリトン人を征服しつゝありしかども漸次彼等を驅逐するに從つてサッセクス、ケント、東アングリヤ、エッセクスの四王國は其の地理に於てブリトン人と隔絶し、而して彼等と境を接し專ら征戰に從事したるはノルサムブリア、マルシヤ、及びウエッセクスの三王國なりき。されば、ケント及び其他ブリトン人と境を交へざりし諸王國が次第に衰微したりしは自然の數なりとす。ノルサムブリヤは次に最も勢力を振ひ其王エドウインは後世第五のブレットワルダと稱せられ就中その最も大なる者なりき。彼れの權勢は一時

ケントを除くの外凡て他のチユートン諸王國の上に及びたりしがマルシヤ人の王且つ異教の勇將たりしペンダの爲めに破られて死したり（紀元後六三三。）ペンダは爾後二十二年間概して覇權を振ひノルサムブリアの王オスワルドを滅ぼしたりしが（紀元後六四二）オスワルドの弟オスウイユと戰ふて敗死したり（紀元後六五五。）是に於て異教は其の最後の保護者を失ひ、異教と基督教との武力的競爭は其の終局を告げたり。

ペンダの一時ノルサムブリアに勢力を振ふや其の基督教も亦た勢力を失ひたり。然るにノルサムブリア再度の感化及びマルシヤ最初の傳道は專らアイルランドのスコット人によりて成就せられたり。

前に述べたるが如くアイルランドは羅馬帝國の版圖に屬せざりしも紀元後第五世紀以來基督教は既に傳はりて後世聖徒の島と稱せらるゝ程に基督教の光明を四方に散布したり。然かも政治上に於て羅馬帝國に屬せざりしが如く羅馬法王に屬せずして獨立の教會を組織したり。聖コロムバは北部ブリテン（蘇格蘭）のピクト人に道を傳へ（紀元後五六五）聖アイダンはノルサムブリヤに教を布き（紀元後六三五）聖コロムバン（紀元後五九五）及び聖ゴール（紀元後六一四）は大陸に赴きて傳教に從事したり。是の如く大陸よりは羅馬教會の勢力進入すると同時に北方よりは愛蘭教會の勢力を蔓延し來りて共に異教のアングロ、サクソン人を感化せしめたり。東アングリヤ（イースト）は大陸よりバルガンデイ人フエリックス來りて福音を傳へ（紀元後六二七）羅馬法王ホノリウス一世（紀元後六二五——六三八）は監督ビリヌスを遣はしてウエッセクス人を改宗せしめ（紀元後六三五）又たサッセクスもノルサムブリア人ウイルフリッドの傳道によりて遂に異教を拋棄し（紀元後六八一）而して數年の後異教最終の根據地たりしワイト島（イングランドノ南海ニ在リ）もウイルフリッドによりて改宗し全イングランドを擧げて基督教の版圖たらしめたり。一時羅馬教徒と愛蘭教徒との間に競爭ありてイングランドは其のいづれに屬す可きか疑問なりき。しかるにウイルフリッドの盡力により當時の覇王オスウイユはホイットビーに於て兩教の僧侶を集會せしめ討論の結果ウイルフリッドの說王の採用する所となりて羅馬教會の勝利に歸したり（紀元後六六四。）これより全イングランドは羅馬迦特力教に從ひ、羅馬法王の管轄に屬して孤立の狀勢に陷ることを免かれたり。此後羅馬法王ウイタリアヌス（紀元後六五七——六七二）は小亞細亞タルソスの學僧セオド

ールをカンターベリーの大監督に任じ(紀元後六六八―六九〇)英國教會の組織的統一に從事せしめたり。此のセオドールはアングロ、サクソン人の全教會が服從したる最初の大監督なりき。

ペンダの死後ノルサムブリアの覇權數年間持續したりしも後マルシヤは復た獨立したり。マルシヤの覇權はノルサムブリヤ人の忍ぶ能はざるが如くノルサムブリアの覇權も亦たマルシヤ人の忍ぶ能はざる所なりき。然れども第八世紀の間はマルシヤ最も強盛にして全國を統一するの運命を有するものゝ如くなりき。就中その王オッファー(紀元後七五七―七九六)は最も有力にしてフランク人の大王カール(後にシャーレメーン帝)と同等の交際を爲したりと云ふ。然るにウエッセクス漸次獨立して偉大なる王エグベルト位に即き(紀元後八〇二)マルシヤ及びノルサムブリアに代りて全アングロ、サクソン人の上に覇權を握り(紀元後八二八)遂に之を子孫に傳へ永く英國室の祖と仰がるゝに至れり。

七王國時代の基督教

前節に述べたるが如く七王國時代に於ては正確なる英國未だ存せざりき。此時に當り基督教會はアングロサクソン人に向つて統一的組織の摸範を示したり。僧侶はマルシヤ若くはウエッセクス人にしてカンターベリーの大監督たり、又たケント若くはサッセクスの人にして東アングリヤ若くは其他の監督たるとを得たり。彼等の王國と王國とは相分爭して政治上何等の統一なかりしもアングロ、サクソン人は宗教上に於て既に同一の民族たることを證明したり。基督教會は英國に文化を輸入し、異教的野蠻人の猛烈を緩和し、禽獸的勢力の上に道德的勢力あることを知覺せしめたるのみならず、分離したる民族に新奇にして且つ有力なる一致の紐帶を與へたり。國家は種々に分爭して止まざりしも教會は地方的感情の上に超然卓立して唯だ全躰の利益を謀り、一致したる中央的制度の摸範を表はし、以て宗教的統一制は政治的統一制に先驅して其の爲めに道を開きたり。當時僧侶は國王の顧問として其の諮詢に應じ、往々大臣となりて政務に軌掌し、且つ地方行政上に於て重大なる勢力を有したり。

大監督セオドールは實に英國統一の組織者なりと謂ふ可し、彼れが英國に來りし時はアングロ、サクソン人の間に於て基督教弘布の時代既に去り教會組織の必要なる時期なりき。是より先き各王國は一教區を爲して地方的割據の風教會の

上にも行はれたり。セオドール・は先づ全英國の僧侶をヘルトフォルドに召集して僧侶の大會を組織し（紀元後六七三）尋で各王國を分割して數多の新教區を組織し以てカンターベリーを中心として一大國教會の制度を創設したり。是の如くしてアングロ、サクソン人の宗教的一致は實現せられたり。又たセオドールは其の指揮の下に羅馬時代の凡ての知識を集めたる學校を設立したり。これより處々に學校起り、野蠻なるアングロ、サクソン人の中より當代第一の學僧ビード（紀元後六七三―七三五）を出だすに至れり。ビードは英國最初の歴史家なりき。其の各著は羅甸語にて記載せられ、アングル民族の教會史（ヒストリア、エッグレシアスチカ、ゲンチス、アングロルム）と題せられたり。然かもビードの所謂教會は全民族を包含し其の歴史は紀元後七百三十一年に至るまでの國王及び人民の事蹟を叙述したり。彼れは其の書名により英國に於て未だ政治上の統一あらざりし時既に英國民族の實在したることを表明したり。

且つ教會の感化は凡ての方面に於て社會改善の原動力なりき。セオドールは凡そ小兒を偷む者に向つて葬式の執行を許さざりき。又た彼は父母にして七歳以上の子を賣ることを禁じたり。ヨルクの大監督ヱグベルトは子及び親族を賣る者を破門したり。當時國家の法律にては奴隷を殺すが如きは犯罪とならざりしかども教會にては之を罪惡として懲戒の方法を設け、日曜日及び祭日には奴隷の勞働を免し又た奴隷を解放するは來世の冥福を增すものとして大に之を奬勵したり。此の如きは中世の歐羅巴に於て一般に然りしなり。

アングロ、サクソン人の基督教に感化せられたるとは啻に英國の歴史に於てのみならず、又た西洋基督教の歴史に於て特筆すべき一大事變なりき。歴史的に言へば基督教は實際羅馬帝國の宗教なりき。羅馬の勢力の及ぶ處東西となく、基督教も亦蔓延したり。而かも羅馬の勢力の圏外に基督教の弘布せられたるは少かりき。紀元後第六世紀の末に於て羅馬帝國の人民及び西羅馬帝國の領土を征服したる蠻人等は皆な基督教の信徒なりき而かも嘗て羅馬帝國の一部分たらざりしライン以北の日耳曼及びスカンディネウィア及び嘗て羅馬帝國の一部分たりしも再び蠻人の爲めに征服せられたるブリテン島は皆な悉く基督教會の範圍外に存したり。アングロ、サクソン人の改宗は或る意味に於て羅馬教會最初の外國傳道な

りき。是れ羅馬及び其の文化に關係なき異民族を感化したる最初の宗教的征服なりき。是れ凡ての歐羅巴を基督教の版圖たらしむるに至りし心靈的征服の序幕なりき。特にアングロ、サクソン人は自から改宗して基督教の感化を受け直ちに此の感化を他の國土に傳播するの特長を有したり。アングロ、サクソン人の改宗は續いてライン以北の日耳曼人及びスカンディネヴィヤ人を基督教に歸依せしむるの端を開きたり。第七世紀のヨルクの監督聖ウイルフリッド及び第八世紀の始聖ウイリブロルドは大陸のフリーズランド（荷蘭の北部）及びホルランドの野蠻なる漁民に道を傳へ、同じくアングロ、サクソン人ウインフリードはライン以北の日耳曼に教を布き（紀元後七二二）、全日耳曼の監督に任ぜられたり。法王グレゴリー二世（紀元後七一五―七三一）はウインフリートの功績を賞して其名をボニフエース（羅甸ボニファチウス神恩優渥の義）と命じたり。ボニフエースは遂にフリーズランドの異教徒の爲めに殺されたり（同七五五）。是の如くして日耳曼の內地は漸次基督教に感化せられたり。

東西羅馬帝國の運命

西羅馬帝國は紀元後四百七十六年に滅亡したれども東羅馬帝國は殆んと中世の全期を通して一千四百五十三年まで持續し前者に後るゝこと九百七十七年にして遂に滅亡したり。東帝國の久しく維持したる所以は

(一)、地理天險　コンスタンチノープル府は前にはボスポロス及びヘレスポントの二海峽ありて黑海及び地中海の咽喉を扼し、後にはダニューブの大河及びバルカンの山脈ありて天然の要害を爲せり。是れ其一なり。

(二)、西羅馬帝國に比すれば新設の帝國とも言ふ可くして稍々少壯活潑なりしこと。是れ其二なり。

(三)、加ふるに實際全羅馬帝國の中心たりしが故に、其の人爲的防備も亦た嚴重なりしこと。是れ其三なり。

(四)、東帝國には海軍ありて西帝國には海軍なかりき。海軍は埃及フィニシア、サイプラス島、アイオニヤ及び希臘に在りて是れ皆な東帝國に屬したり。元來羅馬人は陸戰を專として水戰に習はざりしがカルセージと競爭の際一時大に海軍

に從事したりしも爾後諸國を征服してより地中海は恰かも羅馬の湖水となり、羅馬人は遂に海上の生活に慣熟せずして止みたり。是れ其四なり。されば陸上のみより攻撃してコンスタンチノープルを陷れんことは如何なる敵軍と雖ども爲し能はざる所なりき。當時の戰術にては其の城壁を破るの道なく、而して西ゴス人の王アラリックが羅馬に對して爲したる如く饑餓によりて之を陷れんとするも海上の通路ありて又た奈何とも爲す可からず。コンスタンチノープルは實に帝國の首府たると同時に安全なる武庫、港灣且つ貿易の中心なりき。

(五)東羅馬皇帝の人格　羅馬に於ては二十一年の間（紀元後四五五―四七六）に九人の皇帝更迭したるに反し、コンスタンチノープルにては三十四年の間（紀元後四五七―四九一）僅かに二人の皇帝相續いて統治せり。而して彼等の人格も亦た其の運命の如く相異なりき。羅馬に於ける皇帝等の蠻人の勢力によりて自由に廢立せらるゝ無能力の人物のみなりしに反し、コンスタンチノープルに於ける三皇帝レオ一世、ゼノ、及びアナスタシウスのごときは皆な老實にして經驗に富み、安固なる政策を把持して國庫を充實し、軍隊を強盛にし以て東羅馬の領土を保全することを得たり。コンスタンチノープルの堅、亞細亞の富ありと雖ども若し東帝國にして西帝國に於けるホノリウス若しくはワレンチニアン三世のごとき皇帝のみ相繼て位に即きたらんには豈に能く是の如くなることを得んや。是れ其五なり。

(六)東羅馬皇帝の政策も亦た與かりて大に力ありき。彼等は蠻人等を征服することを能はずして却て之と同盟し其の勢力を利用して西方に向はしめたり。アルケディウス帝が西ゴス人と同盟の結果伊太利はアラリックの軍に侵入せられ、皇帝ホノリウスはラウエンナに遁れたり。又た東帝國はヴンダル人と同盟したる爲めに西帝國に其の海軍の援助を與ふることを爲さゞりき。而してゼノ帝が東ゴス人の酋長セオドリックに委任したる結果伊太利は遂に彼れの爲めに征服せられたり（紀元後四八九）。是れ其六なり。

前述の理由によりて北歐蠻人等の移動は始より南せずして西に向ひ彼等は皆な伊太利の豐富によりて誘引せられたり。是の如く北面の夷狄を西に向はしめた

る東帝國は幸にして東方より強敵に接することなかりき。一時ゴス人は小亞細亞にも蔓延したりしかども紀元後四百一年ゴス人の將ガイナスの亂鎮定せし後百四十年間概して無事平穏なることを得たり。中間兩度新波斯帝國との戰爭（紀元後四二〇―四二一、同五〇二―五〇五）ありしかども邊境の戰亂たるに過ぎず、而して小亞細亞内地の人民蜂起したることありしも一般に普及することはなかりき。亞細亞の富は國庫に充實して以て東帝國をして其の歐羅巴に於ける領土を保持することを得せしめたり。

之に加ふるに西羅馬帝國の早く滅亡したる原因二個あり。

（一）羅馬城の不堅固　羅馬は伊太利の中部に於て七重の山に據り、其位置甚だ堅固なるに似たれども其實平地に在りて城壁長く守るに困難、陷るゝに容易なりき。其の初期に當りても一度はゴール人の爲めに牙城を除くの外皆な陷落し（紀元前三九〇）而して其の晩年には屢々蠻族の爲めに侵入せられたり。其の盛なるや久しく敵軍の突入を免かれたりと雖ども其實人に在りて天險に據りたるが爲めには非ざりき。羅馬人の一致團結と其の周圍に於けるラチン諸市及び殖民諸市の擁護とは遂に千古の英雄ハンニバルをして一歩も羅馬の城内に進入することを得ざらしめたり。今や羅馬市の内外は人民墮落して又た昔時の羅馬人に非ず、而して海軍なく陸軍なき羅馬は平地の上に孤立せり。されば西羅馬の皇帝は遂に羅馬を去りてアドリアチク海のラウエンナ城を以て皇居となしたり（三四頁參照）。ラウエンナは沼澤によりて要害堅固なりしかども廣く周邊の土地を掩護するに足らず、且つ港灣遠くして敵軍の爲めに其の海口との通路を遮斷せらるゝの患ありき。

（二）天運僥倖　羅馬の起るや大敵一時に襲ひ來らざりき。其の亡ぶるや東夷北蠻鏗を接して到り、西帝國の首府は二十五年間に四だび蠻軍の爲めに大攻擊を蒙むれり。是れ頽廢せる老帝國の堪へ得る所に非ざりき。

東羅馬帝國の盛時

是の如き理由によりて西帝國は速かに瓦解し、東帝國は久しく生存して東西大に其の運命を異にしたり。コンスタンチノープルは本と希臘人の市府なりしが故に、羅馬帝國の首府となりし後も猶ほ羅馬的市府に非ずして希臘的市府の特質を有し而して遂に希臘文化の中心とはなりぬ。西帝國瓦

解の後コンスタンチノープルの皇帝はアドリアチク海以西に實權を保つこと能はざりしかとも猶ほ全羅馬帝國の皇帝たる主權を要求して止めざりき。然かも其實皇帝の管轄したる領分は元來希臘人の土地若くは歴山大王の遠征によりて希臘人の言語及び文化の一般に普及したる地方に過ぎざりき。但だ其の羅馬帝國と稱せられたる所以のものは皇帝の繼續して其位に即き羅馬の法律及び官制の保存せられ、一般には希臘語用ひられたるも猶ほ官用語としては羅甸語久しく用ひられ、一切の法律及び公文は皆な羅甸語にて記載せられたればなり。畢竟するに東帝國は希臘的羅馬帝國なりき。其の民族は專ら希臘人にして其の言語、風俗、天才、皆な希臘的なりき。歴山大王の帝國瓦解して結局羅馬人に吸收せられたれども、其の希臘的勢力消滅せずして遂に羅馬帝國を東西に二分せしめたり。東方は數世紀の間羅馬人に支配せられたれども羅馬よりも優等なる希臘の文化蔓延したるが爲めに、羅馬人は西方に於ける半開野蠻の民族に對すると同樣に東方を羅馬化すること能はざりき。されば東方に於て羅馬の法制と官用語として羅甸語の存するなかりせば東帝國は羅馬帝國と稱せらるゝの理由なかりき。史家フインレーはジャスチニアン二世の統治後（紀元後七一〇）は羅馬の二字を冠するを不適當なりとせり。世に東羅馬帝國を希臘帝國と稱するは前述の理由あるが爲めにして又た其のビザンチン帝國とも稱せらるゝはコンスタンチノープル府が本とビザンチオン（羅甸、ビザンチウム、英語、ビザンシアム）と云へる希臘的市府なりしが故なり。單に東帝國と稱するは便宜上の慣用語なり。正確に言へば羅馬帝國は一なり、東西に分れし時も唯だ其の管轄を分ちたるものにして眞に二個の獨立帝國となりたるには非ざりき。故に皇帝を東西に置くときは東方若くは西方に於ける羅馬皇帝或は羅馬帝國と稱するを以て正當の名義なりとす。

元來羅馬帝國の憲法によれば主權は神より出でずして人民より出でたり。皇帝は即ち共和時代の人民より其主權を讓與せられたるものと假定せられたり。皇帝は選擧制にして世襲制に非ざりき、而かも世襲の主義血統の關係も亦た大に認識せられたり。皇帝の撰擧は元老院の權威と軍隊の承諾とによりて決定せられたり、而かも帝國の衰微するに從ひ軍隊の勢力は東西ともに皇帝を廢立すること多かりき。

東羅馬帝國の盛時

西羅馬帝國滅亡の際東羅馬帝國は皇帝ゼノの治世にてありき紀元後四七―四九一。彼れは小亞細亞東南部のイサウリヤに生れ其名をタラコディッサと稱したり。此のイサウリヤはタウラス山の北側にありて其の人民は慓悍にして掠奪を事としたり。是より先きスレースの人レオは東帝國の權威を專にしたる蠻族軍隊の將アスパルに仕へて其の家扶となり。遂に彼きの推薦により端なく皇帝の位に擧げられたり。之をレオ一世と爲す六四頁參照。彼は大レオと稱せられたり。彼れを推薦したる蠻將アスパルは彼れを擧げて意の如く彼れを指導し、皇帝の名を避けて其實權を擅にせんことを欲したり。レオ一たび皇帝となるや容易にアスパルの意に從はざりき。アスパル彼れの衣を控へて詰りて曰く紫服を着けたる人言を食むは不可なりと。レオ答へて曰く君主たる者臣下の思に强制せられて自己の判斷と公共の利益とを拋棄するも亦た不可なりと。彼れは日耳曼民族の兵に依賴するの危險を悟り、竊かに慓悍なる小亞細亞山中の人民、特にイサウリア人を召募して軍隊に編入し以てアスパルに備へたり。レオは大にイサウリア人を用ひ其の一人なるタラコディッサを擧げて宮廷の重臣となし且つ其女アリアドネを以て之に娶はしめたり紀元後四六八。遂に其力によりてアスパルを誅戮したり紀元後四七一。タラコディッサは婚するに當りて其名をゼノと改め、レオ一世死するに及びて我子レオ二世と共に帝位に昇り紀元後四七四、一年にしてレオ二世死し、ゼノ獨り東帝國に君臨することを得たり。然れども彼れの位置困難にして屢々叛逆の爲めに窘められたり。彼れはオドワカルの使節を拒絕して西羅馬の皇帝を救ふこと能はざりき紀元後四七六。又たセオドリックを放つて伊太利に侵入せしめたるも畢竟內部の困難ありたるが爲めなりき七八頁參照。

ゼノ死して相續者なく、皇帝撰擧の權は名義上元老院及び人民に存せり、而かも實際は皇后アリアドネ及び近衛隊の意志によりて決せられき其撰によりて近衛隊中の一士官アナスタシウス皇帝の位に擧げられたり紀元後四九一―五一八。彼は年既に五十二三歲、誠實熱心の基督敎徒にして曾て僧職に就かんことを希望したり。然かも世務に疎からず理財の才に長したり。固より品行方正の人にして學識力行に富み、容易に怒を發せず、君主として寬仁を旨とし凡ての行爲に於て一に正義を主としたり。唯だ二個の非難は彼れの宗敎的信仰は正統派の信條に反して異端

視せられたること及び彼れの宮廷は餘りに嚴肅なる淸教徒の風ありて衆俗の趣味に適せざりしこと是れなり。彼れは劍奴をして猛獸と格鬪せしむる野蠻の觀劇及び卑猥なる蹈舞を禁じて却て其の人望を失したり。

即位後六週間の後新皇帝はゼノ帝の寡婦アリアドネと結婚の式を擧げたり。此后は賢婦人にして夙に先帝を內助したるの功少からざりき。先帝がイサウリア人を重用したるの結果近衞隊は彼等によりて組織せられ文官も亦た多く彼等によりて充たされ、且つ商人としてコンスタンチノープルに移住したるもの多く、彼等は新帝がイリ、ア(イリ、クム)人なるを好まず先帝の弟ロンギヌスを擧げて皇帝と爲さんことを企てたり。然れども人民及軍隊の多數は皇帝を信任して叛かざりしかはロンギヌスは捕はれて僧と爲され、イサウリヤ人は凡て其の官職を免ぜられたり。是に於てイサウリア人は其の鄕里に歸りて叛旗を翻へし五年にして遂に鎭定せられたり。之をイサウリアの亂と稱す(紀元後四九一〇—四九六)。

次に東方の邊境に於て新波斯帝國との戰爭(紀元後五〇三—五〇四)ありて最初は羅馬軍の失敗たりしが後遂に和を講じて兩帝國ともに開戰前の邊境を恢復したり。アナスタシウス治世の晩年將軍ウイタリアンの謀叛ありて大に老皇帝を窘めたり(紀元後一四五)。然れども帝が二十七年間の治世は概して成功にして帝國の大部分は平和と潤澤とを享有することを得たり。帝の位に即くや先帝ゼノの濫費によりて府庫空虛なりしが帝の死するや一千五百万磅の金貨を遺し、又た訓練ある十五万の兵を備へたり。彼れは官職の販賣及び民心に反したる一種の所得稅を廢し、又たコンスタンチノープルの西面に當りてプロポンス海より黑海に達する長さ四十哩の長壁を築き以て首府の防備を堅固ならしめたり。其他小亞細亞フリギアのヒエラポリス市に水道を建設し、シリアのセーザレア(カイザリア)に築港し、又た埃及アレクサンドリアの燈臺を恢復したるが如き種々の大工事を成就したり。老帝には子なくして一人の甥ありしかども帝は之を繼嗣に指名することを爲さゞりき。

是に於て皇帝を撰擧するの任務は帝國の高等官、近衞隊及び元老院の手に歸したり。然るに出納の權を有したる宦官アマンチウスは自から帝位に昇る能はざるを以て近衞隊の將ジャスチン(ユスチヌス)に資を給し軍隊の贊助により以て己が

意中の人を皇帝に擧げんことを欲したり。然るにジャスチンは其資を受領し、己の名によりて之を軍隊に分配したりしかば軍人等は彼れを祝してアウグスツス(皇帝)の位に即かしめたり。軍隊は彼れの武勇を知りて之を擧げ、元老院は軍隊の指名に服從し、人民及び僧侶は彼れが正統的信仰あるを以て之を歡迎し、州郡の人民は首府の意志に盲從するを常とし、斯くてダシア(ダキア)の一農夫は偶然萬乘の尊きに昇ることを得たり。之をジャスチン一世と稱す(紀元後五一八—五二七)彼は少壯大志あり。レオ一世の時二人の友と共に農業を拋擲してダルダニア(今のブルガリア)の村を去り、囊中食物を蓄へ之を肩に負ひつゝ首府を指して出發したり。三人共に力逞ましく身長大なりしかば皇帝の近衞兵籍に入るとを得たり。ジャスチンは三帝に仕へて漸やく名を擧げ富を爲し、イサウリアの亂及び波斯戰爭に功を立て、累進して將校となり、元老議官となり、遂に近衞兵の大將とはなりぬ。然かも彼は同時の人東ゴス人の王セオドリクと同じく目に一丁字なき文盲者なりき。彼は主計官(クエストル)プロクルスをして國務を掌らしめ且つ其甥にして才能あるジャスチニアンを用ひて政事を補佐せしめ、遂に彼を擧げて副帝となしたり(紀元後五二七)。帝は五十年間軍隊の中に在りて即位の時既に六十八歳在位九年にして死し、彼よりも偉大なるジャスチニアン帝位に即きて其の治世三十八年、所謂東羅馬帝國の黄金時代とはなりぬ。

ジャスチニアン帝の治世(紀元後五二八—五六五)

帝はダルダニアのサルディカ(今のソフィア)に近き村落に生れたり(紀元後四八八—二〇或は四八三)最初の名はウプラウダと言へり。先帝ジャスチン(ユスチヌス)の養子となり名をジャスチニアン(ユスチニアヌス)と改めたり。彼れはチユートン民族なりしか或はスラウ民族なりしか明白ならず、多分は後説眞に近からんと云ふ。彼は先帝の如く無學なる武人には非ざりき。ジャスチン軍隊に在りて昇進するや彼れを鄕里より招き、コンスタンチノープルに於て之を敎育したり彼は學を好み、音樂を愛し、神學、法律に通じ、財務建築に長じ、又た政略の趣味に富みたり。叔父の帝位に昇るや彼は政務に參與し、叔父の理解する能はざる若くは其の處分を難しとする所の事務は大小となく凡て之を彼れに一任したり。彼れが非凡の才能を有し、事務を好むこと渴するが如くなるは夙に時人の認知したる所なりき。其の位に即くや年齒四十有五孜々として帝國の

行政に心を委ね、夙に起きて晝間は政務を掌どり、夜間は書を讀み文を認め、內閣に在りては諸官を指揮し事務を行ふを以て無上の快樂となしたり。先帝の在位中彼れは當世の美人にして曾て劇場の舞姫なりしヒオドラ(テオドラ)を娶りて妻と爲せり。羅馬の法律は帝國の元老が是の如き賤女を妻とすることを禁じたり。先帝の皇后幷にジャスチニアンの母共に堅くジャスチニアンの結婚を不可としたり。然れどもジャスチニアンは先帝をして羅馬の法律を改正せしめ、劇場に身を汚したる婦人と雖ども悔改の後は正當の結婚を爲すの權利を得せしめたり。是れ大に世人の反感を惹起したれども此のセオドラは單に絶世の美人なりしのみならず、活潑有爲の女丈夫にして功名心に富み、ジャスチニアン帝の皇后として寸分恥かしからぬ人格を有したり。ジャスチニアン帝となるに及びて單に彼女を皇后たらしむるを以て滿足せず、彼女を副帝として之に其の主權を分ち諸州の知事をして兩帝に忠勤の宣誓を爲さしめたり。セオドラの「秘密史」と稱する記錄遺りて彼女の惡德醜聞を後世に傳へたれども彼女が皇帝に嫁したる後不貞の行爲なかりしのみならず、其の宗教心に篤く數多の慈惠制度を起し、特に墮落したる婦人を救濟する爲めに大設備を爲したるが如きは基督教國に於ける最初の實例なりき。且つ奴隸を解放し孤兒を養育し、無資の女子を結婚せしむる爲に熱心努力したるは事實なりとす。ジャスチニアン帝は征服者建築者、又た立法者として後世に殆んど無比の名聲を遺したり。先づ第一に叙說す可きは彼れの武功なりとす。彼れは四面に向つて戰爭を爲したり。東方に於ては波斯帝國と戰ひ南西に於ては亞弗利加のワンダル王國を攻め西に於ては伊太利に於ける東ゴス人の王國を滅ぼし、又た北に於てはブルガリア人を討ちたり。

ヂャスチニアン帝の戰爭　第一波斯戰爭(紀元後五二八—五三一)　羅馬人は嘗て歷山大王の帝國に屬し大王の死後獨立したる東方諸國を吸收したれども遂にメソポタミヤ以東の地を併呑すること能はざりき。紀元前三百三十年波斯帝國は歷山大王に征服せられたりしが大王の死後メソポタミヤ以東にはパルシア(パルチア)人起りてシリヤ王國より獨立しペルシア帝國を組織して四百七十六年間持續したり(紀元前二五〇—紀元後二二六)。パルシア人はメデアの東にありて元來アリアン族に非ざる蠻民なりしが其の帝國は西はユーフレチース河より東は印度(インドス)河に到り、

北は裏海及びアラクセス（今のアラス裏海の西）より印度洋に達し、古代のメデア、波斯、バクツリア等を包含したり。彼等は蠻勇慓悍にして屢々羅馬人を惱まし能く其の獨立を維持したりしが紀元後二百二十六年波斯人アルタザルクセス（アルターシャッル）叛旗を擧げて遂にパルシア王國を滅したり。是より羅馬帝國の東邊に新波斯帝國起り（紀元後二二六―六四一）邊境の衝突よりして屢々羅馬帝國と干戈を交ゆるに至れり。然れども羅馬皇帝ジュリアン（ユリアヌス）（紀元後三六一―三六三）の不幸なる遠征後（紀元後三六二）一度小戰爭を交へし以來（第三回羅馬と波斯との戰爭紀元後三七一―三七六）東方概して無事なりしが紀元後五百二年波斯王コバット東帝國の違約を口實として開戰し、メソポタミヤの諸城を略したり。羅馬帝國が西方に於て蠻人の侵入に窘められたると同時に、東方の中央亞細亞に於ても匈奴及び其他の蠻族裏海の外より波斯帝國に侵入し波斯王はオクサス河の邊境を防禦するに苦しみたり。此時の戰爭に際しても匈奴ペルシャに襲ひ來りしかばコバッドは東羅馬皇帝アナスタシウスと和を講じて局を結びたり（紀元後五〇六）然れども是れ一時の約定にしてジャスチン帝の晩年邊境の問題より兩帝國は既に交戰しつゝありき（紀元後五二七）

是れより先き皇帝アナスタシウスは波斯の國境に於て第一等の城砦二個を築き以て將來の變に備へたり。一はメソポタミヤに於けるダラス、一はアルメニアの邊境に於けるテオドシオポリス即ち是なり。是等の城砦は築造の後三十年にして波斯の兵を挫く爲めに甚だ有益なりき。ジャスチニアン帝即位の後名將ベリサウスはダラスの城守となり、ニシビス附近に要塞を築きたるが爲めに、波斯王コバッドは條約違反となして直ちに開戰を宣告したり（紀元後五二八）。最初メソポタミヤの羅馬軍は野戰に於て敗北したりしが援兵來るに及びて波斯の兵も國境を越えて退去したり。翌年までは雙方一進一退、勝敗未だ決せざりしが次年には波斯人大擧して國境を出てダラスに向つて進擊したり（紀元後五三〇）。ベリサリウスはカンネー役（紀元前二一六）に於けるハンニバルの兵法に從ひ、二万五千の兵を以て波斯の大軍四万人を破りたり。此役彼れは羅馬の歩兵を以て成り立ちたる中軍を退却せしめ、波斯人の之に乘じて進み來るに對し側面より凡ての騎兵を放つて突擊せしめ波斯の軍戰死するもの八千人なりき。明年波斯は又たシリアを侵し、ベリサリウスはダラス城より二万の兵を從へ、往て之を防ぎたりしが彼れの作戰計畫甚だ巧みにし

て敵は更らに何んの得る所なく、彼れはやがて終局の勝利を得んとしつゝありしに、兵士等彼れが持重の態度に堪へずして輕卒に接戰し殆んと全敗に陷らんとなしたり。ベリサリウスは之れを死地に置て活路を開くの外他の策なきを看取しユーフレチース河を背にし敵に向つて奮鬪せしめ辛うして其兵を全うすることを得たり。此の戰敗は彼れの名譽を傷くることなく、而して波斯の侵入を防止するの功を奏したり。四ヶ月の後波斯王コバッド死し其子ロスロエス一世（紀元後五一―五七九）位に即き現狀維持の條件にて和約を締結したり（紀元後五三一、九月）。第一波斯戰爭の結果是の如きに過ぎざりしも之に由てジャスチニアンは我が兵力如何を試驗し且つ將來大に用ゆべき將校、就中一人の名將ベリサリウスの才幹を發見することを得たり。ベリサリウス時に年二十六、帝と同しくスレース及びイリ、クムの邊境、ゲルマニヤといふ邑に生れたり。然かも彼れは日耳曼人種に屬せずしてスレース人の血統より出でたり。彼れはジャスチニヤン帝の寵遇を得皇后テオドラの親信せるアントニナを妻としコンスタンチノープルの朝廷に於ける彼等の勢力は第十八世紀の初年英國のアーン女皇に對する將軍マルボロー夫妻の位置に等しかりき。元來アントニナは婦德を汚したる卑賤の女子にして且つベリザリウスよりも年長者なりしかども彼女は久しく此の名將を駕御して己れが意の如くならしめたり。然かも彼女は勇敢にして常に良人の軍に從ひ艱苦危難を共にしたり。波斯との葛藤一時平和に歸して帝は將さに西方に其手を延ばさんとするに當り意外の事變は帝都の中に發生したり。元來コンスタンチノープルには羅馬の舊都に行はれたると同じく競馬の觀劇甚だ盛にして馭者は藍色及ひ綠色の服裝を爲し、各々倶樂部を組織して相競爭し市民も亦た遊技に耽るの極、馭者の黨派は延びて市民の黨派となり、藍派及び綠黨の爭は社會生活の各方面に普及したり。此の二黨は遂に政治上若くは宗教上の黨派となり、上は國家の大臣より下は市井の工匠に至るまで、凡ての階級に在る者必す其何れかに屬せざるはなかりき。綠黨は先帝アナスタシウスの家系を立てんと欲し隨つて宗教上に於ては異端派と見做され、藍黨はジャスチン及びジャスチニアン二帝を贊助し、宗教上に於ては正統派に屬したり。波斯戰爭の結果ジャスチニアン帝はアナスタシウス帝の貯蓄を消費したるのみならず人民に重稅を附加したり。之が爲

めに財政官ツリボニアン(ツリボニアヌス)及び近衛隊長カパトキアのジョン最も人民の怨を受けたり。紀元後五百三十二年一月競馬場に於て綠黨聲を擧げて政府の壓制を罵しり市街に於て騷擾起り、黨人等は木棍及び小刀を以て格鬪したり。ジャスチニアン帝は藍黨が其の反對者たる綠黨と爭ふに當りて從來彼等は頗ぶる自由の行動を許したりき。然るに此時藍黨の擧動餘り過激に涉りしかば警察官は兩黨の巨魁を捕へて之を死刑に處したり。是に於て綠藍兩黨偶然相合して協力し、全市民街頭に出でゝ官兵に抵抗し、婦女子すら或は屋上に登り、或は窓口より石を投じて市民を助け、官兵火を放つて家屋を燒き、焰煙全市を蔽ひ、五日間コンスタンチノープルは全く暴民の手に委ねられたり。彼等はニカ(打勝てよ)といふ警語を以て暴動に氣勢を添へたりしかば世之をニカ暴動と稱するに至れり。此の暴動に際してジャスチニアン帝は一時その爲す所を知らず、民怨の燒點たる財務官及ひ近衛隊長を罷免すべしと宣告したりしかば暴民益々勢に乘じて皇宮に迫り、皇帝止むを得す海路によりて其首府を遁れ、小亞細亞の地に去らんとする議將さに決せられんとしたり。宮廷の會議にはベリサリウスも列席したりしが

遁逃の議を翻へして斷然鎭壓の策を決せしめたるは獨り皇后テオドラの力なりき。皇后叫んで曰く世に男子の會議には婦人の聲を聞く可からずと言へり。然れども利害關係最も大なる者は發言の最良權を有す。避く可からざる死には人皆な服從せざる可からず然れとも尊貴と榮譽とを失ふて猶ほ存し、帝國より落ちて亡命者となるが如き恥辱には必すも服從せざる可からざるの理なし。余が此の紫衣を脫して女皇とし仰がれざるの日は決して來ること莫かる可し。皇帝よ陛下若し生命を存ぜんと欲せば遁逃は容易なりとす。海上を見よ陛下の船彼處に在り。然れども陛下若し遁逃して亡命者とならば日として死したりしことを願ふに至らざる可きかを思考せよ。余に於ては帝位は光榮ある墳墓なりとの古言を守らんのみ」と。皇帝は女皇の勇敢なる諫言に激勵せられて遁逃の議を翻へし、再び兵力を以て鎭壓するの策を決したり。ベリサリウス皇宮を出てゝ再ひ兵を指揮し遂に能く此の暴動を鎭定することを得たり。蓋し暴徒は皇帝既に遁走せりと聞きて却て由斷を爲したれはなり。此時皇帝若し遁逃したりしならば遂に帝位を恢復し能はざりしやも亦た未だ知る可からず。されば皇帝を救ひ且つ、

帝國の秩序を保全したるは眞に皇后テオドラの女丈夫的忠言に外ならざりき。

亞弗利加に於ける戰役

是に於てジャスチニアン帝は西方の經營に着手することを得たり。帝の理想は日耳曼民族及び其の諸王によりて略取せられたる西方の領土を恢復し、再び東西羅馬を統一するに在りき。而して西方に於ける當時の狀勢は大に帝の目的を成就するに好機會を與へたり。亞弗利加に於てはワンダル人の王ガイセリク(ガイセリッヒ死して其子フンネリッヒ位を繼ぎ紀元四七七四)皇帝ワレンチニアン三世の女ユードシアを聚りて二子を擧けたり(六四頁參照)。彼れの死後二姪グンタムンド及びツラサムンド交々位を承け、而して後彼れの少子ヒルデリヒその位を繼ぐことを得たり(紀元後五二〇—五三〇)。フンネリッヒは熱心なるアリウス派の基督信徒にして大に迦持力教徒を窘めたりしがヒルデリッヒは母の感化によりて熱心なる迦持力教徒なりき。在位七年彼れは全たくアリウス教派に屬したるワンダル人の愛心を失ひ、從弟ゲイラミル(ツラサムンドの子)の爲めに其位を奪はれて獄に投ぜられたり(紀元後五三〇)。是に於てジャスチニアン帝は正統基督教を奉し且つ羅馬皇帝の子孫にして東帝國の親友たりしヒルデリッヒの爲めにニカ暴動の前カルセージに使節を遣はしてゲイラミルに抗議しヒルデリッヒを王位に恢復し自から攝政を以て滿足せよと勸告したり。ゲイラミルは其の勸告を拒絕したり。彼れは土地の懸隔とジャスチニアン帝の內憂とにより禍の容易に落ち來るなからんことを賴みたり。

北方の蠻族等は日耳曼の朦朧として濕氣多き森林より伊太利、西班牙及び亞弗利加の炎熱强き平地に移住して勝つ可からざる二個の强敵に接したり。太陽の溫熱と元氣の墮落即ち是れなり。彼等は氣候の爲めに其精力を消失し、エルベ河岸にては無害なりし强飲無節制の行爲も亞弗利加の北部に於ては恐る可きの害惡とはなりぬ。加ふるに彼等は土人即ち羅馬の遺民に比して少數なりしこと其の內部の不一致なりしこと、其の羅馬の遺民に憎まれしこと及び野蠻人が遽かに文明に接したる時の危險なる結果を受けしこと等は是れ皆蠻族王國の永續する能はずして二三代の後に衰亡に屬せし所以なりき。特に亞弗利加のワンダル王國は最も先きにジャスチニアン帝の干涉を招きたり。アリウス派の王ゲイラミルは迦特力教徒なる羅馬の遺民をして怨望を懷かしめ、而してワンダル人と伊太利

に於ける東ゴス人とは數年前ヒルデリッヒが伊太利の王セオドリックの妹にして王ツラサムンドの寡婦たりしアマラフリダを殺したる爲めに同盟協約すること能はざりき（八七頁參照）。是等の形勢によりてジャスチニアン帝はニカ暴動鎮定の後直ちに亞弗利加遠征の爲めに五百隻の歩兵一万騎兵五千を船舶に搭載しベリサリウスを將としてコンスタンチノープルを出發せしめたり（紀元後五三三）。其兵半は亞細亞の常備兵にして半は蠻族の雇兵なりき。逆風の爲めに海上に八十日を消費したる後遂にシヽリー島に相對したるカプトワダの岬に投錨することを得たり。ワンダル人は全たく不用意にてありき。彼等の精兵はサルヂニヤ島征服の爲めに派遣せられき而して彼等の艦隊は殆んど進水し居らざりき。彼等は道路遼遠なるを恃みて殆んど東帝國の襲來を度外視し何等防禦の準備を爲さゝりき。ゲイラミル遽かに兵を聚めて防戰せんと爲したりしかどもベリサリウスは既にカルセージの門を距ること十哩以内に進入したり。ベリサリウスはアリウス教派の壓迫より土人を救濟する爲めに來れりとの宣言を爲し且つ軍規嚴正にして一切土地又は村落を掠むることを爲さゝりしが故に迦特力教徒なる土人は到る所羅馬軍を歡迎したり。

ゲイラミルは全力を擧げて大軍を聚め自から羅馬軍に倍する程の大勢を以てベリサリウスを三面より攻擊したり。然れども三面同時に合擊を爲さゝりしが故にベリサリウスの爲めに破られゲイラミルの次弟アンマタス戰死し、カルセージは門を開いて羅馬軍を迎へたり。軍隊の守備なかりし各市邑皆な其門を開き、諸州人民爭ふて羅馬軍に投降したり。ベリサリウスのカルセージに入るや恰かも國王の凱旋して卿里に歸るが如く、而して其の軍隊訓練規律は秋毫も犯す所なくワンダル人及びアリウス教徒等に對し何等の害惡をも加へざりき。

ゲイミラルは一時西の方ヌミディアに退き、サルヂニア遠征隊歸來して之に加はる其兵復た五万人に達したり。彼れは直ちにカルセージを恢復せんと欲して再舉を圖り、カルセージを距ること西方二十哩の處ツリカメロンに於てベリサリウスの軍と會戰したり。羅馬軍は三たび擊退せられしかどもベリサリウスは能く敗勢を轉して攻勢となし、ワンダル人の中軍を衝きゲイラミルを走らしめ、殆んど其兵を塵にしたり。ゲイラミルはアトラス山中に遁れ三月間食を得ずして遂にベ

リサリウスの軍門に降參したり紀元後五三四。ベリサリウスはワンダル人の王及び其他の補虜並に戰利品を船舶に滿載してコンスタンチノープルに凱旋したり。曩きにガイセリックが羅馬を陷れたる時紀元後四五五羅馬より略取し去りたる貴重品も再び羅馬人の手に恢復せられ、而してベリサリウスは四百年間皇帝のみに限られ且つ未だ曾てコンスタンチノープルに於て施行せられたることなき古代羅馬の凱旋式を許され、人民は第三のアフリカヌスとして彼れを迎賀したり。ベリサリウスはワンダル人の降王ゲイラミルに對する信約を履行し、ジャスチニアン帝に請ふてプリギヤに於ける莊園を與へ彼れ及び其の家族をして和平且つ安樂なる生活を遂げしめたり。ゲイラミルは彼れの祖先等が百年間亞弗利加人を窘めたる宗教的迫害の應報を受けたるものなりき。

伊大利に於ける戰役

伊太利に於ても亦た同樣の狀態現はれたり。偉大なるセオドリック死して其孫アタラリッヒ歲僅かに八歲、其母アマラスウインタ政を攝したり紀元後五二〇—五三四。ゴス人は婦人の攝政を快しとせず、且つ彼女が希臘及び羅馬の文學を好み、頻りに羅馬人を登用するを憤慨したり。是の如く攝政東ゴス人中の首領等との間に確執生し、アマラスウインタは遂にジャスチニアン帝に向つて万一の場合その領土内に避難することを許容せんことを請求したり紀元後五三三。人民は既に分離し攝政は民望を失し、幼弱の君主到底王國を維持する能はざるは此れ伊太利の形勢にしてジャスチニアン帝の容易に揣摩したる所なりき。

ベリサリウスが亞弗利加より凱旋したるの年、伊太利に干渉するの好機會生じたり。東ゴス人の王アタラリッヒは齒未だ十八年に滿たず、病身且つ放逸にして死去したり紀元後五三四の秋。其母アマラスウィンタはセオドリック大王の妹アマラベルガの子テオダハットを擧げて同僚となし東ゴス人をして己れと共と之れを共同の王となさしめたり。然かるに半歲ならずしてテオダハットはアマラスウインタを禁錮し、竊かに人をして之を殺さしめたり紀元後五三五五月。是に於てジャスチニアン帝は其の同盟者たりしアマラスウインタの爲めに復讎的干涉を爲すの口實を得たり。テオダハットは羅馬化したる日耳曼人にして文學を好み、自からプラトー流の哲學者と稱したれども怯懦且つ多欲にして信義なく、セオドリック在世中は一切彼れをして國事に參與せしめざりき。彼れはジャスチニアン帝の怒に觸れ、其の最後の

通牒に接するは恐怖措く所を知らず、一命を存し、適當の生活を爲すことを得ば王冠と人民とを抛棄す可しとは彼れが竊かに皇帝の使節に語げたる所なりき。彼れは其の望なきを知りて只管賣ト者及び妖術者に依頼して其難を免かれんとを欲したり。

ジャスチニアン帝は亞弗利加遠征の名將ベリサリウスをして先づ七千五百の小兵を率ゐて海路伊太利に向はしめたり紀元後五三五の秋。彼れは先づシヽリー島に進入したりしが亞弗利加に於けると同じく土民は市城の門を開きて東帝國の軍を歡迎したり。該島のパレルモにはゴス人の守備兵ありたれども其他にはゴス人甚だ少なかりき。ベリサリウスは容易にパレルモを陷いれ、各期に先だちて既に全島を征服したり。彼れ將さに伊太利半島に進入せんとしたりしが對岸の亞弗利加に軍隊の暴動起りし爲めに海を超えて暫時カルセージ附近に赴きたり。此間テオダハットは何の戰備をも爲さずして唯だ空しく皇帝に平和の請求を爲したりき。ベリサリウスは亞弗利加を鎮定して歸り來り、メッシナ海峽を渡りて伊太利の南部ブルッチウム及びルカニヤを蹂躙したり紀元後五三六四月。テオダハットの怯懦によりて南部伊太利のゴス人は到底抵抗の望なきを知り、ルカニヤ伯エベルムンドはベリサリウスに降り、其の部下の兵と共に皇帝の軍に加入したり。南部伊太利の諸市風を望んで投降し、ベリサリウスはネープルスに到るまで何等の抵抗に逢はざりき。

ネープルス市にはゴス人の兵營ありて堅く之を守り、强硬なる防戰をなし數週間相支へて援兵の來るを待てり。王テオダハットはローマに於て大軍を集めたれども怯懦にして接戰するの勇なく、七千の東ローマ人がネープルスを圍みつゝある間に、彼は空しく五万の兵を遊ばしめ、而してネープルスは遂に落城したり。ゴス人は落城の報を聞て王の無能を憤ることと甚だしく、軍隊はテオダハットを廢し、老將ウィチゲスを擧げて王となしたり。廢王テオダハットはラウェンナに逃れんとしたれども私怨あるものゝ爲めに殺されたり。新王ウィチゲスも亦無能にして、ゴス人は其の撰擇を謬りし爲めに却つて其の災禍を大ならしめたり。ウィチゲスは此時フランク人がアルプス山を越えてポー河の流域に侵入せんとするを聞き其の兵を北進せしめ、ローマには僅かに四千の兵を殘したり。彼が北進したる後ベリサ

リウスは南方より進み來りてローマを襲ひ、一戰をもなさずして之を略したり。ローマの法主シルベリウス及びローマの元老院は既に書を送りてベリサリウスの救援を求め、人民もまた彼を歡迎するの狀態なりしかば、ゴス人等はベリサリウスがローマの南門に到着せし時其の北門より逃れ出てたり。しかもベリサリウスの兵は五千に過ぎざりき（紀元後五三六）。

ウィチゲスはフランク人に黃金及び土地を與へて和睦をなし、北部伊太利に於けるゴス人の勇兵を從へ、總計十万の大軍を以てローマを恢復せんが爲めに襲ひ來れり（紀元後五三七）。ローマ城の防戰はベリサリウスの功業中其の光榮の最も大なるものなりとす。彼は僅かに五千の兵を以てローマの長避を守るのみならず、而して城内には卑怯にして不規律なるローマの市民ありて空しく糧食を徒費するのみなりき。ローマ人は殆んど一人も武器を取りて帝國の軍隊に助力する者なかりき。三月の半頃ゴス人はローマの城下に迫り其の東北兩面に相對して七陣を設け、而してローマの水道を斷ち大に攻圍の計略を運らしたり。然れども彼は注意周到ならずして、ローマの南面に對する包圍全からず、オスチア港及びネープルスとの交通を容易ならしめたるが故にベリサウスは攻圍中にありて夜間密かに糧食及び援兵を城内に入るゝことを得たり。包圍始まりて後二週間にしてウィチゲスは總攻擊の進備整ひたりとなし、ローマの北面及び東北面より一齊に攻擊を試みたれども、ベリサリウス能く兵を指揮して防戰し、ゴス人二万を殺したりしかば、ウィチゲスは爾後總攻擊を止めて單に之を包圍し其の糧食の盡るを待てり。然るに夏期となりてゴス人の軍中には疫癘起り、而してベリサリウスはコンスタンチノープルより援兵を得、却つて城内より突出しゴス人の軍を艱ましたり。

ウィチゲスは何等の奇計を運らすことなく、猶一年以上ローマを圍みたりしが、其の兵は疫癘の爲めに益減少し、ベリサリウスの軍は漸次其の數加はりて勇氣を增したり。彼はローマを支持すると同時に一將を城外に出して北進せしめ、ラウェンナを距ること僅かに三十三哩の所にある重要の一邑リミニーを略せしめたり。（紀元後五三八、二月）ウィチゲスは己れの首府の危く敵我が後にありとの報を聞き、其の陣營を燒きて遂にローマの圍を解きたり。ローマはベリサリウスの智勇により三百七十四日の攻圍より救はれて再び自由の空氣を呼吸することを得たり。是に於

て中部伊太利は全然ベリサリウスの占有に歸し、戰場はローマより以北の地となりて、猶二年間繼續したり（紀元後五三〇―五四〇）。ベリサリウスは更にコンスタンチノープルより援兵を得て北進し、ウィチゲスはラウェンナに退きたり。其の後彼はペルシアの王コスロエスに使者を送り、ローマ帝國は目下全力を伊太利に注ぎ居るが故にシリア及びメソポタミヤの方面は侵入すること容易なるべしとの消息を通じたり。これウィチゲスが此戰爭中になしたる唯一の名案なりき。彼若し二年以前に此謀を用ゐたらんには或は之に依りて東ゴス人の王國を救ふことを得たりしならん。然れども時機既に後れたり。ペルシャの王が兵を動かしたる頃にはウィチゲスは既に其の位を失ふて捕虜の身とはなり居たりき。

紀元五百四十年の春、ベリサリウスは全く中部伊太利を占領しラウェンナに向つて進擊をなし得るに至れり。彼は北部伊太利のゴス人が來援すべき方向に防禦の兵を配置したる後、彼のセオドリックの舊都ラウェンナ城を包圍したり。城兵薄弱にして且つ怯懦なるウィチゲスは防戰の勇なく、遂にヂャスチニアン帝の和約條件に服從せんことを決意したり、ヂャスチニアン帝は彼をしてポー河以南の全伊太利を讓與し且つ貯藏する財貨の半を分獻せしめ、皇帝の臣下としてポー河以北の地のみに王たらしめんとの條件を提出したり。此提議にして行はれたらんには双方の幸福なりしなるべしと雖も其實行について二箇の困難生じたり。一は東ゴス人中の貴族等がウィチゲスの怯懦を憤慨したること、又一はベリサリウスが既に全勝の位置にあるを以て皇帝の提議を餘りに寛大なりとしたること、是なり。此二箇の原因よりして非常の結果を生じたり。東ゴス人中の貴族等はベリサリウスに請ふて其の君主たらんことを欲したり。ベリサリウスは公然其の請求を排斥せざりしが故に、愚直なるゴス人等は城門を開いて彼を迎へたり。然るにベリサリウスは皇帝に對して忠實の將軍なりしが故に、自ら王と稱することなく却つて皇帝の名によりてラウェンナ市を占有し、ゴス人の兵をして各其の都里に離散せしめ、城中に保藏せられたる凡ての黄金をコンスタンチノープルに輸送したり（紀元後五四〇）。

今や伊太利に於ける東ゴス人の王國は殆んど滅亡に歸したるが如き觀ありき。パウィア、メロナ、及び其の他二三の市府を除くの外其の王國に屬するものなかりき。然るにヂャスチニアン帝は以上の諸市府未だ陷らざるに先ちて將軍ベリサリウス

を召還したり。これ一は東方より進み來れるペルシャの軍を擊退せしめんが爲めなりしと雖も、また一は皇帝が將軍の才能を忌みて嫌疑を生じたるが爲めなりき。ベリサリウスは皇帝の提議に越えてウィチゲスと和約を締結せず、却つて之を虜となしたり。而してゴス人等が、ベリサリウスを擧げて其皇帝たらしめんと欲したることはヂャスチニアン帝の心に恐怖の念を生ぜしめたり。是に於てベリサリウスは虜王ウィチゲス及びセオドリック以來東ゴス人の王室が貯藏したる黃金寶玉を携へてコンスタンチノープルに凱旋したり。亞弗利加遠征より歸りし時の如く盛大なる凱旋式を許されざりしも、七千の精兵を率ゐて首府に入り、人民より熱心なる歡迎を受けたり。彼若し此時機を以て死せしならんには最も幸福の人たるを得たりしならんも、爾後彼は數多の小戰に使役せられ且つ皇帝及び皇后の信任を失して種々なる逆境に遭遇するに至れり（紀元後五四〇）。

紀元後五百四十年はヂャスチニアン帝に於てもまた其の幸運なる時期の終なりき。是より以後彼もまた種々なる困難を經驗し其の計畫の往々にして齟齬蹉跌することを免れざりき。然れども彼が超群絕倫の忍耐力は兎も角も彼をして無難に其の生涯を送らしめたり。其の第一の困難は財政なりき。彼は既にアナスタシウス帝の貯藏したる財貨を消費し盡したり。彼が帝國の版圖を擴張したることは益〻財政上の負擔を重からしめたり。而して亞弗利加及び伊太利の經營は以て其の經費を補ふに足らざりき。且つ帝は年々歲々宮庭及び帝國の各地に工事を起し、之が爲めに莫大の費用を要したり。彼は戰爭の爲めにもまた平和の事業の爲めにも其の財寶を消費して惜まざりき。然れども之が爲めに帝國人民の上に重稅を課することは避くべからざるの結果にして收斂苛酷なりしが故に亞弗利加及び伊太利の人民は征服後十年ならずして其の將軍ベリサリウスを歡迎し之に應援したることを悔恨するに至れり。此の如く帝國の財源を涸しつゝあるに際して終局と見えたる伊太利戰爭は猶十三年間持續し、而して同時に東方ペルシャとの戰爭起り、これまた前後十六年の久しきに亘り、皇帝も帝國も共に前日の幸福を看るべからざるに至れり。

第二ペルシヤ戰爭（紀元後五四〇—五四五）ペルシャの王コスロエス一世は伊太利の使節に歡迎せられ且ヂャスチニアン帝が亞弗利加及び伊太利を征服したる威烈を以て

東方に襲ひ來らんことを恐れ兩帝國の邊境に關する種々の葛藤を口實となして開戰の理由となし、ペリサリウス及びローマの精兵五萬伊太利及ひ亞弗利加にあるを好機となし、メソポタミヤの地に侵入し、ユーフレチス河を遡り急に北部シリアに襲來したり。紀元後五四〇年の春ローマ帝國の防備薄弱にして、帝國第三の都會たるシリアの首府アンチオク陷り、ペルシヤ人は寺院を掠め民家を燒き數多の捕虜を東方に移したり。明年ヂャスチニアン帝は援兵を出し且つ將軍ベリサリウスをしてメソポタミアの軍を指揮せしめたり。然れどもベリサリウスはペルシヤ王と接戰するの機會を得ず、而して全局に於て却つて勝利を彼れの爲めに制せられたり。ペルシヤ王は漸次北進して地を畧し、其邊境を黑海に達せしめたり。

明年紀元後五四二コスロエスはペルシヤ帝國の大軍を催してエジピスまで進み來たり而してベリサリウスはユーフレチース河畔のユーロープスに兵を集中しペルシヤ王の來たり攻むるを待ちたりしかども其の攻擊なくして止みたり。羅馬の史家はこれを將軍ベリサリウスの威名に歸すれども實は同年ペルシヤに大疫病發し軍隊解散するの必要起りしが爲めなるべし。此の疫病はエジプトより發して東西に蔓延しコンスタンチノープルに於て一日の中に死亡五千人或は一万人に及びしことありといふ。これが爲に羅馬帝國の人口三分の一を減じ納稅者多く死亡し商業衰退し一時皇帝も危篤に瀕せしことありき。これ戰爭活潑ならざる一大原因なりしこと疑ふべからず。加ふるに前年ベリサリウスの妻アントニナ不貞の行爲發覺しベリサリウスの爲めに禁錮せられたりしに彼の女は皇后テオドラの寵愛厚かりしが故にベリサリウスは痛く皇后の逆鱗に觸れ爲めに出軍中にコンスタンチノープルより補助を受くること舊時の如くなること能はず、止むことを得ず其の妻の禁錮を解きて皇后の意を和らぐることを得たり。是亦ベリサリウスの戰場に於ける資力を薄弱ならしめたる他の原因となれり。次年紀元後五四三疫病稍減退しコスロエス再び羅馬領のアルメニヤに進擊したりしかども疫病再發して直ちに退軍したり。此に於て羅馬の軍ペルシヤ領のアルメニヤに侵入したりしが將軍ベリサリウスコンスタンチノープルに召還せられたりしために却つて敵の寡兵と戰ふて大に敗られたり。前年ジャスチニアン帝の病むや崩御の誤報ユーフレチースの軍中に達しベリサリウス或は果斷の宣告をなさんと

するの徽候ありしこと皇帝の耳に達したり。皇帝は事故に托して將軍を召還し其の七千の護衛兵を率ゆるを禁じ、其の財產を多く沒收し不名譽の位置に立たしめたり。皇后テオドラは將軍が其の妻と和合し且つ伊太利に行くを條件となし皇帝をして彼を宥免し、伊太利戰爭の軍を督せしめたり（紀元後五四三）。此後ベルシヤ王コスロエスは疫癘收まり且つベリサリウスのあらざるを機會としメソポタミヤに侵入し其の首府エデッサを圍みしが勇敢なる羅馬軍能く防戰しコスロエス數月を經て猶これを陷るゝこと能はずニジビスに退軍し休戰の談判を開始するに至れり。此に於て休戰の約成り五年間兩帝國の間平和なることを得たり（紀元後五四五―五五〇）。

伊太利の征服（紀元後五五三）

此の時に當り全伊太利の戰亂再發したり。曩さにラウェンナ陷りウィチゲス捕虜となるや東ゴス人の王國に屬したる諸城殆ど皆投降し僅かにウエロナ及びパウィアのみを存したり。パウィアに於ける東ゴス人の殘兵僅かに二千人に足らざりしが大膽にも西班牙に於ける西ゴス人の王テウヂスの甥ヒルヂバットを擧げて王となしたり（紀元後五四〇）。ベリサリウスの伊太利を去るや五人の將軍これに代りて指揮をなし命令一に出てざりしかばニルヂバッドは全然ウィチゲスの殘兵を糾合しウェネチヤ地方を恢復することを得たり。此の時に當りコンスタンチノープルの收斂甚だ酷なりしが故に帝國は漸く伊太利の民心を失したりき。ヒルヂバットはポー河以北の地を全く恢復すること能はずして私怨ある者の爲めに殺されたり（紀元後五四一）。數月の後彼の甥にして彼に勝されるバドゥイラ楯の上に擧げられて王となりしが、彼は大セオドリックを除けば東西兩ゴス民族中の最も偉大なる人傑なりき。コンスタンチノープルの史家等は彼の名をトチラと稱したり。彼は即位の初めより連戰連勝の勢ありしかば羅馬の將軍等遂に結合してこれに當たりしかども一万二千の兵を以て彼が五千の兵に擊破せられアベナイン山北の地を失ひまた山南のタスカニー州をも悉く略取せられ五六の大城廓を除くの外羅馬以北の伊太利悉く彼の手に落ちたり。羅馬の攻圍は前役の困難によりて着手せられざりしがバドゥイラはカンパニヤ及びアプリヤを蹂躙し殆ど皆南部伊太利を恢復することを得たり（紀元後五四二）。ネープルス落城の際ゴス人の一勇卒一女子を姦したりしがバドゥイラはこれに死刑を命じたり。ゴス人等は其

の勇卒なるを以てこれを宥さんと請願したりしかばバドゥイラは一人の生命を救ふと全ゴス民族を救ふと孰れが重きやと答へたり。バドゥイラは一人の不義の爲めに全ゴス民族の上に上帝の怒を引き下すべからずと固く主張して其の死刑を斷行したり。

皇帝ジャスチニアンはネーブルスの落城を聞き將軍ベリサリウスをして再び伊太利に赴かしめたり（紀元後五四三。）ベリサリウスは彼の衛兵を失たれば俄にスレースに於て四千の新兵を募集し伊太利に赴きたり。ベリサリウスは既に皇帝の信任を失し且つ其率ゆる所は新募の兵と訓練規律亂れたる伊太利の軍なりしが故に成効少く却りてバドゥイラの爲めに利益を制せられたり（紀元後五五四。）バドゥイラは頻に伊太利を蹂躙しジャスチニアン帝がペルシャ戰爭に勢力を集中し十分バリサリウスを助くるとをなさゞりしが故に遂に羅馬を圍みたり。ウヰチゲスと異にして彼は全く羅馬を圍みて總ての通路を塞ぎ且つ柵を設けてタイバー河の航行を遮斷したり。城中糧食盡きて饑餓に逼まりしかばベリサリウスはタイバー河の柵を破りて羅馬を救はんと欲したれども救ふこと能はず且つ不幸にして病發し羅馬は三ヶ月攻圍を受けたる後遂に陷落したり（紀元後五四。五—五四六。）バドゥイラは其の兵を放ちて市中を掠奪せしめたれども殺人又は强姦の行爲を嚴禁したり。二萬の兵中夜羅馬に入り掠奪をなしたりしかども市民にして殺されたる者僅かに二十六人なりき。バドゥイラは寺院を以て市民の避難所となしこれに集合したる人民は何等の害惡を受くることなかりき。然れどもバドゥイラは敵の本據にして信義なき人民の巢窟なる羅馬を以て自家の國都となすことを欲せずまたこれに鎭營を設くることを欲せず全然これを無人の地となさんことを決心し人民を放逐し門を燒き其の城壁を破壞したり。かくて四十日間羅馬は無人の地となりしがベリサリウス其の少兵を率ゐ來りて急に城壁及び城門を修繕し三度羅馬をして敵の攻圍を受けしむるの準備を爲したり。バドゥイラ來りてこれを攻めたりしかども遂にこれを拔くこと能はざりき。爾後二年間兩雄伊太利の處々に於て兵を交へたりしが概して勝利はバドゥイラに歸したり。ベリサリウスは其の兵少く且つ皇帝の應援薄弱にして大決戰をなすの機會を得ず遂にコンスタンチノープルに召還せられたり（紀元後五四八。）

こゝに於てバドゥイラは益〻其の勢力を加へ羅馬を陷れて其衞兵を或は殺し、或は擒にし（紀元後五四九。）今回は羅馬を以て其首府となさんと欲し羅馬の元老院を改造し其の邸宅を修繕しジャスチニアン帝に使者を遣りて彼のセオドリック及ひ皇帝アナスタシウスの時に於けるが如くせんことを要求したり。然れども皇帝ジャスチニアンは戰意固くしてまたもや伊太利を征伐せんと欲し最初は其の甥ゲルマヌスを將としてこれを遣り其の死するに及びて宦官ナルセスを遣はして其の將となしたり（紀元後五五二。）彼は皇帝の信任厚くして軍資十分なりしかば帝國の常備軍に加へダニーブ方面より一萬の日耳蔓人を傭ひ入れ總計二萬即ちベリサリウスよりも三倍の軍を率ゐて發出することを得たり。彼はヴェネチヤの方面より軍を進め且つこれを掩護せんがために艦隊を遣はして伊太利の東岸を侵かしゴス人の戰艦を破らしめたり。これが爲めバドゥイラは羅馬の軍海上より攻め來るならんと豫想してヴェネチヤ方面の防備薄かりしかばナルセスは一戰せずしてラヴェンナに達し且つ直ちに羅馬に向つて進發したり。バドゥイラは中部伊太利の兵を集めてこれを途中に要したれども其の兵はナルセスよりも少かりき。兩軍はウムブリア州のタギネーに於て勇戰したり。ナルセスはベリサリウスに亞てジャスチニアン帝の名將なりき。彼はゴス人の強きは其の騎兵にあるを知り其の傭ひ來れる日耳曼の騎兵をして悉く馬より下らしめ堅固なる歩兵の中軍を組織し弓兵八千を以て其の側面を守り騎兵一千五百を以て其の左翼となしたり。バドゥイラ自ら其の騎兵を率ゐて羅馬の中軍を衝き日中より薄暮に至るまで勇戰したりしかどもこれを破ること能はず却つて羅馬軍の兩側なる弓兵の爲めに亂射せられて敗走したり。こゝに於てナルセス其の騎兵を放ちてこれを追擊しゴス人の全軍を敗り勇敢なるバドゥイラも亂軍の中に戰死したり（紀元後五五二。）バドゥイラは中世に於ける最初の騎士として稱讃せられたり。彼は高尚なる德性を有し其の志望純潔にして義俠の氣高く且つ宗教心に富みたりき。彼死してゴス人の王國は遂に瓦解したり。ゴス人は其の貴族ティアを擧げて王となしたりしかども羅馬は三度ジャスチニアン帝の兵に陷られゴス人は僅かに少兵を以てカンパニア州の一隅に割據したりしかどもナルセス襲ひ來りてこれをサルノ河岸に破りゴス人の最後の王ティア勇戰奮鬪して死したり。こゝに於て東ゴス人の殘兵は妻子と共に伊太

利外に退去せんことを請ひ其の請願許されて紀元後五百五十三年の秋アルプス山を越へて北方に移住したり。彼等は或はフランク人或はバヴリヤ人或は其の同族なる西班牙の西ゴス人に投したるかを詳かにせず、更に歴史上に於て聞く處なきに至れり。

かくの如くして大セオドリックの天才によりて建設せられたる伊太利に於ける東ゴス人の王國は滅亡したり。亞弗利加に於けるヴンダル人の王國は既に十七年前に亡滅したり。此の二王國の永續する能はざりしは侵入民族の少數にして其の占領したる土地廣く土着の人民甚だ多數なりし上に彼等はアリウス派の基督教を信じ土着人民は正統主義の基督教を奉じ遂に相一致合同すること能はざりしが故なり。ヴンダル人の殘酷にして土人を虐待したるに引き換へ東ゴス人は聰明にして寛大なりしかども其の終極は同一なりき。但ヴンダル人は亞弗利加の熱氣と其の奢侈を極めたるとの結果により一年にして羅馬軍の爲めに滅亡したりしが東ゴス人は日耳曼種族中の最高尚なる人民にして羅馬軍と相戰ふこと十七年兵力盡きて遂に伊太利を退去したり。東ゴス人の王國亡びて數年の後伊太利は惰弱なるコンスタンチノープル野蠻なるロムバルド人及び信義なきフランク人等の競爭地となり終りぬ。

西班牙に於ける侵略。

紀元後五三一年西班牙に於ける西ゴス人はフランク人の爲めに驅逐せられてピレニース山以北の領土を失ひ從前ゴールの地に根據したりしもこれより西班牙を以て其の唯一の鄕土となすに至れり。不幸にして舊王族の系統斷絶したりしかば彼等は貴族の一人テウヂスを擧げて王となしたり。チュートン民族に於ては舊王族の消滅ほど不幸なるとはなかりき。貴族の內より王を撰擧するに當りては撰擧の競爭激烈なるのみならず撰擧の後に至りて他の貴族は容易に新王に服從することをなさゝりき。これ西班牙に於ける西ゴス人の一大不幸なりき。加ふるに西ゴス人と從來の土人とは同じく基督教を奉じたれど西ゴス人はアリウス派の異端なる宗旨を信じ土人は所謂正流主義の基督教に屬して最も極端なる熱心を有したり。此の如くして、西ゴス人は久しく土人と結合同化することを得ざりき。且北部西班牙にはバスク人の獨立せるあり、また西部にはスエブ人の王國存するありて全半島は西ゴス人の征服する能はざる所なり

き。

テウヂスは十七年間（紀元後五三―五四八）位にありて三度フランク人の侵入を擊退したりしも晩年ジャスチニアン帝の亞弗利加及び伊太利に於ける成効の迅速なるに驚き伊太利に於ける東ゴス人を援けんと欲して亞弗利加を攻擊したり（紀元後五四四）。然るに彼れの軍隊は亞弗利加の西北岸に於けるセブタ（セウタ）城の下にて殆ど全滅せられ老年のテウヂスは全く武名を損して歸國し四年の後遂に刺殺せられたり（紀元後五四八）。こゝに於て西ゴス人は將軍テウヂギセルを擧げて王となしたりしが彼は暴虐放蕩にして貴族等の怨望する處となり即位後一年半を出てずして殺されたり。西ゴス人の多數はアギラを擧げて王となしたりしかども南部西班牙の總督等彼を戴くを欲せざりしかばアギラは彼等を征伐せんとしてコルドワの戰に大敗したり。然れども彼は猶北部を保ちて勢力甚だ鞏固なりしが故に南方の叛將アタナギルド遂に意を決して東羅馬皇帝ジャスチニアンの援助を請求したり。皇帝は喜んで其の請求を容れ亞弗利加の總督リベリウスをして海峽を渡りカディズに上陸せしめたり。西班牙人はゴス人の壓制に苦みたりしが故に數多の市府は門を開ひて羅馬の軍隊を歡迎したり。アギラは其兵を擧げて南方に來たり羅馬の軍隊を防がんとなしたりしもセビルに於て大敗遁逃したり。西ゴス人は同族の分離によりて羅馬人が容易に諸城を畧取するを見て大に悟る所ありアギラを殺し叛將アタナギルドを擧げて王となし其内亂を終局せしめたり（紀元後五五）西ゴス人は一度其の舊王族を失ふてより王統定まらず内亂踵ぎ爲めに東羅馬帝國の侵畧する處となれり。これ其のフランク民族と其の運命を異にしたる一大源因なりき。

アタナギルドは羅馬人の援助によりて西班牙の王となりしが羅馬人は其の既に畧取したる諸城より撤兵することをなさず且つジブラルタル海峽の東西兩側に於ける西班牙沿岸の諸港灣を占領したり。アタナギルドは在位十三年（紀元後五五五―五六八）にして死し遂に南部西班牙を羅馬人より恢復すること能はざりき。これより以後數十年の間南部西班牙の一隅は久しくコンスタンチノープルの管轄に屬したり（紀元後五五五―六一五）。

第三波斯戰爭（紀元後五四九―五五五）。

第二波斯戰爭は五年間の休戰となりしが（紀元後五四五）

時期滿限して兩帝國は三度干戈を交ふるに至れり。然れども其の戰局は國會方面に限ぎられたり。六年間の戰爭は大に兩帝國の財源を涸らし遂に羅馬人の勝利に歸して波斯人は內地に驅逐せられ（紀元後五五五）波斯王コスロエス一世はコルキスを羅馬に讓與し而して羅馬人はコーカサス地方防衛の爲めに年金を波斯に拂ふの約束をなし以て其の極を結びたり。コーカサス山の要路は蠻族が波斯及び羅馬の兩帝國に侵入するの門口なりしが故に其の防禦は常に兩帝國の交涉を要したりき。

此の戰爭はジャスチニアン帝の從事したる最後の大戰爭なりしかども帝の晩年はハン人及びスラヴ人屢バルカン半島に侵入して帝國の平和を亂したり。殊に紀元後五百五十八年ハン人はバルカン山を越えてスレースの全土を蹂躙し其の一部隊たる騎兵四千人コンスタンチノープルの城門に逼まりしかば皇帝は老將軍ベリサリウスを要して兵を指揮し首府を防衛せしめたり。當時帝國の軍隊諸方に散在して首府に在らざりしが故にベリサリウスは少數の兵を集め奇計を廻らし以て野蠻人を擊退することを得たり。ベリサリウスは斯の如く終始皇帝に忠實なりしかども皇帝は遂に彼を信用すること能はざりき。四年の後皇帝に向ひて一の隱謀企てられしこと發覺するに當り皇帝は將軍のこれを豫知したることを疑ひ八個月間將軍を禁錮したり。將軍は無罪なること證明せられて自由の身となりしかども二年の後遂に死去し（紀元後五六五）不信實なる皇帝もまた同年の末に死去したり（紀元後五六五）皇后テオドラはこれより先き既に死し（紀元後五四八）爾來皇帝の精力もまた大に衰亡したりき。將軍ベリサリウスは晩年皇帝の嫉妬により盲人となされて食を乞ふに至れりとの傳說は素より信ずるに足らざれども皇帝の不信實にして彼れの死後彼れに相當すべき埋葬式又は石碑彫像等の建立をなさずして却つて彼れの財貨を沒收したりといふ。

羅馬法典の編纂　ジャスチニアン帝の治世が東羅馬帝國の黃金時代として後世に喧傳せらるゝ以所のものは其の武功にあらず其の文勳にありて存す。帝の武功は暫時にして消滅したり。獨り其の文勳に至りては天下後世今猶其の恩澤に沐浴せり。夫れ希臘人の天職は其の文藝によりて世界の人類を敎導するにありて存す。歐米列國現今の文明は知識上に於て一に希臘人の恩澤によらざるも

のなし。希臘人は萬世に亘りて天下人類の師範となれり。羅馬人は即ち然らず。其の文學技藝一として希臘人に及ぶものなし。羅馬人の長所は天下を統一し人類を支配するにありき。而して其の能く大帝國を建設して久しくこれを維持したる以所のものは其の兵制の完備と法律の發達とによれり。殊に羅馬法は今に文明諸國法制の淵源なりとす。歐洲大陸の民法悉く然り。西班牙より殖民したる亞米利加の諸共和國又然り。英米は獨りアングロサクソン人の習慣律を有して羅馬法に基かずと稱するもスコットランド及び合衆國の一州ルイシアナは羅馬法によれり。英國といへども其の中世に於ける教會律は羅馬法に基き且つ其の習慣律にて不十分なる場合には羅馬法によりてこれを補充したり。中世財產相續に關することは總て教會律の管轄に屬したり。故に英米二國の法律も相續に關する部分は素より羅馬法に基けりといふことを得べし。羅馬法の影響は基督教諸國に於てのみかくの如く著明なるにあらず東羅馬帝國の遺制を繼承したる回教諸國に於ても亦然り現今回教諸國の法律は其の經典コーランよりも却つて多く羅馬法によれりといふ。（政治學叢一一三—一二二參照）

ヂャスチニアン帝の位に即くや（紀元後五二七）羅馬法律の編制は其の最も必要なる急務なりき。一千年間に亘れる羅馬法律の積集は數千冊の多きに及び何人と雖もこれを購求し若しくはこれを熟讀すると能はざりき。印刷術の未だ開けざる時代に於て法典の編纂せられざりし結果は羅馬帝國の政府及び人民に於て非常なる不便利を感ぜしめたり。況んや各州の人民其の土言を異にして羅馬法制の如何なるかを知ると能はざりしをや。從來羅馬の法律は二個の要素より成立したり。一は皇帝の發布したる憲法及び詔令にして一は過去に於ける法官の判決なりき。帝國となりし以來五世紀間の詔令は前後錯雜矛盾して其の歸する處を知らず、且つ基督教帝國の國教となりし以來異教の慣例と基督教の新しき觀念と混合して更に其の矛盾を甚しからしめたり。過去に於ける法官の判決も前後堆積して孰れによるべきかを知るに由なかりき。ヂャスチニアン帝は三個の大法典を制定して以て前述の混亂を一掃したり。彼れは當代の碩學にして小亞細亞の希臘人なるツリボニアヌスを用ゐてこの大業に着手したり。ツリボニアヌスは九人の法律家を督勵して十四ヶ月間（紀元後五二八—五二九）に帝國の憲法及び皇帝の詔令を編成し

たり。此れをコード(法典)と稱し專ら公法に關するものとす。次ぎに彼れ及び十六人の法律家は三年間(紀元後五三—五三三)に總て過去の判決例を編纂し二千の書冊を減縮して五十卷となし行數三百萬を拔粹して十五萬となすことを得たり。これ即ちダイゼスト(羅甸語より出づ類集といふ義)若しくはパンデクト(希臘語より出づ同意義)と稱し專ら私法に關するものとす。此の外にインスチチューツと稱せらるゝもの前者よりも一ケ月早く成就せられたり。そは羅馬法律の原理を簡明に記載し羅馬法を知るの入門となし教科書として諸方の學校に採用せしめたり。ヂャスチニアン帝はコンスタンチノープルの元老院及び帝國の人民に向つて布告を發し此等の成典を以て帝國無二の大法律となすことを宣言せり(紀元後五三三)。此の三種の法典はヂャスチニアン帝の征服によりて伊太利に傳はりしも後ち蠻族ロンバルド人侵入して一時其の跡を絕たんとなしたりしが紀元後十二世紀に於て二たび勃興し暫時歐洲列國に波及したり。

緝糸の貿易及び蠶の輸入。

絹糸は久しく貿易品として羅馬帝國内に知られたれどもこれを生產する蠶はヂャスチニアン帝の時に至るまで支那帝國に於てのみ養成せられたり。尤も松柏の類によりて養はるゝ一種の蠶は歐羅巴にも生存したれどもこれを養成するの困難にして其の成功の不確實なるが爲めに希臘の多島海にあるケオス島に於ての外一般に養成せられざりき。而して此のケオス島の產物は久しく東羅馬帝國及び羅馬にも婦人用として大に稱賛せられたり。支那の絹糸は桑葉によりて養成せらるゝ蠶より生產するものにして其の羅馬帝國に輸入せられたる事實は詩人ウアーヂル(紀元前七〇—一七)によりて明白に記載せられたり。彼れはこれを以て支那の樹木より生產する處のものなりと誤解したり。後世其の需要益々增加し或は陸路により或は海路により非常の困難を以て羅馬帝國に輸入せられたり。古代に於てはアシリア人及びメデヤ人此の貿易を獨占し而して絹衣はメデヤの衣服と稱せられたり。後には波斯人此の貿易を專らにし彼等より亞細亞の希臘人及びシリア人に移り以て西方諸國に輸入せられたり。此の如き多數の商人の手を經過するが爲めに其の値甚だ貴くヂャスチニアン帝の時に至りコンスタンチノープル商人は他の亞細亞人よりこれを購求し若しくは支那と直接交易をなし以て其の値を廉ならしめんことを欲したり。然れ

ども彼等が地理上の知識に暗かりしとは其一大因難なりき。彼等は未だ支那と印度との區別を知らざりき。從來商隊が中央亞細亞を經過して絹絲を支那よりシリアの海岸まで運搬するに二百四十三日を要したり。波斯の商人は通例オクサスの河岸に於てソグディアナ人より購求し而してこれを羅馬人に傳へたり。然れども途中沙漠を經過するの困難あり、また野蠻民族の爲めに掠奪せらるゝの危險あり且つ波斯帝國との長き戰爭によりて其貿易は全く杜絶せられたり。ソグディアナの首府サマルカンドより支那の山西省に達するに六十日乃至百日を消費したり。商隊は韃靼人の掠奪及び波斯帝國の妨害を避くる爲めに南方の道路を通過しチベットの山を越へてガンヂス河若しくはインドス河を下り遂に海路により西洋に到達したるもありき。然れども其の困難は沙漠の危險よりも多くして餓饑疲勞及び時間を要すること甚しく北京よりインドスの河口に至るに九ケ月を消費したりといふ。されば羅馬帝國に於て絹絲の値甚だ高く皇帝ヂャスチニアンは其の供給を增加し且つ波斯人の獨占を免ぬかれて其の値を廉ならしめんと種々苦心せし折柄基督教傳道師の大膽なる計畫によりて其の目的を達すること

を得たり。波斯に於ける基督教の一派ネストリアン教會の僧侶二人は印度に傳道し又支那國にも進入するに至れり（紀元五五一年後）。彼等は直接養蠶の方法を實驗し其の知識を齎してコンスタンチノープルに來りヂャスチニアン帝に謁見し其の顚末を奏聞したり帝は彼等を奬勵してこれをコンスタンチノープルに携へ歸らんことを命じたり。彼等は蠶を携へ來たるも到底死亡するの外なけれども蠶種を携帶してこれを他邦に產殖せしむるを得べきを知り再び支那に赴き蠶種を竹筒に入れて難なくコンスタンチノープルに歸り來れり。元來支那人は蠶の生產を保護する爲めに蠶を他邦に輸出することを禁じたりしかども二人の僧侶は前述の手段により其の猜疑を脫することを得たり。爾來蠶はコンスタンチノープルに養成せられて支那に於けると同樣の成功をなし而して殆ど六百年間は希臘人の手に獨占せられたり。後世シヽリーより伊太利に入り西班牙及び佛蘭西にも蔓延したり。

ヂャスチニアン治世の成績

ヂャスチニアン帝の功業は前述の外尙ほ建築の上に顯れたり。彼れはコンスタンチノープルの首府に於てニカ騷亂の爲めに

燒失したる公共の建物を再築したるのみならず羅馬帝國の全部を通じて伊太利よりアルメニヤの邊境に至るまで壯大なる城塞、寺院、病院、水道等を設備したり。今にシリヤ及び小亞細亞の荒廢地に於て發見せらるゝ東羅馬帝國の舊址は概してヂャスチニアン帝の時代に屬するもの多し。バルカン半島のみに於ても彼は野蠻人の侵入を防ぐ爲めにダニューブ及びヘイマス河畔に沿ふて三百以上の要塞を築造したり。殊にコンスタンチノープルに於てコンスタンチン大帝が創建したるセント・ソフィアの寺院燒失したるを再建する爲めに數百萬金を消費し其の莊嚴なる建築は今に存してコンスタンチノープルの偉觀なりとす。唯今は東羅馬帝國滅亡し土耳古帝國の首府となりたるが爲めにセント・ソフィアの上に輝きたる基督の十字架は取り去られて回々教の新月形を見るの憾あるのみ。

斯の如くヂャスチニアン帝の功業は文勳武功共に燦然として後世に輝くに拘らず其の結果帝國人民の上に重稅を課して其の財源を涸らし亞非利加、伊太利及び西班牙に於ける征服の利益は以て東方諸州の疲弊を償ふに足らざりき。民力衰微し兵力も從つて薄弱となりヂャスチニアン帝の晩年には彼が即位の當時よりも

概して羅馬帝國の勢力萎靡しつゝあるを見たり。

東羅馬帝國の衰微。

ジャスチニアン帝の死後四十年間は東羅馬帝國が急速に衰微するの時期なりき。ジャスチニアン帝の甥ジャスチン二世(ユスチヌス紀元後五六五—五七八)位を繼ぎ、皇后テオドラの姪ソフィアは其の妻なりしが稍々彼女に似たる活潑有爲の婦人なりき。ジャスチン二世は皇帝の尊榮と帝國の威嚴とに就て高大なる觀念を有し、帝國の安寧を保全する爲めにジャスチニアン帝が邊境接近の蠻族酋長等に約したる資金の給與を停止したり。之が爲めに皇帝は邊境の蠻族と干戈を構へ就中波斯王コスロエス一世とジャスチニアン帝との間に締結(紀元後五二六)せられたる條約に反したる結果(紀元後五七一)波斯帝國と戰端を開き十九年の久しきに及びて尙ほ終局を見ること能はざりき(紀元後五七一—五九一)。之が爲めに帝國の收斂益々急にして人民は戰爭の禍害よりも多く其の間接の結果たる重稅に窘められたり。北は蠻族アヴル人の爲めに殘暴せられ、東は波斯帝國の爲めに侵畧せらるゝの危難に接したるに之と同時にロムバルド人なる蠻族はダニューブ河の中流地方よりは十年前東ゴス人等が通過したる同一の經路を經て遂に伊太利に侵入したり(紀元後五六八)。

先帝が伊太利を恢復して羅馬帝國に統一したりし以來稍やく十五年を經過したるのみなりしがジャスチン二世統治の終末には伊太利半島三分の二は既に羅帝國の領土にあらざりき。

ジャスチン二世は即位後九年にして發狂し、其の後四年にして遂に死したり（紀元後五七）。彼れは一時其の病平癒したりし時チベリウスコンスタンチヌスなる一將を擧げて同僚となしたり。彼れには多くの親戚ありしに拘はらず之を措て彼れを指名したるは彼れの公共心と同時に指名せられたる人の賢才とを證明するに足る可し。之をタイベリアス二世と稱す（紀元後五七―八二）。彼れは羅馬帝國人民の輿望を負ひて位に即きたりしも不幸早世して十分その經綸を行ふこと能はざりき。然れども彼れは帝國の稅を輕くし、以て人民の苦痛を減じ、北方の蠻族アワル人と休戰して專ら波斯帝國の方面に其の兵力を傾けたり。先帝と同じく彼れも亦た其の親戚を措て武將マウリスを後繼者に擧げたり。マウリス在位二十年（紀元後五八二―六〇二）才能なきに非ざりしも遂に帝國の衰退を挽回するに堪へざりき。波斯戰爭はコスロエス一世の子ホルミスダス弑せられ（紀元後五八九）其の子コスロエス二世遁れて羅馬の保護を求め其の位に即くに及びて羅馬帝國と親和し始めて終局することを得たり（紀元後五九一）。然れども マウリスは在位中北方蠻族の反覆常なき爲めに苦しめられたり。スラウ民族が始めて羅馬帝の深憂を爲すに至りしは即ち此時よりの事なりとす。

コンスタンチノープル建設以來東羅馬帝國の皇位は嘗て謀叛者の爲めに僭奪せられたることなく正統の皇帝にして賊手に斃れし者は幸にして未だ其例あらざりしに、マウリス皇帝はその軍隊政署惡しかりし爲めに、兵士悉く之に叛き、叛將フォーカスの爲めに死に處せられたり（紀元後六〇二）。フォーカス位に即きたりしも殘忍酷薄にして內、民心服せず、外は波斯王コスロエス二世恩人マウリスの爲めに復仇を名として戰端を開き、（紀元後六〇三）連年邊境を殘暴し、メソポタミア、シリア、及び小亞細亞を蹂躙して殆んどコンスタンチノープルに迫らんとするに至れり。北部亞弗利加の總督ヘラクリウスは先帝マウリスに事へて波斯戰爭に功を顯はしたる人なりしが竊かにフォーカス帝が親衛隊の長プリスクスに招かれ、且つ皇帝の猜疑を受けて妻女既に禁錮せられたることを聞き遂に意を決して兵を擧げたり（紀元後六

九〇彼れは年老ひて且つ疾ありしが故に同名の長子に艦隊を率ゐてコンスタンチノープルに向はしめたり。少へラクリウスの艦隊ダルダネル海峡に達するや更に之に抵抗する者なく、プリスクスは親衛隊を以て之に内應し皇帝フォーカスは遂に死に處せられたり（紀元後六一〇）。

是に於て元老院及び軍隊は帝國の救濟者としてへラクリウスを歡迎し直ちに彼れを皇帝の位に擧げたり。へラクリウス（紀元後六一―六四一）即位の當時スラウ蠻族はバルカン半島に亂入し、波斯人は北部シリア及びメソポタミアに根據して小亞細亞を永久に占領せんとし、國庫空乏、軍隊解散し、即位後十年間はフォーカス治世中の不幸を繰り返へすのみに過ぎざるが如くに見へたり。紀元後六百十三年波斯の兵シリアの中部を襲ひパレスチンに南進し、明年エルサレムを陷いれ基督教徒九萬人を殺し、聖墓の寺院にありし凡ての寶器は拜火教徒の手に落ちたりき。尋で紀元後六百十六年埃及も亦た波斯の爲めに征服せられてコンスタンチノープルは其の糧道及び財源を切斷せられ明年波斯の軍カルケードンを畧してコンスタンチノープル附近まで進入したり。コスロエスはへラクリウスに書を送りて讓位を勸告するまでに至りしかどへラクリウスはフォーカスとは別人なりき。彼れは一時コンスタンチノープルを抛棄して父の舊根據地たるカルセージ（カルタゴ）に逃れんと思ひしが東羅馬帝國の人民も今は危急存亡の秋なるとを自覺し、基督教會も亦此の戰爭を以て全基督教徒の戰爭なりと宣告し、數千の義勇兵徴集に應じ紀元後六百十八年の末には帝國は再び金庫充實し、軍隊整ひ將校備はるの形勢となれり。然れども西北に於ける蠻族アワル人の來攻によりて數年の間波斯遠征は延期せられ、紀元後六百二十年アワル人に資金を給するの條件にて和約成立し、二年の後漸やく波斯に向つて攻擊の軍を催すとを得るに至れり（紀元後六二二）。

是に於て皇帝へラクリウスは準備全たく整備し、其の子へラクリウス、コンスタンチヌスを擧げて攝政となし、元老セルギウス及びボヌスをして之を補佐せしめたり。へラクリウスは波斯の軍を正面より攻擊するとを避け、小亞細亞の南端を廻航し、キリキア州のイッソス灣に兵を上陸せしめ、カパドキアに進入して小亞細亞に於ける波斯軍とユーフレチス河上に於ける波斯軍との交通を遮斷したり。波斯の將シャールバルズは本國との連絡を保たんと欲して東方に退却し、西部小亞

細亞は忽ちにして波斯の軍隊を見ざりしがシャールバルズは退却中カパドキアに於てヘラクリウスの爲めに大敗し東部小亞細亞も亦た東羅馬帝國に恢復せられたり（紀元後六二二）。ヘラクリウスは波斯の王に向つて和議を提出したりしもコスロエス之を拒絶したりしかば明年大擧して進擊を爲すの部署を定めたり。當時シリア、エヂプト及びメソポタミアは猶ほ敵の手中に存したり。紀元後六百二十三年ヘラクリウスは海上との連絡を抛棄して深く内地に進み、メデアを襲ひ二年の間歷山大王以來曾て羅馬軍の足跡到らざる處を征伐したり。果してヘラクリウスの豫想したる如くコスロエスはメデアを防禦するの必要に迫られて西方に進軍したる其兵を召還するの止むを得ざるに至れり。然れども皇帝の兵は未だ波斯本部に侵入し、其の首府クテシフオンを圍むこと能はざりき。

紀元後六百二十五年ヘラクリウスは南方に轉じて殆んど二十年間波斯に占領せられたる帝國邊境の要塞アミダ及びマルチロポリスを恢復し皇帝と本國との連絡を斷たんとしたる波斯の將シャールバルズに又もや大打擊を與へたり。紀元後六百二十六年兩帝國の勝敗は決せられたり。コスロエスは頑强にして猶ほ敗軍を自認せず、全帝國より兵を徵發して二軍を組織し其の大部分はメソポタミア及びアルメニアに於てヘラクリウスを牽制し、一軍はシャールバルズ之に將として羅馬軍の側面に出でボスポロス海峽に向つて進行したり。コスロエスはアワル人と約し北方よりコンスタンチノープルに迫り海峽の亞細亞及び歐羅巴兩側面より合擊せんとを計畫し、兩軍海峽の兩岸より相望むに至りしかども羅馬の艦隊海峽を扼し、兩軍をして相交通するとを得ざらしめたり。流石はコンスタンチノープルの堅城にて加ふるに衞兵能く防戰し、ヘラクリウスは僅少の兵を遣はし防禦を助けしめたるのみにて其の大軍は波斯の中腹を衝く爲めに用ゐられたり。紀元後六百二十六年八月三日の夜アワル人及びスラウ人は海陸より總攻擊を試みて失敗し遂にバルカン山を超えて退却したり。而して向岸の波斯軍亦た如何ともする能はざりき。コンスタンチノープルは史上に於て前後四回大合圍を受けたりしが之を其の第一回と爲す。

ヘラクリウスは其の返報としてカウカソス山北の蠻族を誘引し、之を放ちてメデア及びアシリアを侵掠せしめたり。是に於て四万の蠻人は全國を殘暴し殆ん

どクテシフオンの城門に迫り皇帝ヘラクリウスはタイグリスの上流地方を占領し明年を期して敵の首府を擊つの準備を爲したり。

紀元後六百二十七年はヘラクリウス大勝利の年なりき。波斯帝國最後の軍隊は將軍ラザテスの指揮によりてニネヾ附近に彼れを要擊したり。ヘラクリウスは騎兵を率ゐ先頭に立ちて自から敵將を殺し其軍を擊破しコスロエスはスシアナの山中に遁逃したり。波斯の兵其王に叛きて王子シロエスを立てゝ之に代らしめたり。コスロエス二世は獄に投ぜられ飢寒の爲めに死亡し、新王コバット二世はヘラクリウスに向つて平和を求めたり。皇帝は自から羅馬帝國の疲弊を察して其の請求を容れたり。波斯王は羅馬より侵略したる殘餘の地を悉く還附し、捕虜の全部を放免し、戰費を償ひ、又は基督教徒に於て最も貴重なるエルサレムの分捕品を返したり（紀元後六二八）。同年五月ヘラクリウスは平和と光榮とを携えてコンスタンチノープルに凱旋したり。皇帝は何人も當初彼れに於て豫期せざりし才能英氣を顯はし、戰役の當初より進擊の態度を取りて敵國を壓倒し、羅馬帝國の邊境を恢復し、又た癒ゆ可からざるの傷痍を波斯帝國に被むらしめたり。滿都の市民は新シピオ（スキピオ）の名を以て彼れを歡迎したりき。

然るに兩帝國が互に鎬を削りつゝありし時意外の邊より拜火教國の波斯を併呑し又は十字架を崇拜する羅馬帝國をして其の領土の半を失はしめんとする一大强敵現はれ出でたり。ヘラクリウスとコスロエスと猶ほ交戰中從來文明國の間に齒せられざりしアラビヤより豫言者モハメッドの書狀兩皇帝に到來し、イスラムと稱する新教を奉信すべきことを命令したり。ヘラクリウスは此際又た新敵と難を構ふることを欲せず、領收書と些少の贈品とを送りて禮遇の意を表したり。コスエロスは書狀を寸斷し、問暇を得ば傲慢なる豫言者を獄に投せんことを誓ひしが却て彼の豫言者の爲めに其の帝國を寸斷せらるゝに至れり。

西洋中世史前編 終